読書科学

第4巻 第4号（通巻 第14号）昭和35年3月30日発行（年4回発行）
昭和31年12月27日 国鉄特別扱雑誌 第3373号

読書における変革の理論　松村康平
板垣葉子

文学作品鑑賞力の評価法
読書教育部会共同研究

「こどもの週刊誌」の読者の姿　河北憲夫

読書による人間形成への一視角
尾崎正惠

マス・コミ教材の研究　佐藤　貢

農家のマスコミ接触　庵逧　巌

日本読書学会編集

14

牧書店発行

目　次

原　著

読書における変革の理論　松村康平・板垣葉子　1

文学作品鑑賞力の評価法　読書教育部会共同研究　5

「こどもの週刊誌」の読者の姿　河北憲夫　29

読書による人間形成への一視角　尾崎正惠　32

マス・コミ教材の研究　佐藤貢　37

農家のマスコミ接触　庵逧巌　43

資　料

高等学校標準書目の研究　栃木県立宇都宮女子高等学校　49

鶴嶺中学校の読書力向上に関する教育実験　岡本奎六　57

会　報　62

第Ⅳ巻総目次　62

日本読書学会役員

会　長　（理事長）石山脩平

副会長　阪本一郎

常任理事　大内茂男　滑川道夫　波多野完治　平沢薫　深川恒喜　松村康平　村石昭三　望月久貴

監　事　裏田武夫　長島貞夫

理　事　井口忠司　伊藤英一　伊藤正勝　岡本奎六　尾原淳夫　加賀栄治　蒲池正夫　小針孝哉　駒田錦一　佐藤宏之助　佐藤泰正　佐藤貢　島崎敏樹　清水正男　荘司雅子　竹内実次　花田哲幸　松本茂　嶺光雄　三宅千代二　村上俊亮　森田宗一　弥吉光長　渡辺茂男　渡辺正亥　渡辺やすえ

「読書科学」編集委員　裏田武夫　大内茂男　岡本奎六　阪本一郎　滑川道夫　平沢薫　深川恒喜　松村康平　村石昭三　望月久貴　渡辺茂男

読書における変革の理論*

お茶の水女子大学

松　村　　康　平**

板　垣　　葉　子

1. はじめに

読書における変革には二つのとらえ方がある。一つは，たとえば，これまで探偵ものばかり読んでいたこどもが，伝記ものを読むようになったというような，読書対象の変革である。もう一つは，読書対象の種類を問わず，読書過程における把握のしかたの変革である。それは読書が多かれ少なかれ，パーソナリテイの次元まで作用する場合の変革であり，読書活動をとおして，人自身の変革につながっていく可能性を負っている。かりにこのような考え方をするなら，この研究は後者の立場に立つものである。

ところで，一般に読書における変革の問題を分析するにあたって，次のような三つの次元がうかび上ってくる。

(a) 刺戟材料の側の分析

作品の種類（小説，評論，論文……等のジャンル）形式，（散文形式，韻文形式）内容，（どのようなテーマをどのように描いているか）構造，（内容にもられた意味を捨象した上での骨組）などの分析。

(b) 読者の側の分析

作品を読むときの読者の生理的心理的状態，一般的な読書態度，欲求，価値指向のしかたなどが，生活の場に対してどのような関係におかれているか。更に読者のパーソナリテイについての分析。

(c) 読者の作品把握のしかたの分析

特定の個人には，固定した把握のしかたの型があるというのではなく，どのような作品をいかなる状況におかれたときに読むかの組み合せによって，さまざまな把握のしかたのタイプがみられるであろう。更にその個人差を考慮に入れた上で，その作品に関してどのような把握のしかたをしているか，についての分析。

(a) は読書における変革を規定する外的要因，(b)は内的要因(c)はそれらの統合的要因とみることができよう。

2. 本研究の立場

これらの要因は，それぞれ独立してあらわれるのではなく，互に絡み合いながら，読書をとおしての人の変革にまで役割をになうことが可能であると思われる。この研究の基本的な立場は，刺戟材料をいかに分析してみても，読者がその刺戟材料に出合って，どのように屈折するか，あるいは素通りしていくかということを問題にしなければ，読書における変革，更にその過程をとおしての人の変革をみていくことはできないのではないか，という点にある。読書における変革は，作品と読者の接触過程に位置づけられる把握のしかたの展開をみていくことによって，はじめて問題となるであろう。

そこで本研究は，どのような作品をどのような状況において読んだとき，変革がもたらされたかという実証的な面を一応捨象して，読書過程における把握のしかたのタイプを大まかに分類し，それぞれのタイプにおける変革の契機となるものをとらえていく手がかりをみいだそうとするものである。

---

* Theory of Revolution in Reading

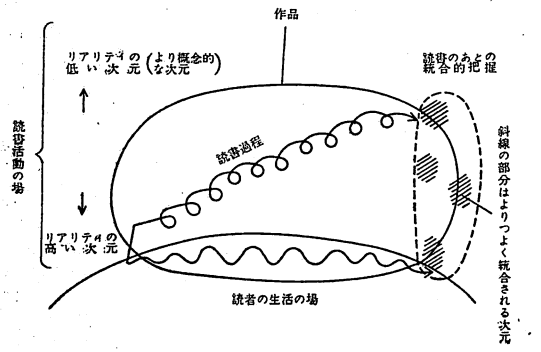
** Kōhei Matumura & Yōko Itagaki
(Otyanomizu Univevsity for Women)

3. 読書過程にみられる把握のしかたの二つのタイプ

読書という活動は，作品によって引き出される概念的な場と，読書の実際の生活の場が，部分的に互にふくみ合う接触点に位置づけることができる。この読書活動の基底をながれるのは，読者自身の起伏であり，この次元を一応リアリテイの高いものとみることができよう。これに対して，作品によってもたらされる読書過程の概念的な場を，リアリテイの低い次元におくことができよう。これらは，作品と読者の接触の場であると同時に，読書過程において読者がとらえ，追っていく一つの目標を形成する場にもなっている。このような読書活動の場に展開していく作品把握のしかたを次の二つに分類してみた。

(a) 連続発展型

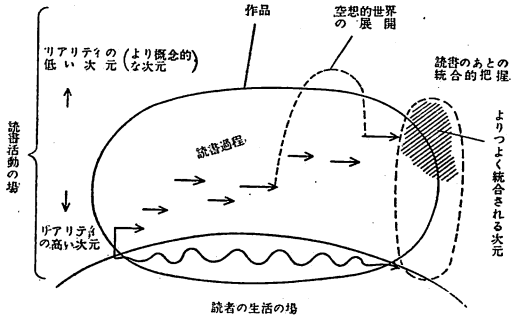
部分的に後もどりしたり，前進したりしながら，作品を連続的に追っていき，読書をすゝめていく型。作品に対する批判や感動などは，その後もどりしたり前進したりしつつ展開するらせん状読書過程の各部分に位置づけられる。この継時的な作品把握の結果として，読書活動の終了したところで一つの統合をおこなう型である。しかし，結果的に統合されるものは，読書過程で把握されたもののすべてではない。特に感動したり，何か新しいものに気付いたり，あるいは多くの疑問をさしはさんでみたりした部分，図式的にいえば，らせん状の屈折が，より複雑で濃密な部分が統合的につよく読者に把握されるであろう。それらは，ある場合には，読者にとって実生活の場と関連したリアリテイの高いものであり，また，ある場合には，認識の世界においてのみ把握されるリアリティのより低いものであるかもしれない。



このような連続発展的な把握のしかたにおいては，読書過程に変革をもたらす契機は，どこに存在しているだろうか。その一つは，読者が読書活動の継時的つみ重ねの結果として，その内容を統合的に把握しうるのは，連続的読書過程のすべてではないという点にある。つまり，そこには，統合のしかたの他の可能性がのこされている。また，連続しながらも後もどりして考えたり，批判したりする部分，つまり連続そのものの屈折の中に，把握のしかたに変革をあたえる契機が用意されうるであろう。

(b) 断絶飛躍型

把握のしかたが前者にくらべて，断絶的であり飛躍的である。読書過程におけるいくつかの部分的要素を，他の要素との関連においてよりも，それ自体としてつよくとらえる型である。このような断続的な把握のしかたにもかかわらず，読書活動をおしすすめていくものは，読者の生活の場との接触点において支えられている。把握のしかたを断絶させたり，飛躍させたりするものは，作品に対する感動や，批判や，あるいは，作品によって刺戟された空想的要因であるかもしれない。そのため，この型は連続発展型にくらべて，読書活動の場と並行した空想の場を発展させる可能性が，より多いといえるであろう。



これらのいくつかの継続的に把握されたものは，読

後において，断絶した要因の同時的把握として統合される。しかしながら，いくつかの要因を同時的に把握し統合することは，より高次の認識の方法であり，実際にそれらを完全なかたちで統合することは困難である。そのため，この型においては，部分相につよく把握された要因だけが残り，他の希薄な要因との関連において統合することができなかったり，あるいは，抽象的概念的認識にとどまって，読者の生活の場との関連によって生ずる統合が困難であったりするかもしれない。つまり，読後に統合的に把握したとかんじるものは，実はリアリティの低い概念的なものに終ってしまう可能性がある。

このような読書過程の把握のしかたでは，変革の契機はいかなるかたちで用意されるであろうか。まず，部分的にとらえられていくものの断絶のしかた，飛躍のしかたを変えることが，読書過程における把握のしかたの変革と，直接につながりをもってくるであろう。更に，読書過程において認識したものを，実際の生活の場との関連にまでひきおろして再認識し，統合的に把握しえなかった他の要因との関係を考慮に入れることが必要であろう。

4. 読書過程に変革をもたらす把握のしかた

ここで，実際の作品のタイプにそくして考えてみると，連続発展型において特徴的な把握のしかたでは，飛躍的な要素の多い作品には適応できず，断継飛躍型において特徴的な把握のしかたでは，単調な作品にはあきてしまうのではないかと思われる。

読書過程に変革をもたらすような作品把握のしかたをするためには，それぞれのタイプに特徴的な枠をはみ出すような方法で読むことが必要なのではないだろうか。つまり，連続的に信把しながら，なお断絶したり飛躍したりすることが可能であり，あるいは，断続的に把握しながら，なお連続的にとらえることの可能なよみ方である。このように態度が内面化し，実際の作品にのぞんで，これまでの把握のしかたの枠をはみ出すような方向でとらえうるというように，読書態度として一般化されたとき，刺戟材料との出合いにおいて，さまざまな屈折をもちながら変革が実現していくであろう。変革の契機は，これまでの適応の方向，均衡の状態を破ることによって用意され，そこではじめて読書活動がパーソナリティの発展や変革をもたらすことに生きた意味をもつことになる。

5. 把握のしかたのタイプと実際の作品との関係

次に，把握のしかたの二つのタイプと，実際の作品との関係を考えてみよう。きわめて大まかな意味においてではあるが，連続発展型と散文的要素，断絶飛躍型と詩的要素を対応させてみることができるのではないだろうか。ここでは，散文とは何か，詩とは何か，の問題は省略するが，散文の場合，意味のつながりによって意味を展開させるという性格が，連続発展型の読書過程に対応してとらえられる。詩においては，言葉はその記号としての役割や本来の意味をもたず，言葉と言葉の組み合わせによって生じるイメージの断絶によって，次のイメージを展開させるという性格が，断絶飛躍型の読書過程に対応して考えられる。しかし，連続発展的把握のしかたで散文を読み，断絶飛躍的把握のしかたで詩を読むというかぎりでは，読書過程の変革にあまり多くを期待することはできないかもしれない。そこで，連続発展型の把握のしかたで詩を読み，断絶飛躍型のしかたで散文を読むことが，逆にそれぞれのタイプの把握のしかたを変革，ないしは発展させる契機をつくるのではないかと思われる。

更に読むことと，書くこととのつながりによってとらえられる読書の変革が問題になる。一方では散文を書き，他方では詩も読む，あるいは，一方では詩を書き他方では散文を読むという二つの態度を対照させながら読書活動をすすめていくときに，散文を書くことのゆきずまりが詩を読むことによってきりひらかれたり，あるいはその逆の関係が発展する可能性をもたらす。このように読書を媒介として，その把握のしかたを変革していく

ことによって，具体的な生活の場や，人自身の変革をもたらす契機があたえられるであろう。そのためには，散文と詩の両者のもつ異なった要素にふれながら，実際に書くことの体験をもふくめて，これまでの把握のしかたの枠を破っていくことが必要である。

6. む す び

きわめて大まかに，読書過程における把握のしかたを二つのタイプに分けて考えてみたが，いささか図式的にすぎたかもしれない。しかし，読書における変革の問題を考えるにあたっては，読者が作品にどのように感動したか，いかなる批判をしたか，というような現象的側面をみるだけではなく，その根底にある把握のしかたの構造をとらえなければならない。更にそれらが，読者のパーソナリティや生活の場に放置される欲求といかなる関係におかれているかをみなければならない。

変革は均衡化へむかう力を破る方向においてはじめて実現する。それ故，読書過程における把握のしかたの変革は，個人において現在特徴的な把握のしかたの枠組を破ろうとすることが第一の条件となる。そこで，これらの条件を具体的な今後の実験をとおして導き出し，どのようにしてこれまでの把握のしかたを超えて読書過程が変革したかの実証的研究とからみ合わせて，読書過程における変革の理論を更におしすすめて考えていきたい。

—第3回研究大会発表—

文学作品鑑賞力の評価法*

読書教育部会共同研究**

I はじめに

最近，読書鑑賞力，あるいは，文学鑑賞力の指導ということがさかんに叫ばれるようになってきた。これは，読書指導における文学鑑賞力の指導の重要性が認識されてきたことにほかならない。たしかに，読書鑑賞，あるいは文学鑑賞の問題は読書指導のいろいろの領域のなかで最も進んでいない部門の一つであろう。読書鑑賞（文学鑑賞）の指導の研究が比較的おくれている理由としていろいろ考えられよう。読書鑑賞（文学鑑賞）の指導の仕方のむずかしさも一役買っていよう。さらに大きな問題の一つは読書鑑賞力（文学鑑賞力）の評価の困難性があげられる。これまでの国語教育においては，たゞ「鑑賞せよ」とか「感想をのべなさい」という程度のことしか行われていない。さらに一歩進めて，その鑑賞なり，感想なりを評価する手掛りをほとんどもたないのが現状である。どんな鑑賞の仕方がよいのかどんな感想文がよいのかその規準となると非常にあいまいである。全国学生感想想文コンクールなどというものがあってもその評価の規準となるとなかなかむずかしい問題を含んでいる。また，客観テストによる評価法なども入学試験の問題として多少はこゝろみられてはいるが，まだ広く国語教育全般で用いられる状態ではない。

このようなわけで，わたしたちはまず，読賞鑑賞（文学鑑賞）の指導の第一歩として，評価の問題を取り上げることにした。それも評価のための評価でなく指導につながるためのものということに力を入れた。もっとも読書鑑賞とは何か，また文学鑑賞の下位の能力としてどのようなものがあるかという問題も大切な問題であるが，一応それらは他にゆずるとして，読書鑑賞力の評価の方法としてどのような方法があるか？　の検討から始まった。

そのためにこれまで我国で用いられていた読書鑑賞力評価の方法，また欧米で用いられていた評価法についていろいろ調べることから出発した。その結果，のちにのべるようなさまざまな方法のあること，さらにそれらの評価方法はいずれも一長一短のあること，また，たゞ一つの評価方法だけでは読書鑑賞力（文学鑑賞力）を全面的にとらえることの困難であることがわかった，とにかく，評価の目的や場面に応じて二，三の適切な方法を併用することの必要性も明らかになった。

何はともあれ，これまでの諸方法を整理しいろいろ検討した結果，一応次の諸方法が可能であるということになった。

1. 客観的方法
2. 主観的方法
3. 作品序列的方法
4. 読書反応的方法

なお，個々の方法の詳細については各方法の発表のところでのべるので，こゝでは項目だけをあげるにとゞめておく。

そこで，わたしたちは次の段階として，読書鑑賞（文学鑑賞）の上述の方法を用いて，東京都内の中学生約100名（W中94名，O中100名）を対象に調査し，鑑賞力評価の方法として各評価法の妥当性，信頼度等の検討を行い，さらに各評価法相互の関係の考察を行うことになった。（佐藤泰正）

* Some Methods to Evaluate Literature Appreciation
** Reading Education Study Group, JSSR

II 客観的方法

(1) 散 文 の 部

① まえがき

客観的方法とは，調査の方法，問題の形式が客観的な性質をもつということである。

文学作品を対象とした「鑑賞力」は，国語の学力分析の上からもきわめて重要であり，また，鑑賞学習の評価の面でも必要である。しかし，現実には，まだ分析が不十分であり，厳密な評価が実施されることも少い。また，まれに実施されても，それは，教師の主観によって評価されている（感想文の評価など）。読解力等については，ほとんどすべての場合，客観的方法がとられているのであるから，観賞力の評価にも読解力と同じような客観的方法を適用することを考える必要がある。

② 問題の形式

鑑賞力の客観テストが，今まで，全く行なわれていないわけではない。たとえば，各府県で実施されている高校進学のアチーブメントテストを概観すると，数は少ないが，この困難な面を打開しようという試みがなされている。このような場面におけるテストであるから，きわめて，ひかえめに，論議の対象となるのを極力さけうる範囲でという消極的な窮屈な態度であるけれども，例年いくつかの府県が提出している。

その問題形式は，大別すると次の二つである。

(1) ある作品と，これについての感想文を数列列挙して，どの感想文が最もよいかを指摘させる形式。俳句短歌のような短章に属するものは，作品と感想をそれぞれ数項ずつ挙げて，一致するものを指摘させるという「組み合わせ」の応用形式もある。

(2) ある作品の読後の情緒的印象として予想される内容を分析し，分割して何項か掲げ，被験者めいめいの印象と一致，あるいは近似しているものを指摘させる形式。これにも前項(1)の後にあげた「組み合わせ」形式の変形がある。

大別して，この二つの形式である。この調査でも，まずこの二つの形式を採用して，問題を作成した。(A)散文の部の問題三は(1)の形式(A)の問題一，二は(2)の形式によるものである。

③ 問題作成上の配慮

前節で述べたように，問題の形式は，従来行なわれてきたものをモデルとしたが，現実の問題作成にあたって，考慮くふうした点をあげると，

(1) 読解の抵抗のある問題（作品）をできるだけさけた。ことに，文字，語彙のむずかしいものをさけ，止むを得ないものにはふりがな，注記を加えた。

(2) 教科書その他で，予定した被験者が目にふれやすいものをさけ，未知初見の文章を選ぶようにした。

(3) 選択肢をできるだけ多くして，でたらめな解答のあたる可能性を少なくした。

(4) なるべく各種の形態（随筆・小説）の文章，また各種文体の文章を選び，一方にかたよらないように注意した。

(5) 読解力的な要素を分離し，主として情緒的印象を対象とした。主題等についての問は，印象の方向を暗示するおそれもあり，他の調査(読書力，感想文)によって，資料を得られるという予想であった。

問　　題

(　　)学校(　　)年(　)組　　氏名(　　)

1．次の文を読んで後の問に答えなさい。

夕方から空が晴れあがって，夜は月が明かるかった。N君を訪ねるつもりで，ひとりぶらぶら公園の中を歩いて行ったが，あの広い芝生の上には，人も見えず鹿も見えずただ白々と月の光のみが輝いていた。南大門の大きい姿に驚異の目を見張ったのもこの宵であった。ほの黒い二層の屋根が明かるい空にくい入ったようにそびえている下には，高い門柱の門から月明に輝くおぼろな空間がしきられているだけに，また特殊な大いさをもって見えている。それがいかにも門という感じにふさわしかった。わたしはあの高い屋根を見上げながら，いまさらのように「偉大な門」だと思った。そこに自分がただひとりで小さな影を地上に印していることも強くいしきにのぼってきた。石段を上って門柱に近づいて行く時には，たとえば舞台へでも出

ているような一種改まった緊張した気分になった。

問　この文章全体から受ける感じはどうですか。次のうちからあなたの感じと一致しているものに○を一致しないものに×をつけなさい。

1　軽いユーモアを感じる文である。
2　ごつごつしていて力強い感じのする文である。
3　おだやかなうちに引きしまった感じのする文である。
4　あわただしくにぎやかな感じのする文である。
5　ゆったりとしてなごやかな感じのする文である。
6　静かに澄みきった感じの文である。
7　明かるくたのしくなるような感じのする文である。
8　くらい，ゆううつな感じのする文である。
9　もの悲しい感じのする文である。
10　さびしく寒々とした感じのする文である。

2．次の文を読んで問に答えなさい。

だんだん大きな木がきり倒されていった。ついにかれの隣に立っていた木も切られ出した。それは見たことのない非常に大きなのこぎりだった。一間ほどの長さで，その両端に柄についていた。腰をおろしたふたりが足を根にふんばりながらそれをひいた。ズッーズッ，ズッーズッた静かに切り進む。その休みない静かな進行はその木の死をいっそう不可抗なものに思わせた。

かれの友はしょうようとしてひとことも口を聞かなかった。かれは厳粛な感じにうたれた。

幹は一分傾いた。労働者は立ち上って静かにその場を離れた。うめきとともに木は倒れていった。どーんというはげしい地響きがした。その辺の小さい木や草があおりを受けて一度になびいた。そしてなおしばらくはざわざわと騒いだ。

切校がならんでいる。かれはそれを眺めながらさびしい気持になった。かれは，今まで自分のした努力がこれだけで終るものならという感情も起った。最初虫や小鳥が恐ろしかった時代から，ナイフ，なた，のこぎりとそれらがひとつひとつ恐ろしいものとしてかれの前に現われてきたことを思った。小鳥を恐れていた時にはナイフを知らなかったことを思った。そしてナイフを知って恐れだした時には，その上になたのあることは考えなかったことを思った。なたの上にはのこぎりがあった。そしてすべてを通過したと思った時に，かれはまたさらに大鋸というもののあることを知った。かれにはもう根気はなかった。同時に不満もなくなった。

しかしかれは過去を顧みて徒労に帰したその努力を悔いはしなかった。徒労という気もしなかった。かれにはのこぎりを通過しようとしていた時代のあせる気分は全くなくなった。そして同時に大鋸を知る前の少しだらけたような安心も今はなくなった。それはいかにもさびしかった。しかしそのさびしさのうちにかれはある安定を得た。

〔注〕大　鋸――おおのこぎり

問　この文章を読んで，どんな感じを受けましたか。

つぎの15項のうち，あなたの感じと合っているものには○，ちがっているものには×をつけなさい。

（文章全体から受けた感じは）

1　心がひきしまるような感じがした。
2　軽いユーモアを感じた。
3　にぎやかで，あわただしい感じがした。
4　落ちついた澄みきったような感じがした。
5　うるさく，そうぞうしい感じがした。

（読んだあとで）

6　あっけなく，つまらない感じがした。
7　しみじみと考えさせられるような感じがした。
8　勇気づけられたような気持になった。
9　はればれとして，あかるい気持になった。
10　くらい，ゆううつな気持になった。

（文章の書き表わし方については）

11　やさしく女性的な感じがする文章だと思った。
12　力強い男性的な感じがする文章だと思った。
13　だらだらした歯切れの悪い文章だと思った。
14　ごたごたした感じの文章だと思った。
15　すっきりした感じの文章だと思った。

3．A，B二つの文章を読んで後の問にこたえなさい。

A．街道へのおり口の畑でもふたりして芋を掘っている。隣の桑畑は葉がおおかた落ちて，あたりへもそれが散らばっている。青い弱々した小麦がはえ出している。小麦は芋の間に二うねずつつくってある。芋の茎はべったりとゆでたようである。女は芋の茎を菜刀でもとから切ってさきへ出る。菜刀というのはほうちようのことである。あとから男がくわの先で芋の株を掘り起す。ぴかぴかと光るくわの先を，ざくっと芋の株へ斜めに突き立てて，ぐっとくわを持ち上げると，大きな土のかたまりがふわりと浮き上がる。くわをそっと抜いてさきの株へ移る。小麦に

さわらぬようにきわめてていねいに切ってはさきへさきへと行く。女は茎を切り終わると，あとへもどって，掘ってある大きな土のかたまりを両手で二尺ばかり上げて，どさりと打ちつける。細かな土がほぐれて，こごった子芋のかたまりから白い毛のような根がぞろっと現われる。それから芋と芋とをぶりぶりとはがして，やがて俵を立てて入れる。そうして穴の土を手の先でならして，次のかたまりをほぐす。かわいた畑に湿った丸い穴の跡が一つずつふえて行く。日光がその上をあとあとから細かにかわかして行く。

B．私は生来の朝寝坊だから，毎朝二度三度起こされても，なかなか起きない。やさしくしていては際限がないので，母がしまいには夜着をはぐ，これでさすがの朝寝坊も不承々々に床を離れるが，しかし大不平だ。額で母をにらめて，ずがにが泡を吐くように，ぶつぶつ言っている。ポチは朝起だから，もうその時分にはとっくに朝飯もすんで，ひとっきり遊んだところが，私の声をききつけると，どこにいてもいちもくさんに飛んでくる。

これで私の機嫌も直る。急に現金ににこにことなって，急いで庭へ降りるところを，ポチがすかさず泥足で飛びつく。細いにんじんほどの赤ちゃけた尻尾をけんめいに振り立って，うれしそうに顔を見あげる。見おろす目と目とぴったりと合う。たまらなくなって私が横だきにひん抱く。ポチは抱かれながら，身をもがいて大暴れに暴れ，私の手をなめ，胸をなめほおをなめ，なめてもなめてもなめ足らないで，悪くすると，口までなめる。父が顔をしかめてきたないきたないという。なるほど考えてみればきたないようではあるけれども……しかし，私はうれしい。止められない。

〔注〕 生 来――うまれつき

問 A，B二つの文章を読んでの感想が次に書いてあります。

これらのうち，主としてAの文章にあてはまるものと，主としてBの文章にあてはまるものとを，それぞれ二つずつ選んで，答のらんへ記入しなさい。

1 死んだような灰色の世界を細かにうつし出そうとしている。読んでいるうちにゆううつでやりきれないような感じになる。

2 たのしく，あたたかい感じがして，読んでいて，自然にほおえましくなるような文章である。明かるいユーモアを感じる。

3 だらだら，ごたごたと書いてあって，読んでいるうちに，いらいらしてくるような感じがする。

4 はじめから終わりまで短い文を重ねて，歯れ切よく筋を運んでいる。その運び方は，順序よく，なだらかで，あわただしい感じがしない。文章にむだがなく全体がひきしまっている。

5 ぶしようでわがままで，ひねくれた主人公の性格がいやになった。

6 ゆったりした調子で，のんびりした，すなおな感じがする。早朝の静かでなごやかなふんいきがよく表わされている。

7 観察がするどく細かで，情景をよくとらえて，眼前にうつし出している。また，静かに，澄みきった作者の心持もよく表現されている。

8 だらだらごたごたと書かれていて，読んでいるうちにいらいらしてくる。つまらない感じがする。

9 するどく冷たい感じがして，読んでいるうちに寒々としてくる。早春のはだ寒い田園風景のふんいきがよく表現されている。

10 テンポの早い，にぎやかな調子の文章である。その情景が生き生きと映し出され，作者のおどるような感情につりこまれる。

答

文 章	番	号
A		
B		

(備考) 正答としたものは次のようである。

正答表

1 2 3 4 5	6 7 8 9 10	1 2 3 4 5	6 7 8 9 10
××○×○	○×○○○	○××○×	×○○○×

1112131415	AABB
×○××○	4 7 2 10

④ 調査の実施

昭和三十四年七月中旬，東京学芸大付属大泉中，および，杉並区立和田中の第二学年各二学級（約194――男女ほぼ同数）を選び実施した。（以下「○中」「W中」と略称する）

⑤ 整　理

個人別・問題別の得点が一覧できるような図表を作成し，これをもとにして，下にあげるような結果を出した。

⑥ 結果，ならびにその解釈

(ア)正答数（各問題ごとの得点）

一

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2
O中(100)	97	89	86	100	22	90	95	93	74	62	87	96
W中(94)	30	31	82	94	48	89	81	78	57	49	78	84

二

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
O中(100)	96	53	95	96	85	35	5	71	75	65	95	99
W中(94)	82	54	80	90	82	55	26	63	78	72	92	81

三

	A1	A1	B2	B2
15	64	77	87	47
49	49	69	62	42
66				

(注) (1) 誤答のきわめて少なかったものは，一の4, 6, 二の6, 13

(2) 誤答のきわめて多かったものは一の5 二の4, 8, 9, 15, 三のB_2 (1)はやさしすぎるものであり，(2)はむずかしすぎるか，または問題の妥当性を再検討すべきものである。

(3) 一般にO中は，W中より得点が高い（(イ)，(オ)参照）のに，一の5，二の4, 8, 9, 12, 15のように両校の得点比が逆の現象を示しているのは，問題を検討しなければならないであろう。ことにその大部分は，上の(2)であげたものと一致している。

(イ) 素点分布表（O中～94　W中94）

点	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
W中	0	1	0	0	2	3	1	3	2	9	12	17	7	9
O中	0	0	0	0	0	0	2	1	4	12	6	17	14	16

点	24	25	26	27	28	29
W中	19	7	3	0	0	0
O中	17	8	4	2	2	0

(注) この表によって見れば満点29のうち，W中は21点以上が62名，O中は80名を占めている。全般にやさしいということ，またO中はW中よりも分配曲線の山が右にずれ，優位にあること見がられる

(ウ) 学校差　男女差

(A)

O中	平均	22.57
W中	平均	21.02

(B)

	O　中	W　中
男	22.01	20.4
女	22.08	21.9

(注) (A) 学校差は，29点中1.5で予想より少ない。((イ)の項も参照

(B) 男女差はO中は，ほとんどないが，W中には1.5見られる。「女子が優位であろう」という予想を裏がきするものである。

(エ) Good～Poor Analysis

	問	一 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	二 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	三 A_1	A_2	B_1	B_2
1．O中 (25人ずつ)	G	1	1	1	0	19	0	0	0	2	2	2	1	0	8	0	0	1	10	6	1	2	8	0	0	6	0	3	0	11
	P	1	5	5	0	20	3	4	4	11	15	5	0	4	15	4	2	7	18	9	12	8	13	5	6	17	10	17	7	18
2．W中 (25人ずつ)	G	3	7	2	6	14	0	4	2	8	11	0	0	1	4	2	0	2	4	14	2	2	3	0	0	0	4	12	2	11
	P	10	9	7	0	9	3	3	6	11	10	10	8	7	19	12	4	8	15	19	14	7	7	1	5	13	16	16	14	20
3．両校総合 (50人ずつ)	G	4	8	3	0	33	0	4	2	10	13	2	1	1	12	2	0	3	14	20	3	4	11	0	0	6	4	13	2	22
	P	11	14	12	0	29	6	7	10	22	25	15	8	11	34	16	6	15	33	28	26	15	20	6	11	30	26	33	21	38

(注) (1) 上表は1.2は学校別に，3は総合して，それぞれ被検者の約¼ずつを Good 群と Poor 群に分けて示したものである。

(2) この表に示す数字は，誤答の数を示したものである。

(3) 3（総合）を例にとれば，一の問1については，誤答が Good 群50人中4人，Poor 群50人中11ということになる。

(4) これによって問題の検討を各問ごとに試みるためのものである。

すなわち (A) G群，P群ともに誤答の数の少ないもの，(B)ともに多すぎるもの，(C)両群で開きの多いものの三つに分けると，(A)はやさしすぎる問題，(B)はむずかすぎるか，または，妥当性を欠くもので，問題として不適当なものである。(C)のうち，両群の開きの多いものほど，良い問題といえる。（G群とP群を判別した要素になっているのだから）

○ この方法に従って検討してみると（太字のはとくにはっきりしているもの）

(A)に属するもの…一の**4**，6，**7**，8，二の2，6，13

(B)に属するもの…一の5，三のB_2（ことに前者はマイナスの反応を呈している）

(C)に属するもの…一の9，10，二の1，3，**4**，5，7 8，**10**，11，14，15

三の$\mathbf{A_1}$，$\mathbf{A_2}$，$\mathbf{B_2}$（G－P＞10であるもの）

これによってみると，29問中半数の15問は大体妥当な問題設定のようである。(A)に属するものは「やさしい問題も入れる」という当初の方針であったからよいとして，(B)に属するものについては問題作成が妥当でなかったということになる。

○以上の検討は〔3・両校総合〕によって試みたものである。1，2，は各校ごとの特殊事情を見るためのものであるが，この検討については省略する。

(オ)

読書力との関連

読書力 test で45点～44.5を Good 群，28.5～38点をPoor 群とし，各20人ずつを選んだ。この40 人が，鑑賞力客観テスト（散文）で，はたしてどのような位置を占めるかを追究して，読書力と鑑賞力の相関を見ようとした。鑑賞力のほうは，平均点(22.57)以上を Good，以下をPoorとして分けた。（読書力

テストはO中のみについて家施したので，この部分の資料はO中だけ)

その結果を表示すると，

(A) 読書力，鑑賞力ともに Good に入るもの 9

(B) 読書力が Good 鑑賞力 Poor に入るもの 11

(C) 読書力が Poor 鑑賞力 Good に入るもの 8

(D) 読書力，鑑賞力ともに Poor に入るもの 12

のような結果になる。

深い鑑賞は正しい理解が前提になるということは従来考えられて来たところであるが，(B)，(C)のような者が半数近くいることは，どう考えたらよいか。両者の中間になお他の複雑な要素を追究する必要があろう。

なお，この調査では，この問題についての直接的な読解力テストを省いたけれども，これはぜひ入れるべきであったと反省される。それとの関連を見れば，また異った資料が得られるかもしれない。

⑦ 問題設定についての反省

ア．問題文の直接の読解力をあわせて調査しておくべきであった。

イ．読後の情緒印象を固定さるためには，もっと長文にすることが必要である。

ウ．選択肢が多すぎた。むりに多くしたため，「まぐれ当たり」はさけられたが，○×の中間的なもの，わりきれないものが混入した。

エ．一々の問題については「⑥結果の処理」の項で述べた通り。

⑧ 今後の研究方向

1 読解力（直接的な）との関連を追究する。

2 問題の検討を経て，検査対象を拡大し，標準的尺度に近づけたい。

3 実験材料としての文章の形態，文体の種類を拡大し，特殊性，相互関連を追求する。

4 異った学年にも実施して発達段階を探究する。

5 問題の形式をさらに考案し，類型を考えたい。

(勝又昌義)

(2) 短 詩 の 部

1. は じ め に

短詩が客観的方法の素材として果して適しているかどうかという点では多くの問題点がある。中学生を対象として行う研究だから解釈上の点など相当無理なことがはじめから推測された。にもかゝわらずあえて短詩を選んだのは，問題点があるならその問題点の実体をはっきりつかむことが出来れば，後の研究の礎石として大いに有意義なことだと考えたからである。

ところでこの報告はその中間報告である。問題点の実体をつかむそのいとぐちを見つけたという段階である。今第二の段階への準備を進めている。何れまた発表の時期があると思う。

2. 問 題 作 製

問題作製に当っては

イ．解釈上の点でむずかしいと思われるものは極力避けること。そのために予備テストを行い問題をしぼること。

ロ．教科書を調べて，教材として使われている作品は極力除くこと。

ハ．問題に使用する語句は予備テストで出た生徒自身のことばをなるべく生かすこと 。

ニ．大人の世界観から生れた作品で，生徒の世界観から非常に遠いような作品は極力除くこと。

ホ．読解力と鑑賞力は平行的なものだが，感動の中心性質を問う形に統一すること。その感動の起る前提となる解釈上のことは一切ふれぬこと。

このような点を考慮の上三種類の問題を作ってみた。すなわち

(1) ずばり感動を問うもの 例…問一

(2) 感想・批評文を与えて選択させるもの 例…問四

(3) 両者の組合せによるもの 例…問六

勿論，工夫検討すればもっと巾広い質問形式ができると思うが，それは後の問題として先へ進むことにした。

3. テスト問題

次に載せた22問が今回行ったテストの全問題である。○印をつけたものがその正答である。

実施に当っては，杉並区立W中2年89名，大学附属O中2年103名と，比較考察資料としてW中3年80名を被験者として行った。

問　題

(　　)学校(　　)年(　　)組　男・女

氏　名(　　)

1　次の俳句，短歌の鑑賞文を読んで，最も適当なものを選んで，その記号を○でかこみなさい。

問1　北風や浪にかくるる佐渡ケ島

イ　大海原に漕ぎ出した船，大きな波にゆられる壮快さ，波間に佐渡も出たり消えたり，いかにも勇壮な気分が感じられる。

㋺　寒風に怒りさわぐ冬の海のすさまじさと，その中に浮いた孤島のさびしさが出ている。

ハ　ゆうゆうたる大海，のんびりした気分を感じさせる。

ニ　静かな句調の中に落ちついたふんいきがよくあらわれている。

問2　今日ひょいと山が恋しくて山に来ぬ
　　去年腰掛けし石をさがすかな

イ　久々に山をたずねて思い出の地をさがす心の躍動が生き生きと歌われている。

ロ　ずいぶん変ったことがらが形にとらわれない自由さの中に調子よく歌われている。

ハ　一つのことに夢中になっている気持がすなおにあらわれている。

㋥　なにげない言いあらわしの中に思い出につらなるしみじみとした深い感情がこめられている。

2　次の俳句を鑑賞し，後の問に答えなさい。(答は一つだけ選びその記号を○でかこみなさい。)

イ　ひらひらと帰省の馬車に山の蝶

ロ　山門にかっと日うかぶ紅葉かな

ハ　赤とんぼつくばに雲もなかりけり

㋥　山の色釣り上げし鮎に動くかな

ホ　島々に灯をともしけり春の海

問1　すみきったひろびろとした感じを持たせる句はどれですか。

イ　ロ　㋩　ニ　ホ

問2　なつかしさ喜びといったものを感じさせる句はどれですか。

㋑　ロ　ハ　ニ　ホ

3　次の短歌を鑑賞し，後の問に答えなさい。(答は一つだけ選びその記号を○でかこみなさい)

イ　思はずもさけびあがれり祖国の灯右舷はるかに見えそめしとき

ロ　春の山ひねもす焼きし人々が松明ともしかえり来る見ゆ

ハ　姉がくれし栗の実食えばその家も家の前なる栗の木も見ゆ

ニ　雪降れば山より下る小鳥多し障子のそとに日ねもす聞こゆ

ホ　子をしかれば泣いて寝入りぬ口すこしあけし寝顔にさわりてみるかな

問1　なつかしい思い出にひたっている感じを持たせる歌はどれですか

イ　ロ　㋩　ニ　ホ

問2　にじみ出る愛情を感じさせる歌はどれですか

イ　ロ　ハ　ニ　㋭

4　次に並べた句の批評文を後に書いてあります批評文とぴったりする句を一つ選んでその記号を○で囲みなさい。

イ　電線にいっぱいならぶつばめかな

ロ　つばめの巣日に日に太る土間をはく

ハ　軒端より飛び去るつばめ雨の中

ニ　校庭の忘れ草履やつばめとぶ

問1　ひっそりした気分が感じられます。その中をつばめがしきりに飛ぶ。こうした情景です。

イ　ロ　ハ　㋥

問2　作者はつばめに対してたえず心を注いでいます。つばめに温い愛情をよせて立ち働く作者の姿が目に見えるようです。

イ　㋺　ハ　ニ

5　次に並べた短歌の批評文を後に書いてあります批評文とぴったりする句を一つ選んでその記号を○で囲みなさい。

イ　隣室に書よむ子らの声きけば心にしみて生きたかりけり

ロ　石がけに子ども七人腰かけてふぐをつりをり夕焼小焼

ハ　遠足の小学生徒有頂天に大手ふりふり往来とおる

ニ　霜やけの小さき手して密柑むく我が子しのばゆ風の寒きに

ホ　父と母といづれがよきと子に問へば父よといひて母をかへりみぬ

問1　一読おのずから微笑のわき上ってくる作品である。作者の生き生きと元気な子供にそそがれる愛情の眼が感じられる。

イ　ロ　㋩　ニ　ホ

問2　単純な表現の中にも子を思う人間本来の真実味があふれている。厳しゅくさを感じる調子である。

㋑　ロ　ハ　ニ　ホ

6　次のABCDの俳句を読み，左に記した説明の下の（　）の中に適当と思う句の記号を書き入れなさい。

A　町空のつばくらめのみ新しや

B　翅わっててんたう虫の飛びいづる

C　かたまって薄き光のすみれかな

D　きつゝきや落葉をいそぐ牧の木々

問1　季節の移り変りのはっきりしているのはどの句とどの句ですか

（ A ）（ D ）

問2　背景の柔かな明るさを感じさせる句はどれですか

（ C ）

問3　対象の微妙なうごきを感じとった句はどれですか

（ B ）

問4　次の文は右の四句の鑑賞文の一つです。どの句の鑑賞文ですか。

雄大な山中の景の中で，これは些細なものに目をとめたものであるが，これほど美しくほのかに，また暖かく言いとられたということは驚異に値する。

（ C ）

A　日やけせし疲膚に白地のきはだちて祭楽しむ農家の主婦ら

B　春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも

C　酪農の夢語る我のかたはらに酒をのみつゝ涙ぐむ父

D　みづうみの氷はとけてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

7　右の短歌をよく味わって各問に答えなさい。答は（　）の中にその歌の記号を書き入れなさい。

問1　季節感を感動の中心に置いている歌はどれとどれですか。

（ B ）（ D ）

問2　健康的な明るさを感じさせる歌はどれですか。

（ A ）

問3　対象の動的なものに感動をとらえている短歌はどれですか。

（ A ）

問4　次の文は右の四つの歌の鑑賞文の一つです。どの歌の鑑賞文ですか。

表現はそぼくであるが，年代を異にするふたりの人間のすがたが浮彫りのように見えてくる。

（ C ）

8　イ　くれないの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかは春雨の降る

ロ　ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

㋩　襟垢のつきし袷と古帽子宿をいで行くさびしき男

ニ　昼ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり

㋭　濠端の貨物置場の材木に腰かけて空を見る男あり

ヘ　寂しければ人にはあらぬ雲にさへしたしむ心しばし湧きたり

ト　大漁の鰹の腹も背も光る月夜の浜の人のどよめき

次に書かれた文を読んで後の問に答えなさい。

こういう世界はそれまでの歌人は誰も歌おうとしなかった。現実の生活の片すみに忘れさられた人間世界に眼を向けている。……

問　これは前田夕暮という歌人の歌を評した文の一節です。右の七首の中に，その作者の特徴のよくあらわれた歌が二首あります。歌の調子，感動の中心等を評文と対照しながら，夕暮の作品と思うものの記号を二首○で囲みなさい。

4.　実施後の処理

(1)　学校差

O中2年とW中2年の間にはかなりの差がある。W中3年とO中2年とがほぼ同じである。これによってO中の特殊性が第一に目につく。このO中の特殊性の要因，W中3年と2年との間の差の要因を究明できれば有意義である。

学　校	全二十二問の正解平均	正　解　率　%
W　中	12.2	55.5
O　中	15.8	72.0
学 校 差	3.6	16.5
W中三年	16.0	72.8

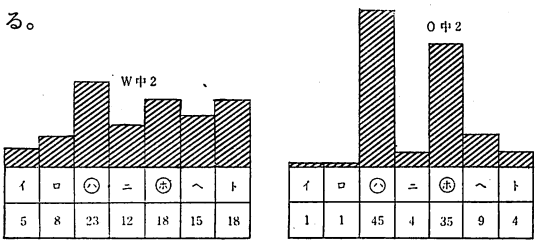
両校の各問における正解率一覧を表に作ると次2のようになる。

正　解　率　一　覧　表

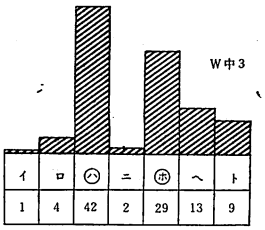
	一		二		三		四		五		六					七					八		
	問一	問二	問一	問二	問一	問二	問一	問二	問一	問二	問一	問二	問三	問四		問一	問二	問三	問四				
W中2年	51	46	60	57	25	83	47	69	41	27	67	73	57	50	32	73	91	73	6	74	49	25	%
O中2年	84	55	69	92	28	100	82	92	67	28	82	81	78	76	54	94	98	76	1	94	88	69	%
差	33	9	9	35	3	17	35	23	26	1	15	8	21	26	22	21	7	3	−5	20	39	44	%

両校の平均差は16.5%あるのだから，その差に近い開きを持っている問題は大体適当なものと考えられる。そこで，差が大きすぎたり小さすぎたりする問題はどのような根拠があるのかを検討してみることにしよう。

先ず，問八について見ると解答分布は次のようになる。

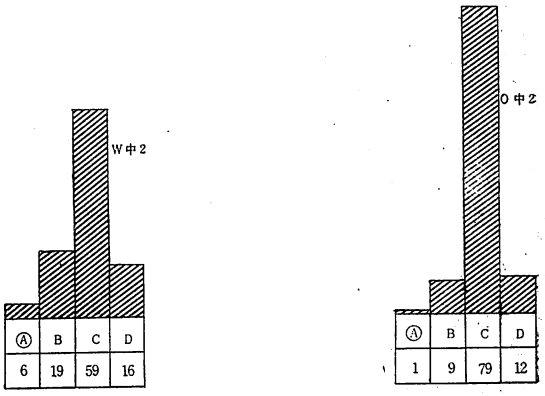


O中は㋩・㋭に80%集中しているがW中は41%にすぎず㋺・㋩・㋭にかなり散っている。この傾向は明らかに読解力の不足からくるものである。それは同じ問をW中3年にやらせてみると説明できる。次がW中3年のものだ



が，O中の場合と極似してくる。この傾向は二番の問二，一番の問一にも同じように言える。読解に難のある問題で2年生対象では今少し考えねばならぬものを含んでいる。

今度は逆に学校差の最も少いものを比較してみよう。七番の問三がその代表である。解答分布は次のようになり，正解が殆どなく，大部分がCに誤っている。このように問題が極めてむずかしい場合学校差は出ない。しからばなぜむずかしいのか。この場合は質問の順序に問題があるように思える。というのは，解答の選択肢が四つ



あり，前の問でB・D・Aと出てくるのだから当然次はCと推測してしまうというわけである。頭のよい生徒がよく陥る問題点である。他の問ではすべて優位にあったO中の正答が低いのもその辺の事情を物語っている。だから問三と問四を逆にしたらどうなるかわからない。実験してみる価値はある。

五番の問2は非常に内面的な気持（大人の心理）を歌ったもので，この感動は親の子に対する情といったものが理解されないと不可能なことで，広義の世界観に問題がある。解答分布は次のようになり，子供の世界観では

「密柑むく霜やけの手」㋺といったものに厳しゅくさを感じたり㋭のように，大人の側から見れば愛情のこもった冗談であるものが，厳しゅくなものに感じてしまったりしている。

以上学校差の大きいもの小さいものの代表を通して検討を重ねてきたが，やはり，はじめに予想したとおり，(1)読解のむずかしさ，(2)世界観の相違というものがやは

り問題点として残ること（予備テストを行ってもやはり解決されない，もっと系統的に考えねばならない問額点だと思う）がはっきりした。また(3)質問の順序も十分考慮せねばならぬこともわかった。しかし，総括してみれば，解決さるべき問題点のように思う。

(2) 男女差

男女別正解率を比べてみると次のようになる。7.6%

性　別	全二十二問の正解平均	正　解　率　%
男　子	13.6	62.0
女　子	15.5	70.4

の差は自然差ともいうべきで，問題となるほどのものでない。そこで最も男女差の大きなものをいくつか並べて考察してみたが，何ら要因は発見されない。次に数少いが，男子が優位を占めているものを検討すると，内容が動的なもの，リズムが力強く躍動的なもの，愛情に感動を求めるものに統合できるように思える。その観点から女子優位のものを見ると，静的なもの，やさしいリズムのものにまとめられそうに思える。何れにしても論拠は薄弱であるから，実験的に数多い問で比較してみたい。その後でないと何とも言えない。

結論としては，男女差は殊更に問題はないとしてよいと思う。

(3) グッド・プーア・アナリシス

W中とO中を混合してその(G)と(P)50名ずつを分析してみると次のようになる。○印の如き差の大きいものの根拠を探ってみると読解力の差によると考察される。他の序列法テストや興味反応テストでは差の大きい程よい問題と言えそうだが，この場合は開きすぎるのはむしろ悪い問題と言える。逆に差の少いものは勿論悪い問題で，極端に難解か極端に安易な問題の場合に限られる。その他学校差の場合と同様な問題点を，この分析から測定できる。

	一		二		三		四		五		六					七					八	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	3	4		1	2	3	4			
Good	47	35	40	49	22	50	43	48	36	19	43	47	41	49	38	49	50	50	1	50	48	43
Poor	22	20	26	25	12	39	19	27	19	8	30	34	23	17	8	32	44	37	4	32	17	6
G—P	25	15	14	24	10	11	24	21	17	11	13	13	18	32	30	17	6	13	−3	18	31	37
					●	●				●				○	○		●		●		○	○

○印は差の大きいもの，●印は差の小さいもの

結　　論

短詩による客観的方法は，発問形式は単純で十分練れてないが，問題のあった七問を抜くと学校差，男女差，G—Pアナリシス共偏差は望ましい形を整えているように思える。だから，

(1) 各学年に向いた（読解の上で）作品の集大成

(2) 子供の理解できる世界観の限界

(3) 男女差による質の違いの有無

(4) 質問の順序等の考慮

等を整理すれば，一応鑑賞力テストの一方法として採用されてよいのではないかと思われる。第二次研究を経て大方の御批判を待ちたい。

（吉沢　洋）

Ⅲ　読書感想文による主観的評価の一方法

Ⅰ　鑑賞と感想

作品を鑑賞して，その結果をまとめて表現したものが感想である。したがって，感想の記録は，鑑賞力と表現力との結合によって成立する。鑑賞力は，それが読解力を踏まえていること，いうまでもない。表現力は，ほぼ作文力におきかえることができるが，本研究においては，一応これを問題にしないこととする。

鑑賞，感想，読解の三事象を，以上のようにおさえたうえで，読書感想文によって鑑賞力を評価するには，どのような方法があるか，その一つなりともつかみたいというのが，本研究の分担領域である。

Ⅱ　感想文分析の手がかり

鑑賞力をみるために感想文を分析する。そのためには分析の手がかりを必要とする。そこで，鑑賞が読解を踏まえていることに思いをいたし，鑑賞と読解との関係を明らかにした。

〔読解と鑑賞との関係を明らかにする実験調査〕

① 日時　昭和34年7月10日

② 対象　東京G大学附属O中学校（45名）
　　東京都S区立W中学校（38名）
　　各第2学年生徒（計83名）

③ 資料　芥川竜之介作「杜子春」――角川文庫本を使用，16ページ

注　中学校第2学年を選んだのは，便宜に従ったまでである。また，「杜子春」は，使用したものが原文であったが，各種の読書調査によれば，中学校生徒に多く読まれているので，多少の抵抗があることが予想されたり，すでに何らかの形態で接近していたりしても，それらは無視することとした。

④ 手つづき――該文庫本を各自一冊ずつ貸与し，一週間の自由読書を命じて後，次のような教示を与えて記述させた。

⑤ 教　　示

㈠ 本を一回通読してから，感想をまとめなさい。

㈡ 作品のあらすじをたどりながら，もう一度通読しなさい。読み終わったら，簡単にすじを書き，あとに感想を書きなさい。

㈢ 作品に目を通しながら，要約して大意をまとめ，記述しなさい。

㈣ 作品に目を通しながら，主題をさぐって記述しなさい。それについての感想を書きなさい。

注　一週間前に命じた自由読書が，どの程度に行われたものか不明である。(一)の通読は，そんな配慮から，読書当時の記憶を呼びさまし，あるいは，これを補足するためである。(二)(三)(四)の文脈(すじ)全文要約（大意）主題は，作品理解のための要素的な基本形であると考えた。

⑥ 実施者　勝又昌義（O中）・吉沢洋（W中）

⑦ 結果の処理

第　1　表

O　中　　各　項　（読解点―感想点）

番	生徒名	㈠ 通読	㈡ あらすじ	㈢ 大意	㈣ 主題	計	評点
1	M.A	AAAA	3―0	1―1	0―0	4―1	c―c
2	M.A′	A	3―3	3―1	3―1	9―5	b―c
3	Y.I	A	3―5	3―3	3―1	9―9	b―b
4	Y.O	A.D	3―5	1―0	3―0	7―5	c―c
5	N.K	A	3―3	3―1	3―1	9―5	b―c
6	M.K	A.D	3―5	1―0	3―0	7―5	c―c
7	S.K	A.D	5―3	5―0	1―0	11―3	b―c
8	Y.K	AAA	1―1	3―0	3―0	7―1	c―c
9	O.S	A	3―0	0―0	1―0	4―0	c―c
10	N.S	AA	5―5	5―5	3―1	13―11	b―a
11	Y.S	AAAA	3―5	3―1	5―3	11―9	b―b
12	Y.S′	ABCD	5―5	5―3	5―3	15―11	a―a
13	M.T	AB	3―5	3―1	5―1	11―7	b―b
14	A.T	A	3―5	1―1	1―3	5―9	c―b
15	Y.H	A	3―3	1―1	3―0	7―4	c―c

16	T.H	D	3—1	3—0	0—0	6—1	c—c
17	M.H	A	5—5	3—1	3—0	11—6	b—b
18	H.H	B	3—5	5—1	3—1	11—7	b—b
19	T.Y	AA	3—5	3—3	3—1	9—9	b—b
20	K.Y	AAA	5—0	5—5	5—3	15—8	a—b
21	M.Y	A	3—5	3—0	3—1	9—6	b—b
22	K.A	AD	5—3	3—0	0—0	8—3	c—c
23	S.A	A	3—3	3—0	5—5	11—8	b—b
24	M.I	C	1—3	3—3	3—5	7—11	c—a
25	S.I	AC	1—5	3—3	3—1	7—9	c—b
26	T.I	AAA	3—5	3—1	3—1	9—7	b—b
27	M.I	AA	3—3	5—0	0—0	8—3	c—c
28	H.I	AA	3—5	5—1	5—1	13—7	b—b
29	Y.U	B	3—0	3—3	3—0	9—3	b—c
30	N.O	AA	5—5	3—1	5—5	13—11	b—a
31	H.O	AD	5—5	5—3	5—3	15—11	a—a
32	Y.K	AAA	5—5	5—3	3—3	13—11	b—a
33	A.K	AA	3—3	3—0	3—0	9—3	b—c
34	Y.K	AAA	5—5	3—0	0—0	8—5	c—c
35	Y.S	B	5—3	1—0	3—0	9—3	b—c
36	T.S	A	5—5	3—5	3—3	15—13	a—a
37	N.S	AAAB	3—5	3—3	3—0	9—8	b—b
38	A.T	AA	3—3	5—1	5—1	13—5	b—c
39	A′.T′	AAAA	3—3	5—1	3—1	11—5	b—c
40	T.T	AA	5—5	5—5	5—3	15—13	a—a
41	M.N	AAAA	3—0	3—3	5—1	11—4	b—c
42	H.H	AA	3—0	3—0	3—0	9—0	b—c
43	T.Y	D	5—3	5—3	5—5	15—11	a—a
44	K.Y	AA	3—3	3—1	3—1	9—5	b—c
45	K′.Y′	AB	5—3	5—1	5—5	15—9	a—b

第 2 表

W 中　　各 項　(読解点—感想点)

番	生徒名	(一) あらすじ	(二) 大意	(三) 主題	計	評点
1	T.I	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
2	M.U	3—5	5—5	5—1	13—11	b—a
3	S.E	5—5	3—1	5—5	13—11	b—a
4	M.E	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
5	H.O	1—5	1—1	0—0	2—6	c—b
6	T.K	5—5	5—5	0—0	10—10	b—b
7	S.S	5—0	5—0	5—0	15—0	a—c
8	T.S	3—5	3—3	1—1	7—9	c—c
9	T.T	5—5	5—5	0—5	10—15	b—a
10	H.H	3—5	1—1	1—1	5—7	c—b
11	T.M	5—5	5—1	5—5	15—11	a—a
12	A.M	5—1	0—0	0—0	5—1	c—c
13	K.Y	5—3	5—0	5—5	15—8	a—b
14	K.A	5—5	5—5	3—3	13—13	b—a
15	T.I	3—5	3—3	5—5	11—13	b—a
16	M.I	0—1	0—0	0—0	0—1	c—c
17	M′.I′	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
18	M.I	5—5	3—3	5—5	13—13	b—a
19	Y.U	5—0	0—0	0—0	5—0	c—c
20	M.O	3—3	3—1	1—1	7—5	c—c

21	Y.K	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
22	M.K	5—5	3—3	3—3	11—11	b—a
23	T.K	5—5	0—0	5—5	10—10	b—b
24	A.K	5—5	3—3	5—5	13—13	b—a
25	M.S	3—3	3—3	1—1	7—7	c—b
26	K.S	5—1	0—0	5—1	10—2	b—c
27	M.S	5—5	5—5	5—0	15—10	a—b
28	Y.T	5—5	1—0	5—5	11—10	b—b
29	Y′.T′	5—3	0—0	5—3	10—6	b—b
30	Y″.T″	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
31	Y.N	5—5	3—3	0—0	8—8	c—b
32	T.H	3—5	3—5	3—3	9—13	b—a
33	T.M	5—5	5—0	5—5	15—10	a—b
34	Y.M	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
35	M.M	5—5	5—5	5—5	15—15	a—a
36	M′.M′	5—5	5—9	5—5	15—10	a—b
37	N.Y	5—5	5—5	5—15	15—15	a—a
38	H.W	5—5	0—3	3—3	8—11	c—a

第1表はO中の調査結果であり，第2表はW中のそれである。〔読解点——感想点〕というのは，あらすじ・大意・主題など，それぞれの理解点と，それらに即して述べられた感想の評価点との対比である。各5点満点とし，正当に理解し，それについて感想を掘りさげて述べたものを満点として，主観的に評価したものである。満点5点から，3点，1点，0点とした。0点は無答である。

次いで，各項のそれぞれを合計し，次のように評点化した。

〔読　解〕

15　点	a
14～9点	b
8点以下	c

〔感　想〕

15～11点	a
10～6点	b
5点以下	c

次に，O中とW中を混合して，読解と感想との評点を分類してみると，第3表のようになっていた。これによれば，読解および感想の評点は，a—a，c—cのものが比較的多数であるから，両者は，ほぼ相関関係を有するということができる。

第3表

読解／感想	a	b	c
a	⑭	12	2
b	6	⑮	6
c	1	12	⑮

（数字は人数）

すなわち，この結果は，読解・感想の両者が相関するものと認定していいであろう。

次に第1表の第1次調査についてみる。A・B・C・Dは，

A——叙述面の読解（用字・用語・接続一段落・文体，等に関する文章形態）に即して得た感想

B——あらすじをたどることに即して得た感想

C——全文を要約して大意にまとめることに即して得た感想

D——作品の主題に即して得た感想

のような意味を持っている。感想文を個別に，このように分類したものである。

その結果の分類集計は，第4表のようであった。Aは，B・C・Dなどに比べると，その範囲が広大であることと，中学生の作品の読み方が，叙述形態に引かれたものであることを示しているといえよう。

第4表

A	73
B	7
C	8
D	8

（数字は件数）

とにかく，感想文のすべてが，このような分類形式で，すべて律することが可能なのであった。こうしてみると，読解は，感想発生の根拠となっているということが認められるであろう。

以上の実験により，感想文を分析する手がかりとして読解過程の要素をあげることができるものと思われる。

III. 感想文による鑑賞力詳価の一方法

感想文を読んで，その記述者が，どの程度の作品鑑賞をしているかを知るための一方法として，次のようなものをあげることができる。

A 特定の読解過程を手がかりとする重点評価

(1) 表現形態（用字・用語・文法・文体など）に即した感想

(2) 特定段落の局所に即した感想

(3) すじ（段落の連らなり）または大意に即した感想

(4) 主題に即した感想

以上の各項をそれぞれ次のような六段階に評価する。

ア 5点――特定の読解過程（表現形態・段落・すじ・大意・主題のうち）を正しく理解し，それに即した感想がかなり深められているもの

イ 4点――特定の読解過程を正しく理解し，それに即した感想が一応まとめられているもの

ウ 3点――特定の読解過程を正しく理解し，これを記述して感想とした程度のもの

エ 2点――特定の読解過程の理解が完全と認められず，また，それに即して，ある種の感想がまとめられているもの

オ 1点――特定の読解過程の理解を誤まり，また見当違いの感想がまとめられているもの

カ ○点――無答

B 読解過程を手がかりとする総合評価

感想文についてAの(1)(2)(3)(4)の各項を評価し，それらを総合したものを総合評価とする。

以上の評価法によれば，Aの各項は，それぞれ，0点～5点となり，Bでは，0点～20点となる。もしも，主題に即した感想を重視するとすれば（作品における主題の重要性を強調した観点で）これを2倍して0点～10点とすることもできよう。

次に，上の評価方法を適用してみた2学級の例を示す。（第5，6表）

第 5 表

W 中　　39 名

番号	氏　名	重点評価 (1)	(2)	(3)	(4)	総合評価
1	S. A			2		2
2	M. I	2	4			6
3	K. I	1		2		3
4	T. O				8	8
5	E. O	2				2
6	K. K		2	5		7
7	M. K	2		2		4
8	A. K			2		2
9	T. K			3		3
10	K′. K′		4			4
11	H. S			3	8	11
12	S. S	1				1
13	I. S			3		3
14	T. H		4		4	8
15	S. M	2				2
16	T. M			3		3
17	Y. A			1		1
18	H. I	1	4	4		9
19	K. I			5		5
20	T. E		4		4	8
21	Y. O	2	4			6
22	Y′. O′			4		4
23	M′. K′				8	8
24	M″. K″	1		2		3
25	K″. K″			3		3
26	T′. K′	2	2		4	8
27	H. K	4				4
28	T. S			3		3
29	S′. S′	1				1
30	M. S		4			4

番号	氏　　名	重点評価 (1)	(2)	(3)	(4)	総合評価
31	K. T			4		4
32	T. T	2		3	8	13
33	H. T	2	4			6
34	M. N	1				1
35	M. H		5			5
36	M. M	2	2	2		6
37	H. Y		4	3		7
38	S. Y	2	1			3
39	H. R			4		4
	満　　点	5	5	5	10	25
	件数合計	17	14	21	7	39
	同　上　%	43	36	54	18	100
	点数合計	30	48	63	22	163
	同上件数平均	1.8	3.4	3.0	3.1	4.1

第　6　表

O　中　　49　名

番号	氏　　名	重点評価 (1)	(2)	(3)	(4)	総合評価
1	Y. A	5				5
2	N. I			5	8	13
3	K. I		5			5
4	Y. I		2			2
5	S. K	4	4			8
6	T. K		4			4
7	A. K		5		8	13
8	N. K		4			4
9	M. S		4		8	12
10	Y. S		5			5
11	Y′. S′		5			5
12	K. S			4		4
13	A. S			4		4
14	T. S		5		8	13
15	H. S		5			5
16	M. S			4		4
17	T. T		5			5
18	T. N	5	5			10
19	Z. H			2	6	8
20	I. M		5		8	13
21	S. M			5		5
22	K. Y		4			4
23	M. I			4		4
24	Y. U			4		4
25	K. O			4		4
26	T. K			4		4
27	K. O		4			4
28	E. K		4			4
29	T. K		4			4
30	S. K			5		5
31	A. K		5			5
32	M. K			5		5
33	T. K		2			2
34	E. S			4		4
35	K. S		5			5
36	M. S		4			4
37	H. T			4		4
38	N. T				8	8
39	N′. T′			4		4
40	T. N	5	4			9
41	K. N		5			5
42	H. N		5			5
43	M. H		4			4
44	M. M		4		6	10
45	K. M		4			4

番号	氏　　名	重点評価 (1)	(2)	(3)	(4)	総合評価
46	N. M		5			5
47	K. Y		5			5
48	K. Y		4			4
49	K'.Y'			4		4
	件数合計	4	31	16	8	49
	同上 %	8	61	33	16	100
	点数合計	19	135	66	60	280
	同上件数平均	4.7	4.3	4.1	7.5	5.7

この四項にわたる読解過程六段階評価法は，習熟するにしたがって容易になることは事実であるが，しかし，なお考慮しなければならない問題も残している。これらは今後引続いて研究しようとするものである。次に問題点を列挙する。

① 読解過程の四項を，さらにしぼってみたらどうか。たとえば，(1)表現形態と(2)段落内の局所を一つにし，(3)すじ・大意と(4)主題との三項にすることはどうであるか。

② 読解過程の四項を，等価値に扱わず，(1)より(2)，(2)より(3)，(3)より(4)というように，評量を強化することはどうであるか。その場合の比率を，どのようにするか。たとえば，順次倍加することではどうか。

③ 六段階の分け方は，やや煩雑である。四段階ぐらいになれば，さらによい。

④ 総合評価をするためには，いくつかの読解過程に即した感想の意味が，読み手である被評価者にも，ある程度はわかっている必要がある。それは一般に行われていないから，総合評価の実施は不公平を来たさないか。

(望月久貴)

Ⅳ 作品比較法

1 問　題

鑑賞するということは，内部的な経験である。そのままでは観察が可能ではない。そこで私は操作主義的に鑑賞力をとらえようと考える。

被験者に文学作品をあたえる。するとまず理解過程がはじまる。叙述→文脈→大意→主題という過程をとおって読解過程が進行していく。

その途中にあって，また理解過程のおわりに鑑賞活動がおこる。鑑賞は理解過程ではない。むしろ，文学機能としてみると，創作体験と文学鑑賞とは，同じ表現の過程だと考えられる。

文学作品を理解する主体は，人格性をもった児童であり，生徒であり，人間である。児童・生徒の有する人格性は，感覚→運動→情緒→社会性→知性という順序で発達し，それぞれ人格性の下部構造と上部構造を形成している。

理解過程の際には，知性の領域を中心とした精神活動が行われるが，鑑賞の際には，情緒を中心とした全人格構造がそれに参加するものと思われる。

このような鑑賞過程を客観的に操作するために，いろいろな教示をあたえてその反応を観察したり測定したりして，その実態をとらえようとするわけである。

2 方　法

読書鑑賞力の評価方法としては，(1)論文体テスト (2)客観的テスト (3)作品序列法 (4)標準テスト (5)読書反応調査 (6)行動観察法などがある。

ここでは，理論的に鑑賞力を分析してから出発した研究ではなく，いわば，仮説演釈的に研究をすすめていくのである。つまり従来行われている如上の読書鑑賞力の評価方法を一応是認し，いろいろな分析を通してその本質を明らかにし，読書鑑賞力の評価方法を確立していこうとするのである。

ここで私が扱うのは，作品序列的方法である。

この方法は，二つの作品について一対の比較法を行う場合と (paired comparison) ，三つ以上の作品について序列をつけさせる方法とがある。

ここで報告するものは，二つの作品を読みくらべて，すぐれていると思う方に○印をつけさせる客観的方法によっている。

a　問題の構成

和歌　五つ，俳句　五つ，詩　一つ

b　分析の観点

(i)　学校差　(ii)　男女差　(iii)　グッド・プーア・アナリシス等

c　改作の原理

俳句はすべて一茶の句で，他の詩および和歌はいずれも小学生の作品（西多摩詩集による）である。二つとも中学生むきに望月久貴先生によって改作されたものである。二つの作品はいずれも場面又は主題が共通で，作品の比較が容易になっている。

d　検査日時

昭和34年5月から7月

e　被験者

附中　103人

W中　95人

男女別は

男子　93人　女子　105人

次に問題文を掲げる。

(　　)学校(　)年(　)組(　)番　男女

氏名(　　)

1　次の二首ずつをよみ比べて，すぐれていると思う方に○印他の方に×印をつけよ。

1　裏山に　秋の風吹く夕ぐれに　鳩の鳴き声　低く聞こゆる　(　　)

山々に　秋風の吹く　夕ぐれは　小鳥の声に　わびしさを思う　(　　)

2　秋風に　コスモスの花ゆらゆらと　揺れても　折れぬ　この細い茎　(　　)

わが庭に　咲き盛りなるコスモスの風吹くたびになびきては立つ　(　　)

3　頂上は　雲にかくれぬ鳥の声　満てる檜の森の下道　(　　)

鳥の声　右と左に　聞きながら　頂上めざしてわれらは進む　(　　)

4　街路樹の　葉裏返して　吹く風に　我は　思わずえりを立てたり　(　　)

帰り道　歩く日暮れに　街路樹の葉裏を返し　風吹き出しぬ　(　　)

5　湯を浴ぶる　母の背中を　流しおり　気弱くなりし　母と思わる　(　　)

力をこめて　母の大きな　背中をば　感謝のことばに　かえて流しぬ　(　　)

2　次の二句ずつを読み比べて，すぐれていると思う方に○印，他の方に×印をつけよ。

1　春の日や　暮れても　見ゆる東山　(　　)

春の日に　暮れても　見ゆる東山　(　　)

2　しずかさや　湖水の底の雲の峯　(　　)

雲の峯　湖水にうつり　しずかなり　(　　)

3　二軒やは　二軒餅つく　秋の雨　(　　)

二軒やが　みな餅をつく　秋の雨　(　　)

4　もずの声　かんにん袋　切ったりな　(　　)

もずの声　かんにん袋　切れたりな　(　　)

5　朝顔のかぞえるほどに　なりにけり　(　　)

朝顔の花かぞえては　たのしみぬ　(　　)

3　次の二つの詩を読み比べてすぐれていると思う方に○印，他の方に×印をつけよ。

このあいだ
かきねもぐりを　したっけ。
先生が　とおった。
先生は　みたかな。

かまわず
ぼくらは
かきねもぐりをしてたいっけ。

(　　)

このあいだ
かきねもぐりを　したっけ。
先生が　とおった。
先生が　みたかな。
みつかったらしいけど
かまわず
かきね　もぐり　したっけ。

あのときのことを
先生に
聞いて　みたい。

(　　)

3　結　果

学校差を表1によってみると，附中，W中とも，それぞれ，6・9および6・2で差がない。標準偏差はややW中の方が大きいが有意差はなさそうである。

表 1　学校差（平均と標準偏差）

	附　中	W　中
M	6.9	6.2
S. D.	1.8	2.1

表 2　男女差（平均と標準偏差）

	男	女
M	6.6	6.5
S. D.	1.7	1.6

表2によって男女差をみると，これも差はないといえる。

表 3　Good—poor Analyss

	←短歌〔1〕					→俳句〔2〕←				→詩〔3〕	
問　題	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1
優秀群(C)	22	19	22	21	22	21	22	19	12	15	20
劣等群(P)	11	5	4	11	8	12	7	9	7	9	11
x^2	3.6	8**	12.4**	3.2	6.6*	2.4	6.8**	3.6	1.4	1.6	3.4

表3にグッド・プーア・アナリシスの結果がまとめられている。

両群の間に有意差があらわれたのは，次に示すように和歌の2，3，5番と，俳句の2番である。

2　秋風にコスモスの花ゆらゆらと
　　揺れても折れぬこの細い茎
　わが庭に咲き盛りなるコスモスの
　　風吹くたびになびきてはたつ

3　頂上は雲にかくれぬ鳥の声
　　満てる桧の森の下道
　鳥の声右と左に聞きながら
　　頂上めざしてわれらは進む

5　湯をあぶる母の背中を流しおり
　　気弱くなりし母とおもわる
　力をこめて母の大きな背中をば
　　感謝のことばにかえて流しぬ

2　しずかさや湖水の底の雲の峯
　　雲の峯湖水にうつりしずかなり

4　この結果をいかに解釈したらよいだろうか

この被験者の発達段階では（中学生）例えば俳句の一字が変ったようなこまかい点の弁別力はまだ発達していない。

〔二〕の1 { 春の日や暮れても見ゆる東山
　　春の日に暮れても見ゆる東山

〔二〕の4 { もずの声かんにん袋切ったりな
　　もずの声かんにん袋切れたりな

右の二つの句の弁別力は低く，x^2の結果も両群（優秀群と劣等群）の間に有意差はなく低い価を示している。

先に掲げた有意差のみられた二つの作品の場合をみると，えがかれた状況も主題もフェノティピカルに（現象的に）説明しつくされているものと，一方，読んでゲノティピカル（原型的）な解釈の余地が残されているもの即ち，具体的思考の抽象化をする余地の残されている作品とを区別する傾向がみられるのである。

たとえば，先にあげた〔二〕の2では，「湖上にうつった」と一言もいっていない「しずかさや云々」の句をすぐれているものとしてチェックし，〔一〕の5では，母への「感謝」という言葉を用いず，〔一〕の3では，鳥の声を右と左に聞いているといわず，又〔一〕の2では，揺れているといわず，読むものに解釈を残しているものをすぐれているとする傾向がうかがえる。この時期(中学生)にかなり読書鑑賞力は増すことがうかがえるのである。

表4に読解力テスト（依田他）と序列法テストの関係が示されているが，相関は全然ないといえよう。

序論のところでも述べたように，私は読みの深さに応じた鑑賞があらわれると考えるのだが，これだけのテストでは，両者の相関を云々することは出来ないと考える。何となれば，読解力は一般的（標準的）なテストを

表4　読解力テストと鑑賞力（序列法）との関係

		鑑賞力	
		優秀群	劣等群
読解力	優秀群	14	7
	劣等群	12	8

読解力優秀群の鑑賞力平均点……7.0
読解力劣等群の鑑賞力平均点……6.95

表5　各種鑑賞力評価法の相互相関

	読書反応	序列法	散文	短章
読書反応				
序列法	−.021			
散文	+.27	+.06		
短章	+.15	+.22	+.21	

<相関係数の平均>

序列法 .10　　読書反応 .15
散文 .18　　短章 .20

用いたのであり，ここで用いた作品に即した読解力テストを作る必要が考えられると同時に，ここで用いた序列法テストそのものに，いろいろな難点が見出されるからである。

たとえば，①選択が二つで偶然の誤差が多く入ったことが予想されること，二つを比較する方法をとったのは，比較が容易であり問題の作製も容易であると考えられたためである。

②問題の数がすくなかったこと，もうすこし問題数をふやせば①の難点を多少とも克服することが出来よう。

③もうすこし弁別力のある問題を入れてみる必要がある。11題のうち，x^2検定の結果有意差のみられたのは四つだけであった。

④キャロルが Prose Appreciation Test で行ったように，二つの作品を一群の専門家（国語教育学者・心理学者等）に呈示して優劣の判定をさせ，二つの規準が一致した問題を選び出し，採用すべきであった。

つぎに本テストがはたして鑑賞力テストとして成立しうるか否かを考えてみよう。

<序列法テストが鑑賞力テストとして成り立ち得るか>

私は，グッド・プーア・アナリシスで差がみられたような問題は，すくなくとも，鑑賞力をみる問題として望ましいものと考える。それらは問題として内部均一性があり，優劣等群をそれぞれ弁別する力をもっているからである。このような問題を中心として序列法テストを構成すれば，鑑賞力をみる問題として，本テストが成立し得ると考えられる。

しかし，鑑賞力テストの相互相関がひくく，総合点との相関が高いことからして，いくつかの鑑賞力テストを兼ね施行することが児童・生徒の鑑賞力をみる上からは大切であろう。

<ここから，いかなる指導法が考えられるか>

この方法は，二つの作品を，児童・生徒に提示して，どこがすぐれているか，どこが劣っているかを比較検討しつつ，鑑賞指導をするのに役立つであろう。

しかしながら，鑑賞過程は，読解の過程をぬきにしては，考えられない。ために，鑑賞指導に先立って，二つの作品について，用語・用字・文法などの叙述面や要旨および，主題を探知させる指導をなし，ついで，二つの作品を比べてどうちがうか，どこがすぐれているかを比較し検討する過程で鑑賞指導がなされることが望ましいと思われる。

5　まとめ

ここでは，序列的方法によって読書鑑賞力を評価しようとした。中学生百九十八人を被験者として和歌，俳句，詩，について二つの作品のうちよりすぐれている方に○印をつけさせた。

その結果，学校差や男女差はみられず，グッド・プア・アナリシスの結果四つの問題については優等群と劣等群の間に有意差があらわれた。

本テストの欠点が，二，三指摘されたが，それらの修正により，本テストが，読書鑑賞力をみる評価方法として成立し得ることが論究された。同時に，二つの又はそれ

以上の作品を比較検討する過程は，指導の方法にも直結することが考察された。　（岡田　明）

V　読書反応法による鑑賞力の評価

一　目的・方法

児童がある作品から本当に深い感銘を受け，作品を心から鑑賞した場合には，様々な反応を示すことが考えられる。そのような反応を類型別すると，つぎの七類型が挙げられよう。

① 愛読性反応（夢中で読んだり，繰返し読むような反応）

② 波及性反応（同じ作者の他の作品を読んだり，映画化されたものを見る）

③ 探究性（作者や作品の時代的背景・場所などについてしらべる）

④ 表現性反応（感想文を書いたり，作品にもとずく詩作・劇化などを試みる）

⑤ 同一化反応（作中人物やその行動をまねたり，作中人物と自分を同一化する）

⑥ 生活化（作品の影響として物の見方考え方人生観などに変化を来たすような反応）

⑦ 評価的反応（作品の文章形態，主題その他を批評したり，評価したりする）

イ　このような読書反応を通してどこまで作品に対する感銘や鑑賞の度合が測定できるか。

ロ　読書反応法の測定結果は，どのように読書指導や鑑賞力指導に役立つか。

この二点につき，見透しを得るために行なわれたのが本研究である。

研究方法としては，芥川の「杜子春」（文庫本）を，各人に与え，自由課題として読ませた。その10日後に，41問からなる「読書反応調査」を実施した。なお，被験者は都内中学2年生で200名である。「読書反応調査用紙」は，つぎのとおりであり，各設問に対して，「ハイ」又は「イイエ」で答える質問紙である。

読書反応調査用紙

あなたがたは芥川竜之介のかいた杜子春などの作品をよみましたね。それらの作品についていろいろとかんじたことかんがえたことなどがあることでしょう。そのことについていろいろとききますから正直にこたえてください。（これは学校の成績とは，かんけいがありません。）

こたえははい，といいえだけですから自分の思うほうに○をつけなさい。どちらでもない人は○をつけなくてもよろしい。）

（　　）学校　（　）年　（　）組　（　）番　男女
氏名（　　）

◇1．杜子春をおわりまでひといきでよみとおしましたか。　はい

2．杜子春がよくてくりかえしてよみましたか。　はい

3．杜子春がおもしろくなってとちゅうでこえをあげてよんでしまいましたか。　はい

4．杜子春をよむのがとちゅうでいやになりましたか。　はい

5．よみおわったときいいなあとおもいましたか　はい

6．よんでいる時にはほかのことをわすれてむちゅうになってよみましたか。　はい

◇7．芥川竜之介のかいたほかの作品もよみたいと思いましたか。　いいえ

8．「杜子春」をよみ終えてから芥川竜之介のかいた他の作品をじっさいによみましたか。　はい
よんだ人はその作品の名をかいてください。

9．芥川竜之介いがいの作者のかいた杜子春のような物語をもっとよみたいとおもいましたか。　はい

10．じっさいにそのような本をよみましたか。　はい
よんだ人はその本の名を書いてください。　はい

11．杜子春の映画があったらみたいとおもいますか。　いいえ

◇12．芥川竜之介はどんな人かをいろいろしらべようとおもいましたか。　はい

13．芥川竜之介について本でしらべましたか。　はい
どんなことをしらべましたか。

14. 芥川竜之介について先生か他の人にたずねましたか。 いいえ
15. 杜子春にでてくる，昔の中国のことを知りたいとおもいましたか。 いいえ
16. 洛陽とかがびさんのことをなにかでしらべましたか。 はい
17. 杜子春のおはなしを他の人にはなしてきかせたいと思いましたか。 はい
18. 杜子春のおはなしを他の人にはなしてきかせましたか。 はい
19. 杜子春のおはなしの場面を絵にかきあらわしたいとおもいましたか。 いいえ
20. 杜子春のおはなしを脚本やシナリオにしてみたいとおもいましたか。 はい
21. 杜子春のおはなしを脚本にしましたか。 はい
22. 杜子春のおはなしを劇にしてみたいとおもいましたか。 はい
23. 杜子春の劇をじっさいにしましたか。 はい
24. 杜子春のおはなしを詩にかいてみたいとおもいましたか。 はい
25. 杜子春のおはなしを詩にかいてみましたか。 はい
◇26. 読んでいる時杜子春になったような気になりましたか。 はい
27. 読んだあとで道を歩いているときなどに杜子春になったような空想をしましたか。 はい
28. 杜子春か仙人のまねをしましたか。 はい
まねをしたものはどんなまねをしたか，つぎのせんの上にかいてください。

---

29. 読んでいる時仙人になったような気になりましたか。 はい
30. 地ごくのおとうさんやおかあさんがかわいそうでなきそうになりましたか。 はい
31. 杜子春や仙人のようになりたいとおもいましたか。 はい
◇32. 杜子春をよんで毎日の生活のかんがえ方がかわりましたか。 はい
33. 幸福はみのまわりにあるとかんがえるようになりましたか。 はい
34. おとうさん，おかあさんを大切にしなければならないとおもうようになりましたか。 はい
35. 人間らしい正直なくらしがしたいとおもいましたか。 いいえ
36. おかねはもっと大切につかわなければならないとおもうようになりましたか。 はい
37. 金持とびんぼう人をさべつをしてつきあうのはよくないことだとおもいましたか。 いいえ
◇38. 杜子春のおはなしについておともだちと批評しあいましたか。 いいえ
39. 批評した場合はどんな批評をしたかつぎの線の上に書いてください。

---

40. 杜子春をよんで感想文をかきましたか。 いいえ
41. 親を大切にすることと自分の考えをつらぬいていつまでもだまっていることとどちらがいいかをかんがえてみましたか。 いいえ

二　結果とその考察

読書反応法の鑑賞力評価法としての妥当性を検討するために，先ず読書反応調査と，他の鑑賞力テストおよび読書力テストとの統計的な関係を明らかにした。

読書反応点は，前記読書反応調査の各問について，鑑賞力の立場からみて望ましい解答（ハイ又はイイエ）に1点ずつ与え，個人別に得点を算出した。鑑賞力テストは，①散文および韻文の客観的テスト　③散文による文章試験法の三種のもので，その総合点をもって，個人の鑑賞力点とした。読書力テストは依田新たちの標準読書力テスト（金子書房）であり，その総得点をもって個人の読書力点とした。

以上のようにして，個人別に，その読書反応点・鑑賞力点および読書力点を算出したのである。これらに基づいて，読書反応と，鑑賞力および読書力との関係を現わすための資料を求めた。表1は鑑賞点最上位の20名からなる優秀群と最下位の20名からなる劣等群について，読書反応点が全員の平均より上位下位の割合を求めたものである。したがって表1の鑑賞点の優秀群20名については，その中の16人は読書反応点も上位で，わずか賞名が下位であるということになる。これと同様にして，表2は読書力点の優秀群・劣等群各20名についてその読書反応点は全員の平均より上位何名，下位何名いるかを求め

(表1) 鑑賞点と読書反応点の関係

		読書反応点	
		上位のもの	下位のもの
鑑賞点	優秀群	16人	4人
	劣等群	4人	16人

(表2) 読書力点と読書反応点の関係

		読書反応点	
		上位のもの	下位のもの
読書力点	優秀群	11人	9人
	劣等群	8人	12人

たものである。表1によれば，鑑賞力点からみた優秀群には，読書反応点上位のものが多く，劣等群には，読書反応点下位のものが多い。つまりこの鑑賞力点と読書反応点との間には，プラスの相関々係がかなり見られるということである。したがって，ここで測定された鑑賞力の指標と考えるならば，われわれの読書反応の測定法は，この指標からみると妥当性があるということになる。

こゝで，読書反応点を算出した個々の問題の検討にうつろう。表3は，読書反応点のすぐれた優秀群を，鑑賞力のすぐれたもの，その反対の劣等群を鑑賞力の劣ったものとみなし，両群それぞれについ，各問毎に望ましい反応を示した頻数を求めたものである。なお両群の人数はそれぞれ25人で，これは100名中より選出した。

表3によると，たとえば，杜子春を終りまで一と息に読み通したものは，優秀群では25名中24名もいるが，劣等群では11名にすぎない。このことは，問1は優秀群と

(表3) 優秀群と劣等群の各問に対する反応の比較

	問題	1	2	3	4	5	6	平均	差
愛読性	G群	24	18	2△	25	22	18	18.3	9.7
	P群	11	1	0	25	7	7	8.9	

	問題	7	8	9	10	11	平均	差
波及性	G群	23	21	24	7	21	19.2	9.2
	P群	12	12	6	2	18	10.0	

	問題	12	13	14	15	16	平均	差
探究性	G群	18	8	13	22	△5	13.2	10.2
	P群	3	1	4	6	1	△3.0	

	問題	17	18	19	20	21	22	23	24	25	平均	差
表現	G群	14	13	12	14	▵0	20	▵4	▵4	▵1	9.1	8.1
	P群	3	2	0	0	0	4	0	0	0	▵1.0	

	問題	26	27	28	29	30	31	平均	差
同一化	G群	16	7	△4	10	10	△5	8.6	7.5
	P群	2	1	0	0	1	4	△1.3	

	問題	32	33	34	35	36	37	平均	差
生活化	G群	10	18	22	23	23	23	19.8	18.3
	P群	1	13	16	18	20	21	△1.5	

	問題	38	39	40	41	平均	差
評価	G群	△3	△2	—	20	8.3	13.3
	P群	1	1	—	13	△5.0	

劣等群に著しい差があり，したがって弁別力のすぐれた問題であるということができる。このようにして各問題を分析してみると，大要つぎのような判断をすることができよう。

(1) 愛読性について (問1～問6)

問3の「声をあげて思わず朗読する」という反応は全体に著しく少なく，しかも両群の差もない。このような反応は一般に散文の場合は行なわれないことを示すもので，散文の読書反応テストとしてはあまり意味がない。問4の「途中で読むのがいやになる」という読書反応は両群とも一人もなく，その為に両群の差がない。これは「杜子春」がたまたまあまりにも被験者の興味性に適合していた為で，一般的には読書反応テストとして必要な項目であろう。その他の問題はいずれも弁別力があり，愛読性の問題全体としても弁別力があり適切である。

(2) 波及性について (問7～問11)

問10の「同じ傾向の他の作者の作品を読む」という読

書反応は両群とも少なく，そのために弁別力が充分にはない。問11の「杜子春の映画があったら見たい」という反応は両群とも反応が多く，そのためにやはり弁別力がやゝ低い。しかし両問とも全く弁別力がないわけではないし，多くの作品の読書反応テストには用い得る妥当な問題といえよう。他の問題は弁別力がすぐれており，波及性の問題全体としては適切である。

(3) 探究性について（問12～問16）

問13の「作者について調べる」および問16の「作品にでてくる場所について調べる」反応は，両群とも少なく，そのために弁別力がやゝ劣っている。他の問題は弁別力が充分あり，探究性全体としては弁別力があり適切である。なお，平均欄にみられるように探究性の面は中学生は必ずしも盛んにおこなわれていない。このことは，後にのべる表現活動，同一化および評価活動のそれぞれの読書反応についても同様である。これに対して，愛読性，波及性，生活化等に関する読書反応には，みるべきものが多いといえよう。

(4) 表現活動について（問17～問25）

問21の「脚本を作る」問23～25の「劇化」「詩作」等の反応は両群ともほとんど行なわず，その為に弁別力が乏しい。しかし他の問題は弁別力がすぐれ，全体としては適切である。

(5) 同一化について（問26～問31）

全体的に反応が少ないが，とくに問27の「読後行う空想による同一化」問28の「模倣による同一化」問31の「あこがれにみられる同一化」などは両群とも反応が少なく，その為に弁別力が乏しい。これは一つは作品が古い時代の非現実的な物語である為で，作品によってはこの種反応も多くみられるであろう。同一化全体としては弁別力はかなりあり，適切であるといえよう。

(6) 生活化について（問32～問37）

問35の「正直な話し方」問36の「倹約」問37の「貧豊による差別」などの反応は両群とも多く，そのために弁別力が少ない。

(7) 評価について（問38～問41）

問40の「感想文」は表現活動の問題であるから除外した。問38の「批評」問39の「その内容」などは両群とも反応が少なく，そのために弁別力に乏しい。評価の反応は全体的に反応が少く，その為に他の領域ほどは全体としても弁別力がやゝ乏しい。

表　4

評価段階	5	4	3	2	1
得　　点	23点以上	18～22	13～17	8～12	7点以下

以上のように，個々の問題の弁別力には，若干不満足なところもあるが全体的には適切であるといえよう。表4は読書反応点を平均点（14.6）を中心にし，標準偏差（5.0）を単位にして評価段階を求めたものである。こうしたものは7反応領域についても製作するならば，鑑賞力を分析的に捉え，指導に役立てることができよう。

（岡本奎六）

Ⅵ まとめ

(1) 文学作品の鑑賞力評価は，従来かなり主観的・直観的に行なわれて来たうらみがある。おもうに，それは鑑賞力の実態は甚だ捉えにくいものであり，その評価方法についての基礎的な研究も等閑視されていたことも，一つの大きな理由といえよう。そこでわれわれは，先ず代表的な鑑賞力の評価法を整理し，これを四分類した。

(2) それらは ①客観的テスト形式による方法 ②感想文という論文体テスト形式による方法 ③直接なまの作品を比較して優劣を判定する一対比較法又は序列法および ④読書反応法である。

(3) これら各方法について実際に問題を作成し，鑑賞能力の評価法としてのそれぞれの位置づけを行うのがわれわれの目的である。

(4) 今回その中間報告をここに公にしたわけである。①については勝又・吉沢が，②については望月が，③については岡田が，④については岡本がそれぞれ分担執筆してきた。

(5) それによると，それぞれの評価方法は総合鑑賞能

力および読書能力とプラスの相関がみられ，これらを規準にしていえば，一応の妥当性がみとめられたのである。

(6) しかしながら，個々の問題の詳細な分析を行なったときに，各方法とも問題の妥当性や弁別力に難点のあるものが若干見受けられた。したがって，これらの難点をとり除きよりすぐれた問題に改めて，新に本実験を行なう必要性が生じた。

(7) すでにのべたように，それぞれの評価方法には一応の妥当性がみとめられたのであるが，その読書指導ないし鑑賞力指導との結びつきも，それぞれ独自の立場から貢献することが考えられる。こうしたそれぞれの評価方法の指導との結びつきを明らかにすることが，本実験の一つの課題である。

(8) それぞれの評価方法について問題を作製する場合に，作製技術上のポイントが考えられる。この技術的なポイントを明らかにすることも，本実験の課題の一つということができよう。

(9) それぞれの評価方法とも，鑑賞力評価用具としての妥当性を高めるためには，新に研究すべき問題点が多い。とくに，配点については多くの問題点がある。たとえば，感想文においては，叙述面の感想，文脈に即した感想，主題についての感想などがある。こうした領域を異にする感想について，いかなる配点の仕方を行なうかはその一例である。読書反応法についても，愛読性，波及性その他いくつかの反応領域がある。これら異る反応領域にいかなる配点を行なうのがよいかも一つの問題点である。

(岡本 奎六)

—第3回研究大会発表—

「こどもの週刊誌」の読者の姿*

東販出版科学研究所

河　北　憲　夫**

まえがき

御承知のように，34年の3月「こどもの週刊誌」として少年サンデー，少年マガジンの二誌が創刊されました。週刊誌ブームの行くところ遂に「こどもの週刊誌」まで生れるに至ったと云う形であります。創刊されて，半年も経っていないその初期の状況ではありますが，私達が34年の6月に行いました東京都の小中学校生徒の読書世論調査から関係のデータを抜き出して「こどもの週刊誌」がどのように読まれているか，又その読者の実態はどのようなものであるかなどについて考えてみたいと思います。最初に「こどもの週刊誌」の意義について触れておきましょう。雑誌出版のジャンルで，週刊誌と云うものが大きな分野を占めるであろうと云う胎動は既に31年あたりから見られたのでありますが，34年の上半期になって実現致しました。現在，週刊誌は一週間に1,100万部から1,200万部が市場に流れていると推定されております。そして「こどもの週刊誌」もこのような一般の週刊誌ブームと時期を同じくして生れたものではありますが，そこには一般の週刊誌とは違った意義があると思います。先ず第一に，読者の側から考えてみますと，一応，読書や趣味，嗜好などの形成期を過ぎた大人と違って，現在その時期を通過しつつある子供であるだけに，週刊誌から受ける影響もその性質や度合の点で，一般の週刊誌の大人に対する関係とは大きく異ったものがある筈であります。次に週刊誌としての発生過程でありますが，一般の週刊誌が新聞社の独占的発行から脱して出版社のものが続々発行されるまでには相当長い準備期間が続いたのであります。これに対して「こどもの週刊誌」の場合，週刊誌と云う出版形態が一般の週刊誌によってかなりP．Rされて来たとは云うものの，やはり子供と云う読者層は処女地であり，この創刊の意義にはかなりの相異があります。このように「こどもの週刊誌」と云うものは読者に与える影響の点からも，出版物製作の点からも特殊な意義を持っていると考えられる訳であります。

それでは本論に入ることに致しましょう。

一　定期購読者の特性

「こどもの週刊誌」を毎週買っている子供を年令的に大きく捉えると小学生と中学生に限定されておりまして高校生は入っておりません。ところで小中学生の中で，どれ位の子供が週刊誌を買っているかと云いますと全体の約6％であります。そしてこの中には，少年サンデーと少年マガジンの両方を買っている子供が11％あったことも述べておく必要がありましょう。又，月刊誌との併読率も非常に高く全体の74％と云う比率でありました。

(1)　性別状況

男子が88％，女子が12％で男子の率の高いことはタイトルに少年とうたってあることからも当然でありまして この場合，むしろ女子の購読者が意外にあると云った方が適当でありましょう。

(2)　学年別状況

小学生では四年生が最も多く全体の23％，次に五年生と六年生が共に19％，三年生が15％でありました。この調査の性質上，一年生と二年生ははぶいておりますが，三

* A Profile of Readers of the Children's Weeklies

** Norio Kawakita (Institute for the Study of Publication, Tōhan)

年生が15%とすれば二年生あたりでも或る程度の購読者があるものと見てよいでしょう。中学生になると購読者は大分減って，一年生はまだ13%の段階にありますが，二年生は5%，三年生は僅かに3%と云うぐあいに急激に低下しております。結局，総合して小学生が全体の80%近く，中学生が20%余ということになります。

(3) 家庭の職業による状況

最も多いのは官公庁会社事務員で27%，次は自宅・工商の24%で，この二つが大きなところであります。三番目は技術者の12%，続いて工員及び作業員9%，以下，自由業，サービス業，販売従業者，教員，運輸業，無職，自由労務者となっております。このように，週刊誌を定期購読している子供の家庭には経済性或いは文化性と云う意味で或る程度の特殊性がうかがわれます。

以上は週刊誌を定期購読している子供の基本的な特性でありますが，次にそれらの子供の読書生活に関連した面について述べてみたいと思います。そして，この際，週刊誌を買っていない子供の実態にも触れ，両者の比較にも及びたいと思います。

二 読書生活

(1) 読書時間数

「こどもの週刊誌」の定期購読者が一日にどれ位，読書をしているか，と云うことでありますが，「30分から1時間」の子供が全体の45%で一番多くなっております。次は「30分以下」の27%「1時間から1時間30分」の13%で，この状況は週刊誌を買わない子供に較べて大した差はありませんでした。強いて云えば，読書時間が「30分以下」とか或いは「読書をしない」と云った所謂，読書に疎縁な子供が週刊誌を買わない子供に較べて比較的少ないと云うことでありました。

(2) 読書時間の少ない理由

これは一日の読書時間が「30分以下」或いは「読書をしない」と云う子供について調べた結果であります。理由の中で，比較的大きな項目だけを取りあげてみました。

a 勉強が忙しい——週刊誌を買っている子供では29%で，買っていない子供の33%に較べると若干少くなっております。

b テレビが見たい——週刊誌を買っている子供が19%，買っていない子供が14%でありました。大体，週刊誌を買っている子供の家ではテレビが60%普及しており，これに対して買っていない子供の家では50%であります。この10%の差が上のような結果として現れたものと考えられます。

c 遊びたい——この点では両者の間に殆んど差はありませんでした。

d 本や週刊誌を読むのが嫌い——週刊誌を買っている子供の10%に対して，買っていない子供は15%で，週刊誌に限らず一般に読書と云うものに対するつながりは平均的には週刊誌を買っている子供の方が強いと考えられます。

(3) 雑誌記事の嗜好

雑誌のどのような記事に興味を持っているか，と云うことであります。週刊誌を買っている子供が最も興味を示しているのは「スポーツ」で，全体の43%を占め，買っていない子供の18%に較べて非常に高い比率になっております。「スポーツ」に続いては「マンガ」それから「冒険探偵物語」「ふつうの物語」「冒険探偵絵物語」「学習のところ」「ふつうの絵物語」で，週刊誌を買っていない子供との違いは上に述べた「スポーツ」に対する強い好みと，その他では「ふつうの物語」「学習のところ」「ふつうの絵物語」に対する好みの低い点に現れております。

(4) テレビの聴視状況

「毎日見る」子供が全体の58%で最も多く，次は「3日に1回ぐらい見る」の22%で，この二つのケースは週刊誌を買っていない子供をかなり上廻っております。これは先にも触れましたように週刊誌を買っている子供の家庭にテレビがより普及していることに原因しております。

以上は，こどもの週刊誌の定期購読者がどのような読書生活をしているか，と云うことの実態でありますが，次

にそれらの子供と月刊誌や書籍との間係を量的な観点から述べてみたいと思います。

三　週刊誌を定期購読している子供の月刊誌及び書籍に対する接触度

最初に一人当り読書冊数或いは購読冊数を定期購読者と非購読者の別に一表として示しましょう。単位は一カ月間であります。

一般書籍読書冊数

週刊誌購読者　1.55冊

〃　非購読者　1.89冊

マンガ本読書冊数

週刊誌購読者　0.54冊

〃　非購読者　0.49冊

月刊誌購読冊数

週刊誌購読者　1.25冊

〃　非購読者　1.22冊

これらの数字から分ることは，週刊誌を買っている子供のマンガ本，月刊誌の冊数が相対的に多く，反対に週刊誌を買っていない子供の一般書籍の冊数が多いことであります。つまり，週刊誌を買っている子供はどちらかと云うと一般書籍よりもマンガ本や月刊誌に接触する度合が高いと云うことであります。ところで月刊誌の中から学年誌を引き出してみますと，週刊誌を買っている子供は買っていない子供に比較して学習誌の冊数は少ないと云う結果を示しております。以上を総合致しますと，週刊誌を買っている子供は全体として，内容のやわらかなものが好きだ，と云うことでありましょう。非常に大きな差で特色が出ている訳ではありませんが，一つの傾向がかなり明らかに現れていることは否定できないと思います。

む　す　び

「こどもの週刊誌」は現在のところ二誌だけでありますが，その売行は次第に上昇しております。読者層が安定してきた為でありましょう。問題は「こどもの週刊誌」が子供の読書生活に対してどのような影響を与えるか，と云うことでありますが，それを摑むことは創刊後一年も経過していない現在では不可能であります。この報告でも週刊誌がどのような子供に読まれ，そしてその子供はどんな読書生活をしているかと云う，極めて基本的なことにしか触れることができませんでした。然しながら本論でも見ましたように，週刊誌を迎える子供の実態には，それらしい特性も現れているのであります。従って問題の焦点は，その特性と「こどもの週刊誌」が，側面的にはテレビの影響と云うものとも平行して，どのように相関し合って行くかに置かれて参ります。例えば週刊誌を定期購入する子供の家庭には，より高い比率でテレビが設置されております。これはテレビに接する機会が多いから週刊誌を買うと云うよりは，その家庭の経済性に負うところが大きいと思いますが，問題はテレビを見る機会の多い子供と「こどもの週刊誌」がどのように相関し合い，その結果としてその子供の読書生活にどのように作用して行くか，と云うことであります。又週刊誌を定期購入する子供は，相対的に月刊誌やマンガとの関係が深いと云う結果が出ておりますが，そのような関係がテレビとも絡み合って今後，どのように発展して行くか，と云うことであります。或いは又，週刊誌を定期購入する子供は，雑誌記事の中で特にスポーツに対する好みを濃厚に示すと共に，冒険探偵ものに対しても相対的に強い興味を持っていると云う傾向が，今後，読書生活の中でどのような形を取って行くか，と云ったようなことであります。週刊誌と云うものは大人に対してもかなりの影響を持っておりますが，子供の場合も例外となることは恐らくあるまいと思われます。今後の推移に注目したいと考える所以であります。

—第3回研究大会発表—

読書による人間形成への一視角*

(中学生を中心として)

横浜市立鶴峯中学校　　尾　崎　正　憲**

読書人にとって読書と人間形成という課題は決して新らしいことではない。しかし読書による人間形成がどのような形で実証されているかは分明でない。もとより実証されていないからといって，読書が人間形成に不必要なものであるという人はいないだろう。こんな幼稚な疑問と，それへの一視角をもちたいという希望から私のさゝやかな調査がはじまった。

すなわち，人間が生れて育っていく過程において，読書のみならず遺伝的，後天的（家庭，学校，社会）な環境の中で育っている少年たちが，それぞれ人間的な，より人間的な像を求めて生きて行く，その姿勢がそうした多くの因子の相関関係によって漸次変えられつゝあることは意識すると否とに関わらず否定できない事実であろう。

また人間形成に読書が万能でないことは，現在の総ゆる科学や芸術等が尊重され，その中で育てられて行く少年たちであるとすれば，そのことも十分肯定できることであろう。しかしそうした中にあっても，なお科学の媒体としての文学，読書の必要性や効果は否定されないだろう。いや，むしろその重要性さえ認められている現状ではないだろうか。

たしかにマス・コミの洪水の中にあって，読書だけが考え能動的な働きをもっているとはいえない。テレビを見たり，聞いたりして何も考えない人間はいないと同じようにラジオや映画を，聞いたり見たり，あるいは週刊誌やマンガを見て，より深い人生や，より広い人間の生き方について，こうありたいと望まぬ人はないだろう多かれ少なかれ。

こゝで再び考えねばならぬことは，では読書はそうした中にあってどれ程の人間形成に役立っているかということである。

古来から何故読書だけが？　人間形成換言すれば読書による人間形成という命題を高く掲げているのだろうか。しかも厳粛な意味において，こうした考え方も現在の教育の一環としてみるとき余りにも事大主義的な立場にあるという謗りをまぬがれないと思う。すなわち読書はというようなより高次な権威的な，人間形成への能動的な活動という考え方は，より一般的，低次な立場に引下げられねばならないし，そうした読書的態度が民主的な読書であり，文化を支え，より新しい文化を生む原動力とさえなるのではあるまいか。すなわち過去の読書態度が往々にして一般的な教育態度と違った次元にあったことは学校を出ると本を読まぬ社会人となり，考えを失った，単に惰性を生きる人間を作っていたという一事をみても読書という学習態度が，何か偏った活動をなしつゞけていたのではあるまいか。そうでなければ前述のような否定さるべき事実は考えられないはずである。このような過去のそれをみても，我々は十分反省させられるところであり，将来への読書教育計画がそうした前提をふまえて考えられねばならない時点に立っていることは，読書人のみならず一般世人のひとしく反省しているところであろう。

さて洪水のような出版ジャーナルの中にあって，よい本，おもしろい本，ためになる本を選んで読むそれは読

---

* An Angle of View on Reading for Personality Formation

** Masanori Ozaki (Turugamine Middle School, Yokohama)

書人にとって厳しい人生を生きぬく態度でもあろう。そうした人生への対決が読書に向けられたとき読書はより一般的になり，永続的になり，より人間形成への大きなエネルギーになることを考えたい。そして，読むことが，すなわち人生を生きること，生きることが読書するという読書人的考え方がまがりなりにも肯定されるのではあるまいか。我々はこゝで再び読書が過去の思い上った読書や高尚な態度？というようなそれに逆流することのないように読書教育への道を真剣に考え実践しなければならないと思う。これが読書人に課せられたる大きな現在と将来への宿題だろうと思う。そして読みながら考え，考えながら読み，知って行なうということを真正面から打ち出した古聖のことばを自らの毎日の生活の中で実践し証拠づけていかなければならないと思う。

現在の少年たちがいろいろの読書生活の中で個々の人間を形成しながら社会的に生きていく態度一選択眼一自主性を育てていくような読書環境の整備は現在の大人特に著述家，出版者，教育者，親たちに課せられたる大きな責務であり，そうする努力の中に大人自身がより正しい読書による人間形成への実践を積み重ねるものであるということを合せ考えていかなければならないと思う。

さて，前おきとして読書がより一般的になり，より生活的になるようお互が努力することによってこそ読書が真の人間形成に役立つものであるということを考えそれを一層深めていくという態度を育てるということをもって前述の矛盾的な記述のまとめとしたい。

ここに至って，中学生が総ゆる環境の中で育っているその中で読書という面から眺めた人間形成という一斑をのぞみ見ることは決して否定されることではないと思う。そうした考えに立って以下示すような調査をこころみ読書と人間形成への一視角としたいと思う。

すなわち，ある特定の教科（国語，数学，保体）と全教科の優れている生徒十名ずつを選んで実施したのであるが，特定の教科が優れている生徒はその教科が他の教科と比して好きであるという生徒一人一人の答えはこれからの調査と比較してみるときおもしろい現象が表れるものと思う。選ばれた生徒は成績１～５の段階中，国語（数，体）だけが五の段階で他の八教科は四または三の生徒である。

なお国，数，体の各教科の生徒は２年生430名から選び，全五の段階の生徒は３年生430名から選んだものである。（２年間に渡って調査したものである）

一　四月以後読んだ本の名を書きなさい（十月しらべ）

(1)　国語の優れているもの10名（以下，数体とする）

坊っちゃん６　次郎物語４　雨月物語４　一房のぶどう３　吾輩は猫である３　里見八犬伝３　戦争と平和３　嵐ケ丘３　アンデルセン童話３　光を掲げた人々２　小僧の神様２　仟鹿物語２　二十四の瞳２　文鳥２　ああ無常２　足長おじさん２　ノーベル賞物語２　シェクスピア２　ロビンソンクルーソー２　トムソーヤー２　宮沢賢二２　平家物語２　源氏物語２　風立ちぬ２　夏目漱石２　クオレ２　以下一冊ずつは略す。

(2)　数学

坊っちゃん７　吾輩は猫である４　雨月物語３　イワンの馬鹿３　クオレ２　次郎物語２　キュリー夫人伝２　シュバイツァー伝２　為朝物語２　西郷隆盛２　武道伝来書２

(3)　保体

次郎物語３　日本史３　里見八犬伝３　東海道膝栗毛３　海底三万マイル２　シイザー２　ゲーテ２　坊っちゃん２　軍紀物語２　プルターク英雄伝２　三四郎２　草枕２　源氏物語２　義経記２　シートン動物記２　武道伝来書２

(4)　全

坊っちゃん２　草枕２　嵐２　平家物語２　破戒２　山本有三集２　国文法２　英作文２　社会科系６　理科系６　全科のまとめ３　数学系（学参もの）４

以上は各教科別に優れているものと，全五の段階の生徒の読書（傾向系列）であるが，国語系の生徒のそれは文学的なものが多く読まれ，次に保体系の生徒がそ

れに準じ，数学系の生徒は三位になり科学者の伝記などが少しみえ，全五の生徒のそれは教養的なものが低く，多く学参ものが読まれている。これは読書が受験本位に向けられている証拠でいろいろの問題を含んでいると思う。

二　今まで読んだ本で考え方や生き方に影響を与えた本を書きなさい

(1) 国語

○小学生時代……ヘレンケラー，日蓮，アンクルトム物語，一茶，路傍の石，石川啄木，ベートーベン，晶子伝記。

○中学一年時代……ヘレンケラー，心に太陽をもて，地底旅行，失なわれた世界，一房のぶどう，汚れなきいたずら，ジヤンクリストフ，光を掲げた人々，二人のロッテ。

○中学二年時代……草枕，ジギルとハイド氏，杜子春，子供はそれさえ知らない，己を耕す，原爆の記録，少年記，次郎物語，にんじん。

(2) 数学

○小学生時代……光を掲げた人々，アマゾン探険記，エジソン，シュバイツァ，北斎，リンカーン，リビングストン。

○中学一年時代……リンカーン，ベニスの商人，坊っちゃん，級の光，キュリー夫人伝。

○中学二年時代……湯川秀樹，キュリー夫人伝，黒馬物語，つづり方兄妹，次郎物語，風の中の子供，母のない子と子のない母と。

(3) 保体

○小学校時代……あゝ無情，樋口一葉，豊臣秀吉，風の又三郎，次郎物語。

○中学一年時代……花咲く丘，アンクルトム，宮沢賢治，少年の歩み，サバクの探険。

○中学二年時代……しいのみ学園，ナポレオン，夏目漱石，次郎物語，曽我兄弟，母のない子と……。

(4)全

○小学時代……アンクルトム，キューリー夫人伝，エジソン，小公女，小公子，間宮林蔵，伊能忠敬。

○中学一年時代……山本有三集，漱石集，にんじん，牧野富太郎，赤毛のアン，大地，丸。

○中学二年時代……己を耕す，エジソン，フランクリン伝，レミゼラブル，風の中の瞳，心に太陽をもて，コタンの口笛，親鸞。

以上は特に感銘深く，考え方や生活の上に大きな影響を受けた本を，小学校時代，中学の一，二年生に分けて誌したものであるが，国語系の生徒と数学系の生徒との対比は特に顕著な差異のあることに気付くのであるが国語系の生徒の読書歴は文学的なものに集約されるが，数学系の生徒のそれは，科学系特に自然科学系統の学者等の伝記，探険記等に集約されるのではあるまいか。また全五の生徒のそれはそうしたものの総合的なものというように見られる。このように読書歴を反省してみると小学校時代，否幼年時代の読み物が何か決定的な学習態度なり，生き方，人生方向なりに対する一つの意義をもっているように思えるのである，それが中学時代になると，考え方，学習態度引いては学習能率の差異を招来するのではあるまいか。ここにも一つの重要なる読書教育に対する意義とか位置が確定されるわけであろう。

三　毎日どれくらい読書するか

(1) 国語……平均　1時間28分
(2) 数学……〃　57分
(3) 保体……〃　58分
(4) 全……〃　1時間48分

読書時間というものが，読書量にある程度比例すると考えるならば，相当の開きをもって，その能率なり生活化に影響してくることは必然であろう。

四　本はだれが求めてくるか

(1) 国語……自分8人　父2人　母2人　兄2人
(2) 数学……自分5人　母3人　父2人　姉兄かく1
(3) 保体……自分8人　姉2人　父1人
(4) 全　……自分7人　姉2人　父1人

これは読書環境の一つの立場として考えてみたが，国語系の生徒は自分で好きな本を求めて自ら読むという積

極的態度がうかがわれる。それは同時に全五の生徒にもいえることであろう。往々にすると親が多忙と，貧困のため，無関心のため自ら選んで悪書を読むことさえあるが注意すべきことであり，教育の対象として十分考えねばならぬことだろう。

五　一ケ月の本代はどのくらいか

(1) 国語……183円

(2) 数学……121円

(3) 保体…… 93円

(4) 全……195円（学参も入れて）

本代一つをみても，全五の生徒と他とは相当の開きをもっている，これだけの実績が積み重なって一年二年と続けられる読書生活の深さと，広さは相当なものであろう。

六　読書の目的について

(1) 国語……教養7おもしろい3

(2) 数学……教養5　おもしろい5　学科1　他1

(3) 保体……教養5おもしろい5他1

(4) 全……教養6　おもしろい3　教科1　他1

多くの生徒が教養としているが，他人と話して負けられないや，友人と交わりたくないからなども各一ぐらいあった。考えるべきことであろう。

七　読書は系統的か乱読か

(1) 国語……乱読7　系統的2　不明1

(2) 数学……乱読6　系統的3　〃

(3) 保体……乱読4　系統的2　〃

(4) 全……乱読7　系統的2　〃

多くの生徒は乱読となっているが，国語系のそれは文学的なもののうちで何でも読むという意味にとれば了解されるであろう。そして数学系の系統的三人は科学的読物に対する傾向を意味するものと考えられるだろう。

八　どんな種類の本を多く読むか

(1) 国語系……純文学5　冒険物2　伝記2　工業系2　歴史物語1　化学1

(2) 数学系……歴史物語4　冒険物3　純文学3　伝記3　化学2　工業2　法経2

(3) 保体……歴史物5　伝記4　純文学3　冒険物3　少女小説2　武勇伝2

(4) 全……文学7　歴史4　伝記4　物理1　化学1　思想1　生物1。

これは各人がそうした読書ジャンルの中で意識的に生きているという表明で各々の質と量との相違からみても明かなる読書姿勢がとられているというふうに考えられる。このような読書ジャンルは当然成長していく生徒の姿勢であり，毎日の思考なり行動なりへの作用もまた大きいことは見逃し得ぬところであろう。

九　月平均幾冊ぐらい読みおえるか

(1) 国語……4.7冊

(2) 数学……6.9冊

(3) 保体……4.2冊

(4) 全……3.3冊

これは数学系がトップであるが，これは雑誌類も含めたもので着実に読んでいる証拠かも知れない。国語系はやや劣るが，これは割に厚いまとまった，文学本と取組んでいるという見方もできよう。要するに質と量との問題になると，冊数だけではやや不正確な答しか得られないわけである。

十　自分の性格について

(1) 国語……思考型3　消極的3　行動型2　おちつきがない4　うちき4　がんこ1

(2) 数学……思考型2　消極的2　積極的2　おちつきがない3　がんこ2　うちき2

(3) 体育……おちつきがない4　思考型2　うちき1　行動型1

(4) 全……思考型4　消極的2　行動型2　おちつきがない1　がんこ1

以上は質問のことばの不明確さから色々とチエックしたので数は合わないが，しかし一応の見方で，あの子はそう考え，そう生きているのかというぐらいの蓋然的な答が得られたことはまちがいないだろう。ともあれ文学的傾向の強い生徒が静かに物思いにふけり，消極的であり，反面十分な思考を持たずおちつきがないという見方

も矛盾的ながら一応考えられることだろう。また体育系のそれが，おちつきがないという反省は悪くいえば軽薄であるが，他面，明朗，活発であるという見方も全然誤った判断でなく自分の姿勢を素直に眺めているとも考えられるだろう。最後の全五の生徒の思考型という見方もまた，全教科に渡って十全なかまえと，配慮をもって勉強しているとすれば妥当な反省と見られよう，ともあれ，全五の全部の生徒が生徒会運営にも活発に動き，ホームルーム等で他の生徒の範として行動し，時間中もまた十分な成績をあげているとすれば，そうした考えも誤った見方でないことが肯定されよう。

十一　将来希望する職業について

(1) 国語……小説家1　会社員1　国語の先生1　新聞記者1　工場1　パイロット1　法律1　科学者1　医者1

(2) 数学……船員3　工業1　機械1　化学1　公務員1　政経1　先生1

(3) 保体……事務員2　会社1　機械1　商業1　外不明

(4) 全……技術者2　工業技師1　薬剤師1　事務員1　デザイナー1　実業家1　医者1　弁護士1　パイロット1。

これは現在の生徒の生き方から（思考的にみても）将来への職業観，生活設計を，すなわち現在の夢や，憧れをこれに託するとあれば，やはり三つ子の魂，百までという考え方が全く誤りでないことが分るだろう。それは，調査の1～10分までの経過をみても一応了解され実証されるようにも思える。結論を急いだがこんなところにも読書と人間形成という，好きだから努力し，そうした環境にあるから好きになり努力するというような相関関係の位置が分るような気がする。

さて，この他に，毎月読む雑誌とか，親の読書への関心とか，親の職業についても調べてみたが未整理のため割愛した。これは今後のより整った調査をもとに再び実施したいと思うが，それらをちよっとみても種々と問題を含んでいるように思われる。

以上11項に渡る調査をまとめ，種々と観測を下してみたが，好きだから勉強もできる，勉強がよくできるからより研究し，そうしたバックグランドを整備しながら，より確実なる人間形成へ向って勉めつつある生徒にとって読書はその栄養として，大きなエネルギー源としてあることだけは否定できない事実であろう。こうした点からみて，読書が毎日の生活の中で占める位置は大きく重要であることは今更云々するまでもないが，ではどうしたら，最も効果的に読書教育が計画され実施されたらよいかは今後の問題といわず，即今，喫緊な問題として考えられなければならないと思う。

すなわち，読書が心の糧として，生れてから成人するまで，成人してから生涯を終るまで一日も欠くことのできない重要な意義をもっている反面，多くの父兄から案外，顧みられぬ多くのものをもっていることは，なんとしても残念でならない。そして見捨てられた生徒たちに対してより総合的，計画的な読書教育を必要とすることは今更の如く深い希望をもつものである。多くの文化財の存在する中に在って，それを有益に利用することも，悪用することも可能である。テレビを通して読書に接近し，映画を見てから読書によってそれを再考するように常に読書が身近かに在って考えながら生きていく生徒をいや人間を作りあげていくようもっともっと励めたいと思う。

—第3回研究大会発表—

マス・コミ教材の研究*

——主として高校国語教科書の中のものに就て——

三重大学　佐　藤　　貢**

昭和35年度に使用する高校国語教科書（文部省検定済となったもの）の中には，次の如きマス・コミ教材がある。

清水書院（高木市之助）
　映画の鑑賞（飯島　正）　新聞の使命（千葉雄次郎）
　ラジオ・テレビ（南博）
中央図書出版社（遠藤嘉基）
　映画の鑑賞（飯島　正）ラジオのことば（中村通夫）
　マス・コミュニケーション（南博）
　ニュースとは何か（清水幾太郎）
教育出版（池田亀鑑）
　現代新聞の機能（内川芳美）　新聞の写真（伴俊彦）
　現代社会と放送の機能（南博）
　現代のマス・コミュニケーション（南博）
　コピーの支配（清水幾太郎）
秀英出版（麻生磯次）
　映画の鑑賞（飯島　正）
　マス・コミュニケーションと言語生活（西尾　実）
　マス・コミュニケーションと新聞の使命（千葉雄次郎）
実教出版（新村出）
　ラジオのことば（石原裕市郎）
　物語放送（徳川夢声）　新聞の文章（木下宗一）
　新聞の広告（大島泰平）　映画の鑑賞（飯島　正）
　雑誌の出来るまで（雑誌研究委員会）
三省堂（土井忠生）
　映画の美（津村秀夫）
　マス・コミュニケーション（重松敬一）
　新聞の正しい読み方（城戸又一）
三省堂（金田一京助）
　人間のことば（フリー・池上保太・片山嘉雄訳）
　マス・コミュニケーションと新聞（長谷川如是閑）
　新聞の読み方（真下信一）
教育図書（守随憲治）
　映画の鑑賞（飯島　正）
　ラジオ・テレビのニュース性（南博）
　新聞の正しい読み方（江尻　進）
　編集の仕方（美作太郎）
　マス・コミュニケーションとしての出版物（中島健蔵）
筑摩書房（西尾　実）
　マス・コミュニケーションとしてのことば（西尾実）
　映画と連句（寺田寅彦）
角川書店（武田裕吉）
　原稿（美作太郎）
　映画の鑑賞（飯島　正）
　マス・コミュニケーションとことば（宇野隆保）
実教出版（佐々木八郎）
　新聞の使命（千葉雄次郎）
　新聞編集の魔術（荒垣秀雄）
　ラジオ・ドラマのテーマと素材（堀江史郎）
　ラジオ・ドラマ「時間について」（森本薫作・内村直也改訂）
　テレビの商業放送（内村直也）
　時画の題材と主題と結末（野田高梧）

---

* A study on Teaching Materials concerning Mass-Communication in High School Text-Books of Language

** Mitugu Satō　(Mie Univ.)

読　書　科　学（Ⅳ．4）

昇竜堂（東条操）

新聞と誤報（阿部真之助）

新聞の機能と読者

談話のことばと放送のことば（中村通夫）

績文堂（土岐善麿）

都会青年の生活の意見（日本新聞協会・国語研究所）

新聞はいかに読むべきか（城戸又一）

映画の鑑賞（飯島　正）

ラジオの聞き方（片桐顕智）

マス・コミュニケーションと言語生活（西尾　実）

マス・コミュニケーションと生活心理（南博）

中教出版（藤技誠記）

足音（内村直也）

解説「足音について」

大原出版（成瀬正勝）

映画の鑑賞（飯島　正）

現代のマス・コミュニケーション（扇谷正造）

新聞の文章（茂木　政）

ラジオのことば（片桐顕智）

文学社（原富男）

二十四の瞳（壺井栄，木下恵介脚色）

映画の本質（今村太平）

新聞編集の魔術（荒垣秀雄）

新聞の文体（波多野完治）

マス・コミュニケーシヨン（南博）

明治書院（西下経一）

新聞の使命（千葉雄次郎）

ラジオの文章（片桐顕智）

宣伝広告の心理

大修館（能勢朝次）

マス・コミュニケーションと新聞の使命（千葉雄次郎）

ラジオ・テレビ（南博）

麦秋（野田高梧，小津安二郎）

シナリオについて（佐々木孟）

日本書院（岡崎義恵）

落ち葉（内村直也）

放送の聞き方（片桐顕智）

マス・コミュニケーション（井口一郎）

新聞の指導性（土屋　清）

新聞ができるまで（益井康一）

好学社（志賀直哉）

映画の鑑賞（飯島　正）

マス・コミュニケーションについて（千葉雄次郎）

新聞・ラジオ・テレビジョン（伊藤慎一）

教育図書（山岸徳平）

ラジオと聞きじようず（鈴木　博）

新聞を深く読むために（浦上五六）

東京書籍（柳田国男）

なし

以上の二十二種類の国語教科書の中の教材の出典をあげると

笠信太郎「新聞の読み方に関する12章」（中央公論社）8

飯島　正「映画」（毎日新聞社）7

毎日新聞社「ラジオ・テレビ」（毎日新聞社）5

飯島　正「映画入門」（角川書店）

毎日新聞社「新聞」（毎日新聞社）5

「現代のマス・コミュニケーション」（春陽堂）3

片桐顕智「ラジオの聴き方」（至文堂）2

「マス・コミュニケーション講座」（河出書房）2

野田高梧「シナリオ構造論」（宝文館）2

壺井栄原作木下恵介脚色「二十四の瞳」2

美作太郎「執筆・編集・校正・造本の仕方」（ダイヤモンド社）2

片桐顕智「ラジオと国語教育」（元々社）1

千葉雄次郎「新聞」（有斐閣）1

日本放送協会「アナウンス読本」（日本放送協会）1

美作太郎「ことば，話，文章」1

雑誌研究委員会「雑誌の話」1

堀江史郎「ラジオ・ドラマの作り方」（宝文館）1

木下宗一「新聞の基礎知識」（磯部書房）1

伴俊彦「新聞の写真」1

毎日新聞社「言語と生活」1

野田高梧，小津安二郎「麦秋」（理論社）1
真船豊「灯」1
内村直也「落ち葉」1
清水幾太郎「ジャーナリズム」（岩波書店）1
清水幾太郎「社会心理学」（岩波書店）1
波多野完治「文章心理学入門」（新潮社）1
徳川夢声「話術」（白揚社）1
井口一郎「マス・コミュニケーション」（光文社）1
南博「社会と個人」1
南博「社会心理学」（光文社）1
茂木　政「新聞・新聞社・新聞記者」（三省堂）1
土屋　清「新聞」（アテネ文庫）（弘文社）1
浦上五六「新聞の知識」1
P・ドノワイエ著城戸又一訳「世界の新聞」(白水社) 1
杉村広太郎「新聞の話」（朝日新聞社）1
今村太平「映画の本質」（社会思想研究会）1
津村秀夫「映画美の味わい方」（大泉書店）1
朝日新聞社「宣伝・広告」(アサヒ相談室) 1
日本新聞協会，国語研究所「青年とマス・コミュニケーション」1
重松敬一「マス・コミュニケーションと教育」1
「マス・コミュニケーション（映画，ラジオ，テレビ）講座」（河出書房）1
大熊信行「標準青年学級教本」（一般教養編）1
寺田寅彦「寺田寅彦全集」1
中村通夫「言語生活」（雑誌26年11号）2
書きおろし文4
不明（鈴木　博）1

の如き刊行物から教材が採られていることがわかったのである。

国語教科書の中に，何故にこれらのマス・コミの単元が設けられるようになったのであろうか。問題はその理由を究明する必要がある。

一体，マス・コミュニケーションというのは新しい概念である。国語の辞典を見ると，昭和28年刊行の大日本国語辞典には載っていないが，昭和30年刊行の広辞林（三省堂）の改訂版や，新村出「広辞苑」（岩波書店）にはじめて載るようになった新語である。

広辞苑の2003頁を見ると「マス・コミュニケーション (mass-communication)，大衆伝達，大衆通報，新聞，雑誌，ラジオ，テレビジョン，映画などの媒体を通じて行われる大衆への大量的な伝達」と説明してあるのである。

現代はマス・コミュニケーションの時代だといわれるが，勿論前の時代に於ても，多数の人達の間で行われる大量の意志交換の機能や手段が必要でなかったわけではない。

しかし，時代がそれを要請し，又文明の進歩が自然科学の面で著しく発達をとげて，この要請に応えることが出来るようになったのは，やはり最近のことだといえるのである。一方またこのマス・コミュニケーションということに就ての理論的研究が進んだのも古いことではない。

そのことは，現代の社会機構を動かす原動力がダイナミックになり，又スピードを要求するようになったことと関連もしているのである。

ラジオもテレビも新聞も雑誌も，そして映画も，現在ではマス・コミュニケーションの手段として，なくてはならぬものとなり，それらは，それぞれの目的に従って一長一短は免れない。

したがって，それぞれの目的に従って最も有力な手段を最も有効に使用する配慮が必要となってくる訳である。

一方，それを受け入れる側に於ても，その正しい機能を十分に理解していなければならない。

文化的な民主主義社会は，この機能の十分な発揮なくしては円滑な運営が期せられないのである。

そのために，マス・コミュニケーションの単元が国語科の中に設けられたのであろうと思われるのである。

例を映画にとって見ると，映画はマス・コミュニケーションとして重要な位置を占めるばかりでなく，最も安直な大衆娯楽として，又教育の手段として強い影響力を

持っている。

映画には，劇映画，ニュース映画，記録映画，文化映画など，その目的と内容によっていろいろの種類がある。

それらは上映される場合に観客の対象と，観客が何を求めるかの要求によって，それぞれ異なった意味を持ってもいるのである。

映画は，芸術の形式としては多くの関連芸術の総合的な性格を持って居り，演劇などと同様に多人数によって制作される集団芸術であり，又それは文化の進歩の最尖端をゆく最も自然科学的に高度の発達をとげた機械力に支えられているのである。

サイレント映画からトーキーになり，更に色彩映画が出来，天然色映画，シネマスコープ，シネラマというふうに，多くの工夫と改善が加えられ，映画というわく内での形式美の進展は，今後も創意と工夫の結果が多く期待されているわけである。

映画の機能の中には，それ故国語教育のらち外にはみ出るものもあるのである。しかしながら，映画の本質を構成し，その美を発揮する要素として文学や言語を没することは出来ないのである。

それは，国語学習のねらいである四つの要素の総合と密着しており，映画の機能，映画というメカニズムのなかで追求されるだけの意義をもっているのである。ある意味では，文学以上に生活に密着した性格を持って迫っても来るのである。

しかも，今後ますます優位にたってゆく，最も大衆的な，最も有力な芸術形式である。

それ故，映画の機能をマスターし，映画をどのように見てゆくかということは，国語学習の面から，ネグレクトできないので，映画に関する単元が国語科の中に設けられたといってもいいのである。

このことは，其他のマスコミ教材の場合に於てもその理由が夫々あるのであるが，例を映画にとって述べただけのことである。

これらの教材の終を見ると，研究とか学習の手引とかいうものがあって，その単元の内容をつかみとるもの，知識を整理するもの，その知識から現実的のものを如何に考えてゆくべきかをねらった質問が三四大低の教科書には載せている。

そのねらいが，マスコミの問題，映画の問題，新聞の問題にしても，社会学の基本問題であり，映画芸術であり，新聞学の教養が必要であるものが頗る多く，国語国文漢文学の教養だけでは指導することは不可能のように思われる内容を持っているのである。

今，「教育図書」刊行の教科書のものを例にとると，「ラジオ・テレビのニュース性」（南博氏の文）では，

1．マス・コミュニケーションの本質を考えてみよう。
2．マス・コミュニケーションの手段として用いられる媒体の，それぞれの特色を話し合ってみよう。
3．ラジオ，テレビ，新聞のニュースを比較して，その長所短所を話し合ってみよう。

という三問題が載っているのである。

これは，毎日新聞社刊「ラジオ・テレビ」の中の一節を教材とした単元を読了してから，これらの問に就て考えて見ることになっているものである。

このマス・コミュニケーションの単元の目標は，マス・コミュニケーションの正しい概念を把握し，現在におけるマス・コミュニケーションの手段にはどのようなものがあり，そしてその長所と短所はどのような点にあるか研究し，又ＰＲとは何か，その本質を理解したり，ジャーナリズムの本質を理解したり，出版に於ては，編集者と読者との関係を理論的に整理させようとする点にあるらしいのである。

そして一問では，「できるだけ多くの大衆に可能な限り早く，詳しく，正確に，しかも印象的に報道すること」を，二問では「電波を利用するラジオ・テレビは，ニュースの同時性（早さと印象的な点）では最も優れているが，それだけに不正確なうらみがあり，記録性や解説性の点でも劣る。印刷物の代表である新聞や雑誌は，ニュースの同時性ではやや劣るが，確実性は高く，記録性，解説性の点もすぐれていること」を，三問では「な

るべく具体的に，ある事件などに就ての報道をとりあげて比較検討させ，自由に討論させて，その結果をまとめること」を生徒に要求しているのである。

「新聞の正しい読み方」（江尻進）に就ては，

1　次の用語を説明せよ

バイライン。コラムニスト。プレスキャンペーン。

2　新聞記事において，筆者の署名入りの評論と署名なしの評論の区別と，広告の目的を説明せよ

等がある。

問一の用語に就いては，新聞語辞典（朝日新聞社編 1959）を見ると，

「プレスキャンペーン press campaign 社会改革，政治問題などを新聞が積極的，主張的にとり上げること」(同書 318 頁）とあるが，他の語はこの辞典にも載っていないのである。

勿論国語辞典にも載っていないから，取材執筆者のなまえを入れた記事のことを by line ということや，新聞などのかこみ欄の記事を書くものを columnist という語を教師も生徒も英語辞典などで調べるより外に方法がないわけである。

問二は，「署名なしのものは，たとえば社説のようにその社の一貫した立場と主張を表わしたもので，特定の個人の意見を表わすものでない。これに反して署名評論は，その社の意見ではなく署名人の責任において執筆されたものである。だから時には社説と反対の署名評論が掲載されることもあり得ること」や「商品やサービスに金を投じさせる目的で，その内容を広く知らせ，人々の欲望をそそることを意図する人に紙面の一部を売ったものであること」の答を要求しているのである。

次に「映画の鑑賞」（毎日ライブラリー映画の一節で飯島正氏の執筆）の単元では，

1　理想的な鑑賞態度

2　映画鑑賞の場合予備知識を多くもつことの必要のないのはなぜか

3　映画鑑賞後自分の鑑賞眼を高めるにはどうしたらよいか

4　映画のもつ文化的意義を話し合ってみよう

というのであるが，これに対して教授指導書は，次の如き参考文献をあげている。

映画芸術（岩波講座の日本文学）寺田寅彦（岩波）

映画の世界像（全集第3巻）寺田寅彦

映画と批評（津村秀夫，角川）

映画と鑑賞（津村秀夫，創元社）

映画（毎日ライブラリー飯島　正）

映画鑑賞読本（飯島正，白水社）

映画の技術と見方（吉村公三郎，至文堂）

映画五十年史（筈見恒夫，鱒書房）

映画のみかた（爪生忠夫，岩波）

日本の映画（爪生忠夫，岩波）

以上は，22種類の教科書中の一つをとりあげて見ただけであるが，その内容は国語教師として見ると程度の高いものである。

これを三重県の高校国語教師は，これらのマスコミ教材をどのような取扱方をしているかというと，

1　即ち省略してしまったもの，一読しただけである，が30%

2　これらの教材に就ての知識の不足に苦しんだ，40%

3　とにかく省略もせずに教授した，30%

ということになる。

更に三重県の高校卒業生として三重大学に進学した者に就て

1　マス・コミの意味

2　マス・コミという語に就て今迄に調べたことがあるか

の問に対して，

A．意味のわかっている者　42%

B．わかったようなわからぬ者　35%

C．わかっていないと判定出来る者　23%

という調査の結果となって表れたのである。

この数字から直ちに推測することは出来難いとはいえ，とにかく国語教科書のマス・コミ教材を現状は省略したり国語教師として取扱い難い単元が原因しているこ

とは事実であるといえる。

国語教材研究講座（5）（朝倉書店刊）を見ると，説明文的教材として，中学二年生に「映画の見かた」を指導する場合に，倉沢氏は「マス・コミという教育内容は，今は国語科でやっている。社会科でもやるべきだと思う」とか滑川氏は「マス・メディアとしての映画を扱うとき，国語教材として説明文の形態として，その内容が言語や言語生活に関係したものの方が望ましいが，これは少し欲がふかい」とか，飛田氏は「映画用語，特殊用語と思われるものが多く使用されている。一応それぞれの語の持つ意味を理解させておく必要がある」と述べている。

この批評は，同時に高校教材の場合でも同様であろう。

こういうことを考えて見ると，読む，書く，聞く，話すの四要素を小学校から展開し高校へ発展さす国語指導要領は，理論としては洵に理想的なものである。
然し高校国語教師の免許状は国語国文漢文の十六単位をとれば貰えるのである。

教科書は指導要領に依って作成されているが，国語教師になるためにはマス・コミの教養科目を履修しなくともいいという点に矛盾がある。

—第3回研究大会発表—

農家のマス・コミ接触*

兵庫県立佐用高校

庵　逧　　巖

従来，社会の各階層，各分野にわたって，マス・メディアへの接近の実態が広汎に且精密に調査，分析されて来たが，多くは個々の人間を対象にしたものであった。さいきん，これに対して「社会的統合力として強力なシンボル操作を行うマス・メディア」が，直接「相互に関連性を欠いたアトムのごとき無力な個人」に働きかけるのではなくて，個人の属する第一次集団によって，ある屈折を受けた後に個人に影響を及ぼすとする，カッツやラザースフェルドの所謂「二段階の流れ」（Two-step flow of communication）仮設が重視されるにいたった。

即ち，「媒体対個人」に代って「媒体対集団」の図式の究明が必要となり，更に小集団における「オピニオン・リーダー」のあり方や，「パーソナル・コミュニケーション」の価値が再検討されなければならない。

この意味において，昨年度報告した兵庫県下の一農村における高校生のマス・コミ接触の実態分析に続いて，本年は更に高校生たちを含む農家の家族集団において，どのようにマス・コミが受容されているかを考えてみたい。このことが，生徒のマス・コミ指導にとっても，不可欠の資料であると考えたからである。調査日時は1959年10月中旬であり，対象となったのは，兵庫県佐用町北部の農家42戸，222人である。この農家の家族集団において，マス・コミ接触の通路は誰によって開かれ，家族のどの範囲がそれに接触して影響を受けているかを調査したわけである。その方法は，42名の高校生を調査員として，Printed media の中で雑誌，Nonprinted media の中でラジオを対象に，接触の実態を観察報告させた。

先ず，家族構成や年齢層は第1表の通りであるが，耕地の零細化と農村不況に伴う青年の離村傾向が著しい結果として<兄・姉>の層が少いことが目立つ。また，家族構成においては，親子兄弟から成る2世代の家族が大半を占め，かって見られた3世代以上の複合家族が少く

第 1 表A　家族構成と年齢層

続　柄	年齢層	平均年齢	構成比率
父	36～66才	50才	19%
母	31～66	46	15
兄	20～33	26	8
姉	19～25	22	3
私(高校生)	15～19	17	19
弟	3～14	13	13
妹	6～16	12	11
祖　父	68～82	76	2
祖　母	66～89	75	5
甥	2～12	6	1
姪	6～ 9	7	1
兄　嫁	21～34	26	3

第 1 表 B

構成員	戸　数	比　率
ABD	22戸	52%
ABD	12	29
ABC	1	2
ABCD	3	7
ABCE	4	10

A　父母　　B　兄弟姉妹
C　兄嫁　　D　祖父母
E　甥姪

* How are Farmers approaching Mass-Communication?

** Iwao Anzako (Sayō High School, Hyōgo-ken)

なっており，1戸平均5.2人である。

さて，雑誌について，誰が接触の通路をひらいたかを示すのが，第2表Aである。もちこむ方法としては，購入と借覧の二つがあるが，第2表Dに見られるように，かなり借る率が高い。全体としては，10回のうち4回は借りて読むことになる。その持ち込み手は，私＝高校生が圧倒的に多く．「家の光」においては，父母が大半を占めている。専門雑誌——主として農業技術誌——の半数は兄がもちこみ，母と私がこれについでいる。全体として，高校生が45%を占め，父，母，兄がこれに次いで多い。

次に，各構成員を単位に，どんな種類の雑誌をもちこんでいるかを第2表Bで見ると，父母は「家の光」に集中し，兄は週刊誌についで専門誌が多い。高校生は，すべての分野にわたって持ちこむことが目立っている。家族全体としては，少年少女雑誌，家の光及び週刊誌，婦人雑誌，文芸雑誌，明星，平凡の順となり専門誌が最も少い。

こうして，家族集団のなかに持ちこまれた雑誌は，もちろん持ちこんだ当人は読むであろうが，他の家族はどのように接触しているであろうか。これを明らかにするのが，次の第2表Cである。各個人の接触度を，よく読む，少し読む，よまないという三段階に分けて各ケースを観察した集計の百分比である。

これについて，目立つ事実は，家族全般にわたって広く読まれているのは「家の光」であって，よく読むものが65%に達し，読まないものは8%にすぎない。これにつぐのは明星，平凡であるが，父母や兄夫婦に，少し読むケースが多く，全体としては，半数近くが一部分の読者であり，よく読むのは39%に止まり，「家の光」の巾と深さには到底およびない。次に文芸誌については，読者と非読者が略同率で四割余ずつを占め，中間属が少い。読者層は，高校生，兄に多く，弟妹，祖父母が比較的読まず，父母はその中間である。週刊誌については，主た

第2表A 雑誌は誰が持ちこむか

(各雑誌を100とした比率)

	家の光	週刊誌	明星・平凡	婦人雑誌	少年少女雑誌	専門誌	文芸雑誌	全体
父	38	14				12	5	11
母	38	3		14		13		10
兄	7	21	7			50	16	10
姉		3	14	9	2	12		4
私	14	55	64	58	46	13	63	45
弟					26		11	8
妹		3	14	9	23		5	9
甥					3			1
兄嫁	3			9				2

第2表B どんな雑誌を持ちこむか

(各個人を100とした比率)

	父	母	兄	姉	私	弟	妹	甥	兄嫁	全体
家の光	65	69	12		6				34	18
週刊誌	23	6	37	14	22		7			18
明星・平凡				29	12		13			9
婦人雑誌		19		29	18		13		66	14
少年少女雑誌			6	14	25	83	60	100		24
専門雑誌	6	6	25	14	1					5
文芸雑誌	6		19		16	17	7			12

第2表C　もちこまれた雑誌を家族はどのように読んでいるか

（各個人の各項目を100とした比率）

	接触点	父	母	兄	姉	私	弟	妹	祖父	祖母	甥	姪	兄嫁	全体
家の光	よくよむ	72	88	79	17	82	20	36	25		0		72	65
	少しよむ	24	8	21	83	15	47	46	50		100		28	27
	よまない	4	4	0	0	3	33	18	25		0			8
週刊誌	よくよむ	29	42	77	50	80	0	18	0	0			0	37
	少しよむ	33	27	8	25	10	12	35	50	0			60	22
	よまない	38	31	15	25	10	88	47	50	100			40	41
明星・平凡	よくよむ	17	21	50	66	86	25	33		0	0		33	39
	少しよむ	67	27	50	34	14	25	33		34	100		67	47
	よまない	10	7	0	0	0	50	33		66	0		0	14
婦人雑誌	よくよむ	21	45	0	66	76	4	36	0	0			60	33
	少しよむ	16	14	36	34	24	4	45	0	0			40	19
	よまない	63	41	64	0	0	92	18	100	100			0	48
少年少女雑誌	よくよむ	8	15	40	20	68	39	61			100		17	33
	少しよむ	24	28	30	20	13	15	8	12		0		17	17
	よまない	68	56	30	60	18	45	31	88	100	0		66	50
専門雑誌	よくよむ	60	14	66	50	38	0	0	0	0			0	28
	少しよむ	20	14	0	50	12	0	0	0	0			0	9
	よまない	20	72	34	0	50	100	100	100	100			100	63
文芸雑誌	よくよむ	31	37	80		84	20	27	0	0		0	0	41
	少しよむ	15	42	0		5	20	10	0	0		0	0	16
	よまない	54	21	20		11	60	63	100	100		100	100	43
全体	よくよむ	31	39	55	45	76	18	37	4	0	25	0	35	40
	少しよむ	29	28	22	41	13	17	25	21	2	75	0	36	22
	よまない	42	33	23	14	11	65	38	75	98	0	100	29	38

第2表D　どうして雑誌をもちこむか

（各雑誌を100とした比率）

	家の光	週刊誌	明星・平凡	婦人雑誌	少年少女雑誌	専門雑誌	文芸雑誌	全体
買う	86	77	33	32	54	87	25	57
借る	14	23	67	68	46	13	75	43

る持ち込み手である高校生と兄がよく読む他は，比較的読まれず，非読者が四割を占めている。

続く婦人雑誌，少年少女雑誌のように特定の読者層をねらったものも，家族のかなり広い範囲で読まれていることが目につく。最低位の専門雑誌については，読者がはっきり父母兄姉及び高校生に限定され，兄，父，姉が多く読んでいる。次に，各個人の全般的な接触度をみると，持ちこむ度数の最大であった高校生が，ここでも多く，精読者が67%を占めている。つまり，家庭にもちこまれた10冊の雑誌のうち，7～8冊は精読していることになる。ついで，兄，姉，妹，母，兄嫁，父などが多く接触している。

これを，表Aと対比してみると，私，兄，母は持ちこみ，接触いずれも多く，父は多く持ちこむが比較的読んでおらず，姉はその逆に，少ししか持ちこまぬが，持ちこまれた雑誌の86%に，大なり小なり接触していることがわかる。また，家族全体，雑誌全体を通じていえば，持ちこまれた雑誌10冊のうち，4冊は精読され，2冊は少し読まれ，4冊は読まれないで終る割合となっている。

また，読んだ後に，家族に共通の話題を提供したケースは，家の光に最も多く，少年少女雑誌がこれにつぎ，週刊誌，文芸誌，婦人雑誌，専門雑誌の順となっている。

つぎに，ラジオについて考えたい。先ず，ダイヤルを合せる者は誰か，即ち番組選択に主導権をもつ者の比率を示すのが第3表Aである。全番組を通じて高校生が圧倒的に多く，半数を占めている。ついで，母，父，弟，兄，祖父，妹，祖母，姉，姪といった順で兄嫁が最下位となっている。雑誌などの印刷メディアと違って，同時性，1回性の強い放送の選択権だけに，農家の家族関係が濃く反映されているためか，母を除いては，男性が優位を占めていることが目立つ。

第3表A ダイアルを誰が合わせるか

(各番組を100とした比率)

	報道	教養	社会	娯楽	音楽	スポーツ	全体
父	22	15	12	12		11	13
母	15	11	28	14			14
兄	8	11	9	1	25		4
姉	1			2			2
私	38	56	48	52	50	61	50
弟	10		3	8		28	8
妹	5			4			3
祖父		7		3	25		3
祖母				3			2
甥				1			1
兄嫁	1						

第3表B どんな番組に合わせるか

(各個人を100とした比率)

	父	母	兄	姉	私	弟	妹	祖父	祖母	甥	兄嫁	全体
報道	28	17	37	14	13	22		27			100	17
教養	7	5	19		6			13				6
社会	7	14	19		7	3						7
娯楽	55	64	19	86	68	62	100	53	100	100		66
音楽			6		1							1
スポーツ	3				5	13		7				4

次に，各人がどんな番組を選んだかを見よう。先ず，娯楽番組が全体を通じて圧倒的で，66%を占め，ついで，報道，社会，教養，スポーツ，音楽の順となっている。

教養番組を多く入れているのは，兄，祖父，父，高校生，母の順であって，他の人は全く入れていない。そして，この五人の場合，他の分野のものも広く選択しているのに比して，教養番組を選ばなかったメンバーは，番組選択が一部分に限定される傾向が見られる。第3表ABを通じていえることは，番組についても，その選択者に関しても，かなりの偏りが目立つことである。番組に

ついていえば，娯楽番組は兄嫁を除く家族全員によって選ばれ，ついで報道が，祖父母，甥を除く全員によって選ばれている。音楽，スポーツが意外に極限されているのは，歌謡曲等を除いた純粋の洋楽邦楽に限定したことと，調査日時の関係があったためであろう。又，選択者に関しては，高校生が全番組にわたって選び，父，兄がそれに続く。母，弟，祖父はかなりの範囲を入れているが，妹，祖母，甥は，娯楽番組の他は入れていない。ここにも農家のラジオ接触の特徴がうかがわれる。

さて，こうしてかけられた番組を，家族はどのように聞いているかを示したのが第三表Cである。全般を通じて，娯楽番組の接触が多く，かけられたものの6割まではよく聞かれているが，反面<少しきく>比率が他の番組に比べて多く18%に達している。これは，聞きかけて止めるとか，聞きながら何かするといったケースが娯楽番組に多いためと考えられる。ついで，報道番組，スポーツ，音楽，教養，社会の各番組が聞かれる率が高くなっている。

個人別にみれば，やはり高校生が多く，かけられた番組の81%をよく聞いている。ついで，祖父，母，兄嫁，父，姉，兄，祖母，弟，甥，姪といった順である。先程の番組選択者の比率を対比してみると，祖父や兄嫁は，少ししか選択していないが，入れられたものはよく聞いており，弟は比較的よく入れる割に，全般にわたっては少ししか聞いていない。

低位の教養番組，社会番組についれみれば，聴取者のほとんどが，選択者の，高校生，父母，兄に限られており，その順位は，両番組共，高校生，兄，母，父の順と

第3表C　かけられた番組を家族はどのように聞いているか

（各個人の各番組を100とした比率）

	接触度	父	母	兄	姉	私	弟	妹	祖父	祖母	甥	姪	兄嫁	全体
報道	よくきく	59	67	57	56	84	36	40	85	24	0	54	0	59
	少しきく	12	9	3	22	6	8	20	0	0	0	0	0	9
	きかない	29	24	40	22	10	56	40	15	76	100	0	46	32
教養	よくきく	48	50	62	28	78	10	27	13	0	0	0	43	47
	少しきく	10	12	0	28	5	0	13	12	0	0	0	0	7
	きかない	1	38	38	44	17	90	60	75	100	100	100	57	46
社会	よくきく	34	47	50	50	78	35	23	28	12		0	40	45
	少しきく	7	6	0	0	5	0	15	14	0		0	0	5
	きかない	59	47	50	50	17	65	61	57	87		100	60	50
娯楽	よくきく	55	70	40	50	79	34	59	84	60	50	32	50	60
	少しきく	25	21	16	31	17	22	13	8	14	0	41	3	18
	きかない	20	9	44	19	4	44	28	8	26	50	64	46	22
音楽	よくきく	40	52	20	50	79	8	63	0	60				49
	少しきく	0	16	0	25	10	0	12	0	0				8
	きかない	60	31	80	25	11	92	25	100	40				43
スポーツ	よくきく	38	31	100	0	94	58	40		0				54
	少しきく	7	6	0	0	0	8	0		0				4
	きかない	54	63	0	100	6	33	60		100				41
全体	よくきく	52	63	47	47	81	33	48	66	43	30	25	53	56
	少しきく	18	15	9	24	11	13	14	9	8	0	3	2	13
	きかない	30	22	44	28	8	54	37	25	49	70	72	45	31

なっている。即ち，高校生は，選択，聴取共に最高率を占め，兄は，選択率に比してかなりよく聞いており，父はその逆である。このことは，農家ではラジオが圧倒的に娯楽として受けとられている反面，教養的，社会的関心が低調で，家族の限られた一部にしか聞かれていない実状を示している。

また，聴取後に家族の共通の話題となったケースは，娯楽番組に最も多く53%，ついで，報道番組27%教養番組，社会番組各10%となっており，第3表Bの番組選択の比率と照応しており，この娯楽番組の1/3は「お父さんはお人好し」であり，1/4が「私は誰でしよう」であったのも興味がある。

また，家族，番組の全体を通じて大まかにいえば，かけられた全番組のほぼ六割が家族によってよくきかれ，一割が一部きかれ，残り三割は雑音として素通りしていることになる。

この家族の接触率は，都市部に比してかなり高率であると考えられるが，この地域におけるラジオの普及率73%，テレビはわずか0.59%にすぎず，調査対象農家42戸のうち，ラジオのないもの1戸，2台あるものが2戸，更にテレビは皆無という実状からみて，都市における如く，ラジオの聴取単位が個人化して行き，家族集団の共同視聴はテレビという状況にはまだ多少の時日を要するものと思われる。

従来，オピニオン・リーダーシップについては，アメリカにおける諸研究の結果は，影響を与えるものと受ける者とは領域の異なるに応じてその役割を交換し合っている。即ち伝達される主題如何によって，誰がリーダーになりフオロアーになるかが決定する」とされ，更に「リーダーシップの重複ということはきわめてまれであり，ある領域でリーダーであるものがそれと関係をもたない他の領域でも影響者となるという事はないようである」と説かれている。

このことは，本調査においても，すでにみたように，雑誌，ラジオを通じて，メディアの内容によってその持ちこみ手が異なるという点では，全くカッツのこの説を裏付けるものであるが，一面，そのリーダーの層にかなりのかたよりが見られ，父，母，兄といった，家族構成の上部に位するものが多数を占めていることは，日本農村の家族集団におけるヒエラルキーの反映として特徴づけられるであろう。その反面，若い世代の高校生があらゆる面でリーダーシップをもっていることは，こうした新しい情報の流入，マス・コミ接触に際して，農村の若い知識層の占める位置と役割がよくうかがわれる。

以上，限られた農家を対象とした，極めて不完全な調査の概略を報告したのであるが，その反省と今後の問題点を二三述べておきたい。第一に，本調査によって，第一次集団のマス・メディアへの接近において誰が主導権をもつかは，不完全ながらもある程度つかめたと思うが，接触後の影響効果には手がとどいていない。すなわち，家族集団が，マス・メディアに接触する過程において，誰がオピニオン・リーダーになるかは明らかになっても，問題は，その後において，オピニオン・リーダーが集団の中で，どのようなパーソナル・コミュニケーションを行うか，又それによって集団の各個人はどのような影響効果を及ぼされるかを究明する点にかかってくる。更に，このオピニオン・リーダーが，同時に家族外のある集団に属して，その影響を受けるフォロアーである場合は，その点も考慮されねばならぬ。この点を明らかにするためには，例えば，特定の情報について，それがどのような経路で伝達され，どのような効果をもたらしたかを intensive な case-study によって追跡することが必要であろう。

次に，家族集団における成員の位置づけも，相対的で，かなりあいまいなものであるから，性別，年齢層，教育程度，経済的な地位，既婚未婚等によって標本化する方がより精密な分析に適するかも知れない。又このような諸条件を統計的に吟味することによって，いくつかの家族集団の典型を選び出し，それらについての実験的な研究も必要であろう。これらの本格的な調査の予備調査として，本報告がいくぶんでも意義をもち得れば幸である。

高等学校標準書目の研究*

栃木県立宇都宮女子高等学校

以下に掲げるものは，栃木県立宇都宮女子高等学校が文部省の家験学校東京都立八潮高等学校を中心とする研究協力の一つの成果として昨年２月まとめたものである。

小・中・高等学校を通して，標準図書（基準図書）の書目の作成が，今日多くの研究者の焦点の一つとなっているときであるので本誌に，同校の研究要綱を掲げ研究者の参考に供する次第である。

（文部省――深川恒喜記）

〝高等学校生徒に奨めたい図書リスト作成について〟

(A) 実験学校協力校としての経過

1．高校図書館の実験学校研究校として文部省が主催で昭和32年９月27日秩父農工高校で発足

実験学校委嘱校　東京都立八潮高等学校

研究協力校　埼玉県秩父農工高等学校

栃木県立宇都宮女子高等学校

以上三校が決り

種々の研究題目の内本校は高等学校に適した標準的書目の作成と読書指導を分担した。

2．以上研究会は以後八潮高校，宇都宮女子高校，その後実験学校協力校に加った川崎高，次いで文部省で会合を開いた。

3．標準的書目の言葉は問題点があり，これについては相当議論をたたかわし，「すすめたい図書」として研究を続けた。

(B) 図書リスト試案作成についての問題点

1．作成に当って一般問題

㋑ 図書は全般に高校生が読解出来ると思われる平易なものを主眼とし，生徒が購入し易い，又図書館に備えられてよいと思われるものをあげて見た。

㋺ 図書リストは一般教養と他の部門とに強いて分類しなかった。

㋩ 大体，社会，人文科学，美術，家庭，保健体育，日本文学，自然科学，外国文学と大別して見た。

2．選出の方法とその範囲

㋑ 先づ県内高校より各教科に亘り適当な教師に高校生向きの図書を推薦されるよう依頼した。

㋺ 本校教師より同様に図書の推薦を依頼した。

㋩ 文部省より借用した各地の推薦優良図書リストを参考にして選出した。

㋥ 上記のようにして出来上ったリストを本校生徒に配布して，それらの図書に対する読書の実態を調査し，今後のリスト作成の参考にした。

㋭ 教科書と関連のある図書も選出の対象とした。

㋬ 出版ニュース等から比較的新しい出版書をも対象とした。

㋣ 本校生徒の読書感想文として提出された書名，内容を参考とした。

3．反　省

㋑ 各高校の地域性，課程毎にまだこのリストに加えられるべきものがあると思われる。

（本校は普通科，家庭科の女子高校である）

㋺ 時代の変化と共にこれらの図書リストも変化すべきである。

* A Study on the Standard Readings for the High School Students by Utunomiya Girls' High School, Totigi-ken

㈩ 我々委員会も全教科全分野に亘っての学識経験者でなく，ここにあげた図書の内容を，熟読理解できているわけでない。その内容紹介によってその内容程度を推察して推薦したものもある。この点は多分の危険を残している。

㈫ このリストにもれている優良な図書もあるだろうことは充分想像されるから今後これらについての批判，補足をうけなければならない。

(C) 図書リスト作成についての問題点

1．図書リスト作成案の検討

㈠ 上記の試案を文部省を通じて，アンケートを求めるため41校に発送した。

㈡ その結果アンケートに応じて御検討のうえ返送して下さったのは次の27校である。

○平塚市立高浜高等学校　○大阪府立淀川工業高等学校　○宮城県立第二女子高等学校　○大阪府立高津高等学校　○福岡県立小倉西高等学校　○三重県立四日市高等学校　○茨城県立土浦高等学校　○岡山県立西大寺高等学校　○茨城県立下妻第二高等学校　○愛知県立西尾高等学校　○埼玉県立浦和高等学校　○福井県立鯖江高等学校　○岩手県立水浜農業高等学校　○千葉県立千葉第一高等学校　○長野県立犀峡高等学校　○岐阜県立本巣高等学校　○静岡県立沼津東高等学校　○佐賀県立小城高等学校　○熊本県立第一高等学校　○京都市立紫野高等学校　○都立白鷗高等学校　○千葉県立佐原第二高等学校　○都立八潮高等学校　○神奈川県立川崎高等学校　○埼玉県立秩父農工高等学校　○栃木県立栃木女子高等学校　○栃木県立氏家高等学校

2．アンケートの処理

㈠ 依頼校よりの不適当，追加されたい本の統計をとり，リストの再編集をする事になったが，統計学的に処理するには種々の困難が生じた。

㈡ アンケートの結果適当，不追加のものは，各分野毎に自主的にとり入れ，書目変更を行う事にした。

㈢ 依頼校より寄せられた意見の主なものは次のようなものである。

○現代偏重の傾向がある。

○教養のために選出したのか，学習のためか趣旨が不明瞭である。

○同一内容のもので数種出版社から出版されているものは，特定出版社のみをあげたのでは不適当ではないか。

○配列の順序を考慮したらよいのではないか。

3．各分野ごとにおける処理方法

㈠ 人文，社会科学

○依頼校の意見を尊重する目的で約10%のものを除外した。（反対意見の多い順位による）

○依頼校よりの希望書の順位により新しく加えた。

○配列は，哲学，倫理，思想，社会，政治，経済，日本史，世界史，地理，伝説，伝記の順で行った。

○人文，社会科学関係書は全部で100冊あげた。

㈡ 自然科学

○自然科学の全領域にわたるようにしたいので一方に偏しているものについては選出書冊数を減らした。

○不適当であるとの意見のある書名は他の部門にくらべて割合に少く，この分野での判定の困難さを表わしている。このためあがって来た少い意見は大いに尊重することにした。

○依頼校から推薦された書名が若干あるが，この中の数冊をリストに追加した。

○定評ある，新時代感覚に必要とされるようなもの，教科との結びつきを考えたもの33冊にしぼった。勿論高校生の読書傾向，及び他の部門との冊数ともにらみあわせこの程度の冊数とした。

㈢ 美術，家庭，保健体育

○この部門は大体音楽，美術，家庭，保健体育の順にまとめた。

○アンケートにより5校以上不適当と解答のあったものについては除く事にした。尚アンケートにより追加を希望した学校は殆どない。

○音楽9，美術関係7，家庭関係12，保健体育7計35冊をあげた。

㈡ 日本文学，外国文学

○不適当の回答が5校以上あったものは，すべて削除した。(例えば五味川純平著人間の条件等)

○同じく不適当の回答が3～4校のものについては，検討の上少数のものは残し，大部分は削除した。その多くは試案作製者側でも何らかの疑問なり問題があって確信のもてないものであった。

○不適当の回答が1～2校のものについては検討したがいずれも削除するには至らなかった。

また，加えることを希望してきた図書のうち，3校以上が希望したものはリストに加えた。(例えば野上弥生子著　迷路等) 希望が2校以下のものも，試案において欠けていた方面のものはこれをとって補い，また試案にあげた作品より，より適切と思われるものは入れ替えを行った。

○以上により日本文学，外国文学ともに，その試案の1割強を修正し，日本文学は計95，外国文学は計111となった。

○日本文学の部門では総記的なもの，古典，詩歌，戯曲，小説，随筆の順にした。

○また詩歌戯曲小説については大体時代順に配列した。つまり作家をその生年順に並べ，同一作家の作品は発表年代順にまとめた。長期にわたって活躍している作家も多いので，作品は必ずしも時代順にはなっていない。むしろ甚しくずれている場合もある。(例えば野上弥生子著迷路は戦後の作だが芥川の前に出ている等)

○外国文学の部門は国別，時代順に配列してある

○日本文学，外国文学ともに文庫本が多いが (入手しやすい等の理由による) 同一作品を二つ以上の発行所でそれぞれの文庫本として出している場合が非常に多い。

勿論どの文庫本で読んでも差支えないのであるが，ここでは便宜上代表的な発行所をあげ，他の文庫本は備考の欄に略号であげておいた。(新は新潮文庫，角は角川文庫，河は河出文庫) 特定の発行所に偏した観はあるが，あくまで便宜上であり，他意あるものではない。

なおこれらはすべて1958年版出版年鑑によった。

著者名	書名 (発行所)
パスカル	パンセ (白水社)
出　隆	哲学以前 (新潮社)
三木　清	人生論ノート (創元社)
阿部次郎	三太郎の日記 (角川書店)
有沢広己	世界の経済 (毎日)
川崎己三郎	恐慌 (岩波)
波多野鼎	金融講話 (ダイヤモンド)
藤間生大	埋れた金印 (岩波)
北山茂夫	万葉の時代 (〃)
川崎庸之	記紀万葉の世界 (東大出版)
〃	天武天皇 (岩波)
永原慶二	源頼朝 (〃)

著者名	書名（発行所）
林屋辰三郎	南北朝（創元）
〃	歌舞伎以前（岩波）
児玉幸多	江戸時代の農民生活（弘文堂）
松好貞夫	村の記録（岩波）
〃	太閤と百姓（〃）
古島敏雄	日本農業史（〃）
家永三郎	日本道徳思想史（〃）
羽仁五郎	日本における近代思想の前提（〃）
E.H.ノーマン	日本の兵士と農民（岩波）
〃	クリオの顔（〃）
遠山茂樹	明治維新（〃）
井上清・鈴木正四	日本近代史（合同出版）
後藤靖	自由民権運動（創元）
福沢諭吉	福翁自伝（岩波）
家永三郎	数奇なる思想家の生涯（〃）
〃	革命思想の先駆者（〃）
遠山・今井共著	昭和史（〃）
中島健蔵	昭和時代（〃）
井上清	日本女性史（三一）
石母田正	歴史と民族の発見（東大出版）
金達寿	朝鮮（岩波）
吉川幸次郎	漢の武帝（〃）
宮城音弥	夢（岩波）
〃	心理学入門（〃）
笠信太郎	ものの見方（河出）
池田潔	自由と規律（岩波）
務台理作編	現代の倫理（毎日）
渡辺照広	日本の仏教（岩波）
〃	仏教（〃）
桑原武夫	一日一言（〃）
久野・鶴見共著	現代日本の思想（〃）
日本戦没学生の手記編集委員会編	きけわだつみのこえ（東大出版）
イリン	人間の歴史（岩波）
長谷川正安	日本の憲法（〃）
宮沢俊義	憲法入門（勁草）
蠟山芳郎	国際問題（岩波）
中川善之助	家族（有斐閣）
戒能通孝	裁判（岩波）
横田喜三郎	国際法（有斐閣）
川島武宜	家庭の法律（岩波）
〃	日本の家族制度の構成（東大出版）

著者名	書名（発行所）
毎日新聞社編	世界の状勢（毎日）
南博	日本人の心理（岩波）
〃	社会心理学（光文社）
ヒューパーマン	社会主義入門（岩波）
カー	新しい社会（〃）
上原専禄	世界の見方（理論社）
磯田進	労働法（岩波）
服部之総	物語，日本の労働運動（理論社）
大河内一男	黎明期の日本労働運動（岩波）
美濃部亮吉	日本の経済毎（日）
ヒューパーマン	資本主義経済のあゆみ（岩波）
揖西・大島・加藤編	日本における資本主義の発達（東大出版）
岩村忍	マルコ・ポーロ（〃）
増井経夫	太平天国（〃）
岩村三千夫 野村四郎	中国現代史（〃）
仁井田陞	中国（毎日）
ホワイト	埋れた世界（岩波）
シェリーマン	古代への情熱（〃）
プラトン	ソクラテスの弁明（〃）
石原謙	基督教史（〃）
増田四郎	西洋中世世界の成立（〃）
カルメット	ジャンヌ・ダルク（〃）
大塚久雄	宗教改革と近代社会（みすず）
〃	近代化の人間的基礎（東大出版）
角山栄	資本主義の成立過程（ミネルバ）
松田智雄	近代社会の形成（要書店）
大塚久雄	近代の産業（毎日）
井上幸治	ナポレオン（岩波）
ヒューパーマン	アメリカ人民の歴史（上・下）（〃）
渡辺一夫	フランス，ルネッサンス断章（〃）
ソブール	フランス革命（上・下）（〃）
林健太郎	界世の歩み（上・下）（〃）
ベアーズ	ロシヤ（上・下）（岩波）
上原専禄他	世界の歴史（歴史の見方）（毎日）
和辻哲郎	風土（岩波）
飯塚浩二	日本の精神的風土（〃）
梅棹忠夫	モンゴール族探険記（〃）
ヘディン	中央アジア探険記（角川）
野村実	人間シュバイツェル（岩波）
井上正蔵	ハインリヒ・ハイネ（〃）

著者名	書名（発行所）
羽仁五郎	ミケランジェロ（東大出版）
田中美知太郎	ソクラテス（〃）
ホイーア	リンカーン（〃）
J．イートン	ガンジー伝（〃）
奈良本辰也	日本の思想家（毎日）
関敬吾	民話（岩波）
柳田国男	日本の伝説（角川）
近藤洋逸	数学の歴史（毎日）
小倉金之助	日本の数学（岩波）
増山元三郎	数に語らせる（〃）
吉田洋一	零の発見（〃）
アインシュタイン インフェルト 石原訳純	物理学は如何に創られたか（上，下）（〃）
菊地正士	原子核の世界（〃）
読売新聞社	ついに太陽をとらえた（読売）
武谷三男	死の灰（岩波）
ローレンス 崎川範行訳	0の暁（角川）
久保昌二	化学史上，下（白水社）
崎川範行	化学と生活（毎日）
原光雄	化学を築いた人々（中央公論）
フアラデー 矢島祐利訳	ローソクの科学（岩波）
井本稔	ナイロンの発見（創元社）
畑中武夫	宇宙と星（岩波）
中谷宇吉郎	雷（〃）
〃	雪（〃）
ガモフ 白井俊明訳	太陽の誕生と死（白揚社）
日高孝次	海の神秘（学生社）
井尻正二他	地球の歴史（岩波）
長谷部言人	日本人の祖先（〃）
オパーリン 東大ソヴェト研究会訳	生命の起原（岩崎）
湯浅明	あなたは何を遺伝するか（北隆館）
福島要一	米（岩波）
串田孫一	博物誌（創文社）
シートン 内山賢次郎訳	動物記（評論社）
ファーブル 山田吉彦訳	昆虫記（岩波）
沼野井春雄	血液の科学（青山書店）
林髞	生理学なぜならば（中央公論）
天野慶之	おそるべき食物（筑摩）

著者名	書名（発行所）
山中篤太郎	日本の工業（毎日）
エーブ・キューリー 川口篤訳	キューリー夫人伝（白水社）
山崎勝弘	衣服と色（光新聞社）
ロマン・ローラン	ベートーベンの生涯（みすず）
原田光子	クララ・シューマン（ダヴイット）
属啓成	音楽のふるさと（音楽之友）
山根銀二	音楽の旅（岩波）
属啓成	ヨーロッパの楽団（音楽之友）
藤田晴子	楽の音に寄せて（〃）
シャック・テイボー	バイオリンは語る（新潮社）
日向素郎	私たちの音楽旅行記（音楽之友）
大野亮子 大野敏子	ピアノ日記（〃）
井手則雄	美術のみかた（生活百科）
チェスキン	役立つ色彩（白揚社）
竹山道雄	古都遍歴（新潮社）
西山卯三	現代の建築（岩波）
和辻哲郎	桂離宮（中央公論）
亀井勝一郎	大和古寺風物誌（新潮社）
富永次郎	美術のたしなみ（三笠）
戸川行男	女の学校（誠文堂）
羽仁説子	婦人読本（実教）
〃	新しい女性の生き方（河出）
野上豊一郎	能の話（岩波）
岡倉覚三	茶の本（〃）
古谷綱武	暮しのなかの人生観（角川）
松岡洋子	世界の女性（講談社）
モーリス・エリゾーワ	若き日の山行（白水社）
羽仁説子	生活の科学（要書房）
瀬川清子	食生活の歴史（講談社）
小牧実季	食物の科学（東洋経済）
幸田文	番茶菓子（創元社）
宮本忍 山本雄一	ミクロの世界　結核菌を追って（中山）
林髞	人間の生理（毎日）
平山雄	ガンの探究（光文社）
小森栄一	日赤救急法（二宮）
奥山大六郎	結核の生態（科学写真シリーズ）（岩崎）
宮本高照	薬（岩波）

著者名	書名（発行所）
日本体育協会医事部	スポーツ医学の知識（旺文社）
語学	
金田一春彦	日本語（岩波）
日本文学	
桑原武夫	文学入門（岩波）
伊藤整	文学入門（光文社）
伊藤整編	日本の文学（毎日）
西郷信綱・安積安明・広末保	日本文学の古典（岩新）
久松潜一編	日本文学の歴史（毎日）
伊藤整	日本文壇史（1～4）（講談社）
正宗白鳥	自然主義盛衰史（角川）
福永武彦	日本国民文学全集1，古事記（河出）
川端康成他	日本国民文学全集5，王朝物語(1)（河出）
円地文子他	日本国民文学全集6，王朝物語(2)（〃）
室生犀星	日本国民文学全集7，王朝日記随筆集（〃）
中山義行	日本国民文学全集9，平家物語（〃）
里見弴他	日本国民文学全集12，西鶴名作集（〃）
宇野信夫他	日本国民文学全集13，近松名作集（〃）
円地文子	日本国民文学全集17，江戸名作集（〃）
斎藤茂吉	万葉秀歌（上，下）（岩波）
谷崎潤一郎	源氏物語（全12巻）（中央公論）
山本健吉	芭蕉秀句（角川）
吉田精一	近代詩鑑賞（明治編，大正編，昭和編）（新潮社）
山本健吉	現代俳句（上，下）（角川）
与謝野晶子	与謝野晶子歌集（岩波）
斎藤茂吉	赤光　〃
若山牧水	若山牧水歌集　〃
石川啄木	啄木歌集　〃
島崎藤村	藤村詩集　〃
上田敏	上田敏詩抄　〃
高村光太郎	高村光太郎詩集　〃
北原白秋	白秋詩抄　〃
佐藤春夫	春夫詩鈔　〃
倉田百三	出家とその弟子　〃

著者名	書名（発行所）
木下順二	夕鶴（岩波）
森鷗外	雁　〃
森鷗外	阿部一族　〃
森鷗外	高瀬舟　〃
二葉亭四迷	浮雲　〃
幸田露伴	五重塔　〃
夏目漱石	坊ちゃん　〃
夏目漱石	三四郎　〃
夏目漱石	心　〃
徳富蘆花	思い出の記（上，下）〃
国木田独歩	武蔵野　〃
田山花袋	田舎教師　〃
樋口一葉	たけくらべ　〃
島崎藤村	破戒　〃
島崎藤村	嵐　〃
泉鏡花	高野聖　〃
有島武郎	カインの末裔　〃
有島武郎	小さき者へ　〃
長塚節	土　〃
志賀直哉	城の崎にて　〃
志賀直哉	暗夜行路（前，後）〃
志賀直哉	小僧の神様　〃
武者小路実篤	友情　〃
武者小路実篤	愛と死（角川）
武者小路実篤	真理先生（〃）
下村湖人	次郎物語（〃）
中勘助	銀の匙（岩波）
野上弥生子	迷路（〃）
谷崎潤一郎	細雪（三巻）（角川）
谷崎潤一郎	春琴抄（〃）
山本有三	路傍の石（新潮社）
山本有三	女の一生（〃）
山本有三	真実一路（〃）
菊池寛	恩讐の彼方に（岩波）
菊池寛	蘭学事始（新潮社）
芥川竜之助	鼻（岩波）
芥川竜之介	河童（〃）
芥川竜之介	戯作三昧（〃）
芥川竜之介	奉教人の死（〃）
宮沢賢治	風の又三郎（〃）
大仏次郎	帰郷（角川）
井伏鱒二	屋根の上のサワン（〃）

著者名	書名（発行所）
宮本百合子	伸　子（岩波）
宮本百合子	播州平野（角川）
宮本百合子	貧しき人々の群（岩波）
川端康成	伊豆の踊り子（〃）
川端康成	山の音（〃）
徳永直	太陽のない街（〃）
石坂洋次郎	若い人（上，下）（新潮社）
小林多喜二	蟹工船（岩波）
島木健作	生活の探求（角川）
林芙美子	放浪記（新潮社）
堀辰雄	風立ちぬ（岩波）
竹山道雄	ビルマの竪琴（新潮社）
井上靖	天平の甍（中央公論）
中島敦	李　陵（角川）
大岡昇平	野　火（新潮社）
田宮虎彦	足摺岬（〃）
西野辰吉	秩父困民党（講談社）
深沢七郎	楢山節考（中央公論）
阿川弘之	雲の墓標（新潮社）
三島由起夫	潮　騒（〃）
野間宏	真空地帯（岩波）
柳田国男	雪国の春（角川）
倉田百三	愛と認識との出発（〃）
中野好夫	世界の文学（毎日）
〔中　国〕	
吉川幸次郎 三好達治	新唐詩選（岩波）
羅貫中 小川環樹訳	三国志（〃）
吉川幸次訳郎	水滸伝（〃）
魯迅	阿Q正伝（ハト書房）
老舎	四世同堂（月曜書房）
黄谷柳	蝦球物語（河出）
趙樹理	李家壮の変遷（〃）
丁玲	太陽は桑乾河を照らす（現代中国文学全集）
郭沫若	屈　原（岩波）
〔イギリス〕	
シェクスピアヤ	ハムレット（岩波）
〃	リヤ王（〃）
〃	マクベス（〃）
〃	オセロ（〃）
〃	ベニスの商人（〃）
〃	ロミオとジュリエット（〃）
スコット	アイバンホー（〃）
デフオー	ロビンソン漂流記（新潮社）
スイフト	ガリバー旅行記（〃）
デイッケンズ	クリスマスカロル（岩波）
〃	二都物語（〃）
〃	ディビット・コッパーフィールド（〃）
ラム（チャールズ）	エリア随筆（〃）
ブロンテ（エミリイ）	嵐が丘（角川）
ブロンテ（シャロット）	ジェン・エア（新潮社）
エリオット（ヂョージ）	サイラスマナー（岩波）
スティブンソン	ジェキル博士とハイド氏（〃）
テニスン	イノック・アーデン（〃）
小泉八雲	怪　談（〃）
ハーディ（トーマス）	テス（三笠）
モーム（サマセット）	人間のきずな（新潮社）
モーム（サマセット）	月と六ペンス（〃）
ジョイス（ジェースム）	若き芸術家の肖像（岩波）
〔アメリカ〕	
ホイットマン	草の葉（岩波）
ホーソン	緋文字（角川）
アーブイング	スケッチブック（岩波）
ストウ夫人	アンクル・トムズ・ケビン（新潮社）
ポー（エドガーアラン）	黒猫・黄金虫（新潮社）
オルコット	若草物語（〃）
モンゴメリ	赤毛のアン（〃）
バーネット	小公子（岩波）
メルヴィル（ハーマン）	白　鯨（新潮社）
ヘミングウエイ（アーネスト）	武器よさらば（〃）
スタインベック（ジョン）	怒りの葡萄（〃）
バック（パール）	大　地（共和出版）
ミッチェル（マーガレット）	風と共に去りぬ（三笠）
ウエブスター（ジーン）	あしながおじさん（新潮社）

著者名	書名（発行所）
ドスパソス（ジョン）	U・S・A（改造社）
〔ドイツ〕	
ゲーテ	ファウスト（岩波）
〃	若きウェルテルの悩み（新潮社）
ヘッセ（ヘルマン）	車輪の下（〃）
〃	知と愛（人文書院）
〃	青春彷徨（岩波）
マン（トォマス）	トオマス・マン短編集（〃）
リルケ（ライナー・マリヤ）	マルテの手記（〃）
シュトルム（テオドオル）	みずうみ（〃）
ハウプトマン（ゲルハルト）	寂しき人々（〃）
相良守峰訳	ニーベルンゲンの歌（〃）
〔フランス〕	
スタンダール	赤と黒（岩波）
〃	パルムの僧院（〃）
バルザック（オノレドウ）	ゴリオ爺さん（〃）
〃	谷間の百合（〃）
ユーゴ（ビクトル）	レ・ミゼラブル（〃）
メリメ（プロス）	カルメン（〃）
デュマ（アレクザンダー）	モンテクリスト伯（〃）
フローベル（ギュスターブ）	感情教育（〃）
ゾラ（エミール）	居酒屋（〃）
モーパッサン（ゲイード）	女の一生（〃）
〃	ジュール叔父（〃）
ルナール（ジュール）	にんじん（岩波）
〃	ルナールの日記（〃）
ローラン（ロマン）	ジャン・クリストフ（〃）
〃	魅せられたる魂（〃）
ロスタン（エドモン）	シラノドベルジュラック（〃）
モリエール	女学者・気で病む男（〃）
ジイト（アンドレ）	窄き門（〃）
〃	田園交響楽（〃）
デュガール（ロジュ・マルタン）	チボー家の人々（白水社）
カミュ（アルベール）	ペスト（新潮社）
モロア（アンドレ）	人間の条件（〃）

著者名	書名（発行所）
ベェルレーヌ（ポール）	ベェルレーヌ詩集（〃）
ボードレール（シャルル）	ボードレール詩集（〃）
フイリップ（シャルル・ルイ）	母への手紙（岩波）
〔ロシヤ〕	
レールモントフ（ニコライ・ユーリヴイッチ）	現代のヒーロー（岩波）
ゴーゴリ（ニコライ・ウアシリーヴッチ）	死せる魂（〃）
〃	検察官（〃）
ツルゲーネフ（イワン・セルゲーヴイッチ）	猟人日記（〃）
〃	父と子（〃）
トルストイ（レフ・ニコライヴイッチ）	アンナ・カレニーナ（〃）
〃	復活（新潮社）
〃	戦争と平和（〃）
ドフトエフスキー（フイヨードル・ミハイロヴイツチ）	罪と罰（〃）
〃	カラマゾフの兄弟（岩波）
ガルシン（フセウオドロ）	赤い花（新潮社）
チエーホフ（アンアン）	桜の園（青木）
〃	伯父バーニャ（新潮社）
ショーロフ（ミハイル・アレクサンドロヴイッチ）	静かなるドン（〃）
〃	開かれた処女地（青木）
ゴーリキ（マクシム）	どん底（新潮社）
〃	母（岩波）
オストロフスキー（ニコライ・アレセヴイッチ）	鋼鉄はいかに鍛えられたか（青木）
シェンキビッチ	クオバデス（岩波）
セルバアンテス（ミグエルド）	ドンキホーテ（〃）
アンデルセン（ハンス・クリスチャン）	即興詩人（〃）
〃	アンデルセン童話集（〃）
アミチイス（エドモンドデ）	クオレ（〃）
イプセン	人形の家（〃）
スピリ（ヨハンナ）	アルプスの山の娘（〃）
アミエル（フレデリック）	アミエルの日記（〃）
野上弥生子訳	ギリシャ神話（〃）
フランク（アンネ）	光ほのかに（みすず）

鶴嶺中学校の読書力向上に関する教育実験*

1．はじめに

過去10年あまりの間に，読書に関する教育実験は，多くの学校で行なわれた。鶴嶺中学のこの教育実験も，その一つであり，つぎのような特色がある。

(1) いつの時代にも，教育現場には切実な問題がある。たとえば，基礎学力の低下は，ここ数年来問題にされている。とくに，読書力の低下は問題で，そのために各教科とも教科書の読解にさしつかえるむきがある。この教育実験は，ここに着目して，じみちに読書力向上をはかろうとする研究である。

(2) すべて教育実験においては，計画性が大切である。その点，この教育実験は，比較的整った実験計画のもとに進められている。すなわち，最初に広範な基礎調査を行い，問題の所在をつきとめようとしている。つぎに，ここで明らかにされた問題点の上に立ち，指導計画の立案指導の実際が行なわれている。指導効果の判定，指導の反省を行うために，指導の前後に評価が行なわれている。

(3) 教育実験は，一朝一夕にして完成するものではない。その多くは，米国のいわゆる「八年研究」が代表的なものといえようが，数カ年に渉る継続研究を必要とする。この教育実験も，昭和34年現在で，すでに四年目である。教育現場にあっては，こういう継続研究を行うことは，並大低の努力ではできないであろう。

(4) 読書力の向上指導は，国語教師だけにまかせておくだけでは，充分な成果を期待することができない。あらゆる機会をとらえて，組織的に指導する必要があろう。この教育実験においては，全教科の担任が参加し，学習語彙の指導を中心に，各教科の中で指導が行なわれている。教科外の時間も，たとえばホームルームの時間も，充分活用されている。

以下のところで，この教育実験のあらましを，重点的に述べよう。

2．基礎調査のあらまし

先ず，第一年度（昭和31年）に行なわれた研究の第一歩としての基礎調査についてのべよう。基礎調査は，(表1)にみられる各領域に渉っており，かなり広範囲に行なわれている。

知能の測定は，田中寛一氏の新制田中B式知能検査を用いた。これによると，IQの全校平均は99点であるから，ほぼ全国平均と一致している。しかしIQの分布は，平均知の知能段階が49%を占め，正常分布曲線の場合の38%よりはるかに多い。つまり，知能の個人差が比較的少なく，分布が中心にかたまっているのである。

（表1） 基礎調査領域の一覧表

1．知能の測定
2．読書能力の測定
3．読字抵抗の調査
4．読書傾向の調査
5．家庭蔵書の調査
6．研究問題に対する教師の意見調査

読書能力の測定は，依田新・岡本・佐藤三氏の，読書能力診断テストによった。この検査は，大意把握・筋の推理・詳細部の理解をみる問題から構成されている。これらの理解力を総括的にみるために，読書力偏差値が算出される。読書力偏差値の平均は，1年50，2年52，3年51であるから，全国平均に近く，心持ちこれを上廻っている。したがって，知能水準にくらべて，読書力の水準は，とくに劣っても進んでもいないということである。なお，このテストでは，他に読書速度や読書正確度，さらに理解力の各面についての成績も算出できる。そこで，これらの結果と知能測定の結果とを，個人別につきあわせて，指導の手掛りを個人別に把えている。

読字抵抗の調査は，鶴嶺小学校と鶴嶺中学校とで使用している国語教科書の語彙の中から，文部省学年別教育漢字配当表を基準にして選択した。それらは，小学校1

---

* An Educational Experiment for Developing Reading Ability in a Middle School by Keiroku Okamoto (Rissyō-gakuen College for Women)

～3年，4～6年，中学校各学年の5群の問題群に分けられ，合計100問である。各学年別，問題群別の成績は，図表1のとおりである。これによると，第一問題群の正答率は各学年ともよい。しかし各学年とも，前学年の問題群でさえ正答率60～70%で，必ずしも充分ではない。教育漢字の読みは，小学校で完成するたてまえであるから，読字力には相当の低下があるように思われる。

読書傾向の調査は，質問紙法によった。これによると，一人一カ月の読書量は，平均2冊強である。これは学習参考書や雑誌を含んだ数字であるから，一般の標準よりやや少ない。内容的には，一年生でまんが・少年少女雑誌・伝記が多く，二・三年生でもマンガ以外は同様な傾向となっている。つまり，雑誌中心の娯楽的読書が多く行なわれているということである。

家庭蔵書の調査は，家庭の読書環境の一端を知るために行なわれたもので，これによると一戸平均12冊にすぎない。しかも，図書の内容は，講談本・大衆娯楽雑誌・スポーツ雑誌・少年少女小説およびマンガが7割以上という状態である。これに対して，文芸書・百科事典それに美術音楽書は極めて少なかった。学習参考書も驚くほど少ないという状況であった。

最後に，研究問題として，全教師がどんなものを欲しているかを知るために，全教師で学習指導上の悩みや問題点を話し合った。その結果は，つぎの数項目が共通した意見であった。

イ．教科書がよく読めない

ロ．読めても正しく読解されない

ハ．したがって，学習がはかどらない

ニ．他の教科に，国語で未習の文字がでてくる。

ホ．諸行事に授業がつぶされて困る。

要するに読書力の低下ということが，各教科を通じた，共通の問題点とされたのである。

3．読字力指導の教育実験

読字力指導の教育実験は，先ず，教育漢字について行なわれた。実験は読字力のテストに始まる。このテストは，一つにはとくに指導を必要とする難読文字を明らかにするためであり，一つには指導後のテストと比較し，指導効果の判定を行うためである。問題は，教育漢字881文字の音訓併せて1672通りの読みを調査でき，しかも，語としての漢字の読みをみるもの，という標準によった。そこで，浜島書店発行の「教育漢字練習書」をそのまま用いた。なおこのテストは第二年度（昭和32年）の9月に行なわれた。

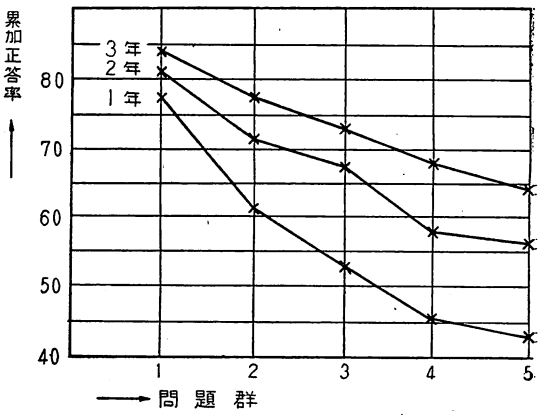
指導は，前述の教育漢字練習書を用いて，一カ月間行った。それは国語科の時間に10分間ずつ，つぎの方法によって行った。一つはページ数を指定してあらかじめ読字練習をさせておき，この10分間にはもっぱら読字テストを行うやり方である。他は音読指読法で，この10分間に指名読みと斎難をおりまぜながら行った。その際，難読文字にはとくに注意し，語彙として読みと理解を行なった。

指導期間の後に，再び読字テストが行なわれた。指導前のテストは全教育漢字について，14回に渡って行ったが，指導後のテストは，484通りの読みを4回にわけて行った。なお，テスト期日は，昭和33年6月であるから，第3年度になる。いま，指導前と後に行なわれた，テスト結果を比較してみよう。先ず各学年別に，指導前後のテストの平均点を示すと，表2のようになる。この表によると，指導の行なわれない昭和32年5月においては，全学年の平均は69.0にすぎないが，指導の行なわれた直後である翌年6月には，80.7点と，約10点も上昇している。この開きは，昭和32年度の1・2年生を，翌年

（表2） 教育漢字読字力テスト

学年 / テスト	1	2	3	全体平均	昭32年度1・2年平均 昭33年度2・3年平均
指導前テスト	61点	70点	76点	69.0点	65.5点
指導後テスト	73点	84点	85点	80.7点	84.5点

第一表　教育漢字読字力



にしらべた場合にはさらに大きく，約20点も上昇している。この20点の中には，実験指導の効果の他に，約9カ月間に各種教科の時間や自由読書の時間に，自ずから学習された結果も入っている。しかし，それにしても，読字力は一定の組織的指導により，著しく上昇することを示すものである。なお，指導前のテストで，誤読字の比較的高い難読文字の一部をかかげると，表2のとおりで

第二表　教育漢字難読段階表の一部

段階／学年	9～10（割）	8～9	7～8
第一学年	(68) 説居黄鋼炉否丁率湯弟字名稍厚 玉貸借我天生価体精進浅宮由坂溜就 撰機興為他引率任政治解暴薬溜蛋段 食法主遺半調暗承著取述災断負舌競 易聴焼訳外	(120) 児素至誠誠望読行維道存線書物 荷示歯気仁異納頒夕赤性寿命預図衣 問布有米炎慮合延絶己値除而木夏冬 何飢駄似皇子世政欲教屋無成政民 谷費断買追鼻老欲壮廃仮作役拡便今 常的白往(往)名平勧琴英他輸織結機 魚殺試破損省務鋼討現元従宿段球構 去宮隣極女喜経下算社専	(124) 小有政忠承軽残限士採勤往客勧 早朝持細工負銭愛板子迎是言万島旗 手糸蓄増版守親打化等知文興預裁雪 暗雨落葉衆生音川宮道皮預春秋竹処 酒想境治治派明幹横限営耳生和覚感 豊富露後発乗刀計盛包右静麦現後 婁深緑公起補推仮語余興再著許宗家
第二学年	(42) 児説読因字稍厚頒名赤天生 外有己喪似由生精進坂種各率政統 業解境稲法主災舌聴女訳下貸借	(55) 滅望勧客存丁緑書物湯弟仁納 夕性玉麦価体宮皇子敬価衆川皮需 興為治費引発常包宅鉄欲仮病現機 公食遺仮務学取断鉄鉄構物	(88) 小民神忠至黄鋼雑否悪口鉄修 示是歯気糸版我猟衣問布米化幾竹 愚世欲層昼除葉鉄兼成就民治任後 作役拡便白右往再往買追木知苦補 内琴氷樹戸機候宿鉄著認著許元宗 家城鋼易堀省候願供愚社宮現拝静
第三学年	(21) 説望読因字夕貸天生衆浅皇英名 政統業視主外尊	(37) 児黄率名赤性機玉己精進宮子由 成就推費便期白勧木欲厳鉄機者録 宗災舌鋼鉄下稍	(39) 滅丁物修愚口示系納厚頒布外変 価鉄任発作仮型蚕菜種機食法仮元 宿家鋼鉄供女官小湯

ある。この表によると，誤読者が9～10割の文字は，たとえば1年生では68文字，2年生では42文字ということがわかる。

教育漢字の読字力指導は，前述の教育実験によれば，著しい効果のあることが確かめられた。そこで今度は，当用漢字について実験を試みた。昭和33年7月に，浜島書店発行の「当用漢字練習書」を全員に配布した。そして，一応の指導を与え，さらに，夏休みの自由課題として読字の自習をさせた。9月に入ってから，当用漢字のうち200字について，その読みのテストを行った。その結果は表3のとおりで，全体として約半分しかよめていない。自由課題として読みの学習を行なわせる前のテストが行ってないので，充分な論拠はないが，それにしてもこの結果は満足すべき得点とはいえない。これから推すと，教育漢字の読字力の指導は，中学において強力に行わねばならない。しかも，その方法は，自学自習では充分な効果を期待し得ないのではないかと考えられる。

第三表　当用漢字読字テスト（100点満点）

学　年	1　年	2　年	3　年	平　均
得　点	36点	55点	69点	53.5点

以上の実験結果にかんがみ，つぎのような読字指導の方針がたてられた。

イ．中学一年一学期に，教育漢字の読字力は，反覆練習により高める。

ロ．当用漢字は，教育漢字よりもむしろ重点をおき，機会ある毎に読みの反覆練習を行う。

ハ．漢和辞典を常時必携させ，難読文字は自主的に調べる辞書利用の指導をする。

ニ．ホームルーム文庫には，学習参考書と共に教科に関係の深い用語辞典類をとりそろえ，教科学習の場を拡大する。

4．学習語彙指導の教育実験

この教育実験は，昭和34年1月に行なわれた語彙テストが始まりである。現在は「学習語彙表」の作製を終えて，これによる指導が行なわれている最中である。したがって，教育実験としては未完成である。

語彙テストは，9教科の教科書の既習部分より，50語を選び，選択法の問題を作製した。これを2年生に実施した結果は，平均60点（100点満点）である。しかも，80点以上は1割にすぎず，50点以下が3割にものぼる状況である。この結果は，当用漢字の読字力と同様に，かなり問題がある。そこで各教科について，学習語彙を選択し，各教科の中で具体的な使用場面に即して確実な語彙理解をはかることにした。なお学習語彙は，つぎの基準により選択された。

イ．各教科別に教科書中心に選択する。

ロ．単元目標の学習に，必要度の高い語を選択する。

ハ．使用頻度の高いものを選択する。

ニ．教科学習と共に，日常生活にも関連の深い語を選択する。

ホ．単語だけでなく，慣用語句も選択する。

ヘ．本校生徒の，語彙力の実態に即した語を選択する

これらの基準にもとずいて選択された，教科別・学年別学習語彙の一部が表4である。なおここの学習語彙表を中心とした語彙指導の効果については，まだ評価が行なわれていない。

第四表　学習語彙表の一部

教科／学年	国語	
第一学年	趣味、舗装道路、こだわり、水くさい、持病、一如、一朝一夕、出納、日本十進分類法、雑作、禁じ得なかった。感興、批判、装置する、繰り言、放射能、検討する、念頭、他愛もない、特権、当惑、斉唱、素直、卒直、音訓索引、凡例、吟味、敬虔、御助、前代未聞、安穏、衣裳、干潟、子細、焼野のきぎす、排水、思惑、直結、脱皮、山荘、自他共に許した、寝食を共にした、矛盾、会釈、抵抗、緊急会議、言語道断、猶予、述懐、創作、センチメンタル、金字塔、心がたかぶる、追従、特有、欠礼、こだわりなく、語題、要点機会、生気に満ちた、個性の尊重、脚色、乾物屋、弁護士、落胆、生涯、たわいもなく、途方にくれて、無慈悲、修飾語、うまずたゆまず、顧みられていない、図鑑、閲覧表、不審、部首、故事、家並み、食い下がった、足が宙に浮く、蔵書票、古墳の発掘、弥生式、世論調査、あらかじめ、充溢した歓喜、熟読玩味、客、飼育、自然の、原	
第二学年	マイクロホン、公式の場所、共通語、擬音、心の豊かさ、柔和な顔、形容のしようのない、叙述、主題、構想、用言、修飾、副詞、クーポン券、写生文、助詞、司会、定足数、能率的、接続詞、改善、おとぎ話、伝説、世襲、逸話、教訓、女官、叙事詩、拙者、美文口調、表現の技巧、評論家、その旨、独創的、ユーモア、具体的、伝統、調和、感受性、幻影、荒涼と並ぶ、アスファルト道、渓谷、象徴、再生、体言、拗音、促音、基本の方針、平明、慣用語、情景、抒情詩、執筆、短歌、ロマン的、貢献、燈火親しむ、比喩、排斥、脚色、演出、急旨、敬虔、生活の改善、迫及、引力、楕円、脚弱、軌道、免れない、思索、とんびに油揚をさらわれる、目測した視角、嘆賞、猛禽類、バランス、単文、複文、重文、アウトライン、教養、概要、家計簿、ラッシュアワー、範とするところ、感動詞、踏査、肢体、禁圏のかきね、心、る、語、体詞、	
第三学年	季語、季節感、俳句的ふんい気、非人情、連句、歳時記、切れ字、季重なり、三段切れ、新傾向俳句、自由律俳句、評釈文、写生的態度、生活の指針、世論、公正な報道、編集方針、解説記事、取材の限度、タブロイド版、政府筋、短評欄、報道価値、社説、論説、ゲラ刷り、校正、日刊新聞、営業新聞、目的新聞、真理と正義、信頼性、休刊、正しい主張、原稿の重要度、一面記事、三面記事、反対語、同義語、古典、長歌、反歌、荘重な調べ、懐旧の情、抒情詩、歌聖、深い沈潜、反語、叙景歌、格調、絶唱、自然の律動、繊細微妙な調べ、結局、おくゆかしい声調、文学史、叙事文学、詩情を豊かにする、権威、再検討、英雄崇拝主義、優越感、不純な気持、熟慮、御にあたる、寛容な態度、傍聴者、公開討論会、対談、同音語、類音語、閲覧者、礼法、礼式、追伸、半濁点、濁点、候文、翻訳文、内面的真実、美の啓示、陶酔感、追慕の情、胸の、うなる、心、変化、列	

5．必読書指導の教育実験

ここでいう必読書とは，一種の推薦図書であり，三種類ある。第一は，各個人に所有させるもの，第二は，ホームルームの全員にゆきわたるように，50数冊学校図書館に備えつけたもの，第3は，数冊ずつ学校図書館に備えたものである。これらは，国語科の時間，読書会その他の時に指導はするが，主として自由読書を行なうのをたてまえとしている。

第一の個人所有の必読書は，1年生が「小公子」2年生が「坊っちゃん」3年生が「真実一路」である。これらを，昭和32年12月に各人に与え，自由課題として冬休みに読ませた。そして，翌33年2月には，それらの読後調査が行なわれた。2年生の「坊っちゃん」について，調査項目と調査結果とを示せば，それはつぎのとおりである。

①「坊っちゃん」を今まで知っていたか。

1. 学校で読むことになった前に，すでに読んだことがある。(反応—16%)
2. 「名作紹介」で，手短かにまとめたものを読んだことがある。(反応—26%)
3. 絵本・紙芝居・映画・人の話などで，おおよそ知っていた。(反応—34%)
4. 学校で読むことになるまで，全然知らなかった。(反応—24%)

上の「反応」は，反応した生徒の%であるが，これによると，あらかじめ原作を読んで知っていたものは，わずか16%にすぎず，全然知らなかったものが約1/4にものぼっている。

②「坊っちゃん」を読んで，わかったか

A
1. 読み易かった(反応—13%)
2. 読みにくい文字や語句があって，読むのが苦しかった。(反応—61%)
3. 読みにくいし，よくわからないで，いやになることがあった(反応—21%)
4. 読めない文字や語句が多く，文も長いので，今の自分には無理だった(反応—5%)

B
1. 二度以上読んだ(反応—3%)
2. 一度読んだが，あらすじはわかった(反応—29%)
3. 一度読んだが，すじがよくつかめない。(反応—8%)
4. まだ，一度も読み通せない(反応—60%)

C
1. 「坊っちゃん」は実在人物をモデルにして書いたと思う(反応—29%)
2. 作者は坊っちゃんのような気持になりたいと思って書いたと思う(反応—34%)
3. 「赤シャツ」の方が作者の関心をひき，その人物を考えてみたいと思って書いた(反応—3%)
4. 生一本な坊っちゃんが怒るような，間違いの多い社会を書こうと思って書いた(反応—34%)

D
1. 山嵐は正義心が強く，坊っちやんに似ていると思う(反応—71%)
2. 赤シャツは，正義を好む(反応—16%)
3. 坊っちゃんはまじめで義狭心にとむが，やや軽卒である(反応—11%)
4. ばあやの清は，いばりやで，いじわるだ(反応—3%)

先ず問題A・Bの反応をみると，文字抵抗が大きく，そのために読み通せないという生徒の多いことが目立つ。そのためか，問題Dの作中人物の性格はかなりよく捉えているが，問題Cの作者の意図である4に反応した生徒は必ずしも多くはない。

③「坊っちゃん」を読んで興味をひかれたか。

1. 読んでいるうちに，坊っちゃんの気持になり，まわりの人や中学生の気持を考えて愉快になった(反応—37%)
2. 自分が読んだ本のうちでは，普通のおもしろさだ(反応—37%)
3. 読んでも別におもしろいとは思わないし，感想もない(反応—18%)
4. 多くの人の気持が，よい勉強になった。反応(8—%)

これでみると，この作品はむずかしくても，4割ぐらいのものには関心が持たれ，味わわれていることがわかる。

④「坊っちゃん」から，さらに進んだか。

1. 「坊っちゃん」がおもしろかったので，漱石の他の作品も読んだ(反応—5%)
2. 「坊っちゃん」がおもしろかったので漱石の他の作品も読みたいと思った(反応—48%)
3. 「坊っちゃん」はおもしろくなかったが，勉強のために，漱石の他の作品も読むつもりだ(反応—21%)
4. 「坊っちゃん」はおもしろくなかったので，漱石の他の作品を読む気はない。(反応—29%)

これでみると「坊っちゃん」が刺戟になり，漱石の作品に対し，積極的な意欲を示すようになったものが，約半数いる。とくに，わずか5%にすぎないが，すでに漱石の他の作品を読むにいたっている。

⑤「坊っちゃん」を読んで，何を考えたか。

1. 「坊っちゃん」は，正義のためにあばれた(反応—13%)
2. 坊っちゃんの気持はわかるが，もっと考え深く行動すべきだ(反応—37%)
3. 坊っちゃんのように，学生の集団けんかに入ったり，人に生卵を投げるのはみっともない(反応—5%)
4. 社会には不正が多いので，坊っちゃんのような場面にであったなら，坊っちゃんのような気持になり，改善を考えたい(反応—45%)

これでみると，「坊っちゃん」は約半数の生徒に社会正義に対する考え方を植えつけ，作品の生活化が行なわれている。

以上は，必読書の読後調査の一例である。これにより，読書がどのように行なわれ，また読解鑑賞はどのようになされたかという点について，その大要を知ると共に，指導上の示唆を把えることができよう。

必読書指導を中心にして，この他にも種々の読書指導が行なわれている。読書ノートの作製，文集の発行，校内放送利用による指導，読書会，図書館活動などがそれである。こうした立体的な指導の効果は，たとえば読書量の増加や，読書内容の質的向上にも現われている。すでに，基礎調査のところで述べたように，昭和31年度においては，一人一カ月当りの読書量は，2冊強であった。しかも読書内容は，マンガ本・少年少女雑誌・伝記の順で，質的にもすぐれていない。それが，昭和33年10月の調査においては，伝記・少年少女小説・冒険探偵物語が多く，これらは単行本で読まれるようになっている。また，昭和34年6月に岡本が調査したところによると，一カ月の読書量は，単行本だけでも2年生で平均2.3冊，3年生で3.8冊と飛躍的に多い。(この結果は，読書科学12号に岡本の執筆した「小・中学生の中断読書に関する研究」を参照いただきたい)

6. 結び

これまで，鶴嶺中学校における読書力向上に関する教育実験の概要にふれてきた。その詳細は，同校発行のパンフレット「読書力向上についての研究」に集録されている。この研究の中では，「読字指導の教育実験」はすでに完成しており，難読文字を中心とする，効果的な読字指導の方法も示されている。語彙指導においては，教科別・学年別学習語彙表の作製は，注目すべきアイディアといえよう。これをどう活用するならば，どのような学習効果が得られるかについては，目下実験中であり，今後の資料に期待したい。必読書を中心とする読書指導については，すでにその効果を確認する資料が2,3現われ，明るい見とおしがある。しかしながら，それらは指導法の改善を目的とする中間的資料といえよう。したがって，その指導法の確立と，指導効果を確認する総合的評価とは，今後にのこされた課題といえよう。(立正学園女子短期大学　岡本奎六)

会　　報

常任理事会（12月28日）

審　議

1．秋田支部（代表・佐藤宏之助理事）の設置を承認。

2．会員の研究費補助について，次の3件に各1万円ずつを承認。

イ）佐藤宏之助（秋田）……読書実態調査

ロ）松本武他（東京）……小学校の新指導要領による読書指導

ハ）中野哲二（鹿児島）……農村の生計よりみた文化教養費支出の特質について——特に図書費を中心として——

3．文部省科学研究費申請について，次年度も継続申請をすることに決定。

常任理事会（1月22日）

報　告

1．毎日新聞社が賛助会員として入会した。

審　議

1．科学研究費申請の具体案について，

2．実行中の三研究分科会への研究費配分について。

編集会議（2月11日）

1．読書科学14号の編集

庶務理事会（2月12，18日）

1．科学研究費申請書の作成

読書科学（第4巻）総目次

○印は原著，＊印は資料

		通巻頁
読書時言	古谷綱正	257
非読書人的読書人	土岐善麿	321
総　論		
○読書科学における児童文学序説(3)	黒田映侑	288
＊読書の研究と指導	ローラ女史講演の要旨	309
＊マス・コミの中の読書とその調査について		368
○中学生の読書生活を後退させているもの	松田鉄夫	406
○新しいマス・コミ時代の新しい読書	黒田映侑	429
○読書における変革の理論	松村康平 板垣葉子	449
読書活動		
○幼稚園児のリテラシー	村石昭三	280
○交友と読書	青柳幸一	294
○読書中の情緒の測定	宇留野藤雄 阪本敬彦	324
○小・中学生の中継読書について	岡本奎六	344
○小学生における多読児と不読児との性格の比較研究	阪本一郎	385
○読書による人間形成への一視角	尾崎正悳	480
○マスコミ材料の研究	佐藤貢	485
○農家のマスコミ接触	庵逧巌	491
＊鶴嶺中学校の読書力向上に関する教育実験	岡本奎六	505
読書材料		
○川端康成における人物描写	波多野完治 中村明	260
○読み易さの研究——クローズ法の応用——	波多野完治 小笠原生子	336
○低学年向児童雑誌の内容分析	水野寿美子	394

＊子どもの本における物語と絵について（抄訳）	田中博正	378
○「こどもの週刊誌」の読者の姿	河北憲夫	477
＊高等学校標準書目の研究	宇都宮女子高等学校	497
読書能力・興味		
○小学生の漫画の興味	阪本一郎	352
○読書力診断テストにあらわれた中学生の国語力	山崎一朗	361
○読書力に関する一考察	永沢幸七 福沢周亮	435
指導技術		
○読書不振児の読解指導	大熊喜代松	298
○一年生の読書力を育てた指導の実際	白石璋子	302
○読書資料の連関性ということについて	飛田文雄	331
○小学校の新指導要領における読書指導	東京都九小学校グループ	400
○読書開始期の指導	青木照明	417
○文学作品鑑賞力の評価法	読書教育部会	453
書評・紹介		
＊児童文学賞(1)	渡辺茂男	312
＊　　(2)	渡辺茂男	442
＊高校生は流行書をどう読んでいるか(1)		313
＊　　〃　　(2)		373
＊読書時潮		382, 444
会員随想		307, 366
会　報		320, 384, 445, 510

日本読書新聞

<週刊月曜日発行>
御申越次第見本呈

☆好評の連載
東日本と西日本
小浜基次文
松川八洲雄画
近代作家像への照明

◇四頁にわたる公正な書評
◇社会科学・文学芸術・子ども教育・一般教養・自然科学
青年・学生の各欄
◇文化評論のするどいセンス
◇おもしろい読物・ずいひつ
◇追随ゆるさぬフレッシュな映画欄
海外ニュース・論壇時評・文芸時評
推理小説月旦・新聞小説月旦
人物スケッチ・研究集団めぐり

一九五九年合本出来
定価 九〇〇円
送 一〇〇円

購読料
一カ年 七五〇円
六カ月 三八〇円
三カ月 二〇〇円

定価
八頁 二十円
四頁 十円

東京都文京区小日向水道町六
振替東京五六九七六番 電話(941)六〇〇四
日本読書新聞

牧少年少女文庫

1	ピツケルの思い出	槇有恒	¥180
2	少年少女のための人生読本	稲垣友美	¥220
3	ぼくの野球コーチ	川上哲治	¥200
4	つづりかた現代の歴史	滑川道夫	¥280
5	海底旅行	佐々木忠義	¥230
6	成績のあがる勉強法	小口忠彦	¥280
7	動物となかよしになるには	林寿郎	¥250
8	少年少女のための美術教室	須田寿 菱田安彦	¥270
9	世界の人びと	松岡洋子	¥230
10	南極の一年	立見辰雄	¥280
11	少年少女のための論理学	沢田允茂	¥270
12	自然をつくりかえる	大谷省三	¥230
13	空気の探検	三宅泰雄	¥200
14	ぼくも人間きみも人間	吉野源三郎	¥200
15	これからの化学	田中実	¥230

受賞
毎日出版文化賞
産経児童出版文化賞

推薦
全国学校図書館協議会
中央児童福祉審議会
NHK読書委員会

牧書店版

実践講座 国語教育 全10巻

修 第1巻 国語教育の原理
第2巻 国語科の指導計画
監 第3巻 国語学習指導の方法 三九〇円
記 第4巻 聞くこと話すことの
誠 学習指導
枝 第5巻 読解指導
時 第6巻 読書指導
実 第7巻 作文指導
尾 第8巻 書写指導
西 第9巻 ことばの指導（文法）
第10巻 国語学習指導の諸問題

滑川道夫 新しい国語教育 三五〇円
平井昌夫 国語教育ハンドブック 一四〇〇円
阪本一郎 教育基本語彙 七八〇円
江湖山恒明 国語表現論 一二〇〇円
片岡並男 文法指導の実際 四八〇円
片岡並男 文法と表記法の要領 五八〇円
倉沢栄吉 作文の教師 三九〇円
柳内達雄 作文指導の技術 二八〇円

講座 文学教育 全3巻

文学教育の会編
第1巻 目的と方法 三〇〇円
第2巻 歴史と現状 三〇〇円
第3巻 実践的構想 三〇〇円

阪本一郎 読書指導ハンドブック 八五〇円
滑川道夫 読書指導 七八〇円
日本読書学会 読書による人格形成 五八〇円
石山脩平 波多野完治 阪本一郎 読書とマスコミュニケーション 二九〇円
阪本一郎 学校の図書館 七五〇円
原田実 ヨーロッパ近世教育思想史 四五〇円
石山脩平 教職者の倫理 二三〇円
須藤克三他 村の社会教育 二五〇円
勝田守一他 集団教育 二八〇円
勝田守一他 教職の専門性 三九〇円
村井実 ありの本 二三〇円

道徳教育実践講座 全8巻

稲富栄次郎 遠藤五郎 勝部真長 阪本一郎 滑川道夫編
第1巻 道徳教育とは何か
第2巻 道徳教育の内容と方法
第3巻 道徳教育の指導計画
第4巻 家庭における道徳指導
第5巻 一二年生の道徳指導
第6巻 三四年生の道徳指導
第7巻 五六年生の道徳指導
第8巻 中学生の道徳指導
各 三三〇円

勝田守一 高校生の道徳生活 三〇〇円
日高六郎 社会生活と道徳教育 二四〇円
長田新 道徳教育の根本問題 二二〇円
古谷綱武 母親の道徳 二五〇円
小口忠彦 教科学習の基本的習慣 四八〇円
藤原安治郎 実践図形教育 六八〇円

Vol. IV, No. 4 March, 1960

THE SCIENCE OF READING

Edited by **The Japanese Society for the Science of Reading**
c/o The Faculty of Education,
Tokyo University of Education, Japan
President : Shuhei Ishiyama

昭和三十五年三月三十日発行（年四回発行）
昭和三十一年十二月二十七日国鉄特別扱雑誌 第三三七三号

CONTENTS

Original Articles

Theory of Revolution in Reading
Kohei Matumura & Yoko Itagaki 1

Some Methods to Evaluate Literature Appreciation
Reading Education Study Group, JSSR 5

A Profile of Readers of the Children's Weeklies
Norio Kawakita 29

An Angle of View on Reading for Personality Formation
Masanori Ozaki 32

A Study on Teaching Materials concerning Mass-Gommunication in High School Text-Books of Language *Mitugu Sato* 37

How Are Farmers Approaching Mass-Communication
Iwao Anzako 43

Materials

A Study on the Standard Readings for the High School Students by Utunomiya Girls' High School 49

Official Notes 62

第4巻 第4号 定価 120円
<通巻第14号>
昭和35年3月28日 印刷
昭和35年3月30日 発行

東京都文京区大塚窪町24
東京教育大学教育学研究室内
振替東京3213番
編者 日本読書学会
代表 石山脩平

発行者 東京都新宿区揚場町1
牧義雄

発行所 株式会社 牧書店
東京都新宿区(牛込局区内)揚場町1

IBM 6655 印刷・文教印刷株式会社